にして、且つ永續的價値ある道德なることを意味せざる可からず。」（國民道德史論）

※神道（しんたう）　神道には二つの意義がある。第一は、惟神の道、皇道であつて、敬神尊皇の旨を體し、天理人道を明らかにすることを理想とする我が國固有の敎である。作者は、日本民族の傳統的信念及び情操なりといつてゐる。「神道とは要するに皇祖皇宗の遺訓としての皇道であり、日本民族の生活原理としての日本精神であり、日本人のやまと心の純眞な姿とはたらきとである。それ故、それは西行法師の所謂『かたじけなさの涙』であるとも見られ、藤田東湖の所謂粹然として神州に鍾る天地正大の氣であるとも考へられる。而して最も簡明適切に之を言ひ表はすならば、神道とは日本民族の傳統的信念及び情操であると云はねばならぬ。……即ち神道は日本人の國民生活の規範であるが、この生活上の規範を更に具體的に示された最も力强いものは、歷代の詔勅である。特に明治天皇の渙發された帝國憲法、敎育勅語、戊申詔書は、極めて適切な日本國民の具體的な生活規範である。帝國憲法も、敎育勅語も、戊申詔書も神道に外ならぬのである。換言すれば神道の根本はそこに在るのである。」（國民道德本義）

第二義は宗敎としての神道である。明治七八年の頃から漸次獨立の組織を執り來つた神道には、神道本局、大社敎、扶桑敎、大成敎、實行敎、黑住敎、修成派、神習敎、御嶽敎、禊敎、神理敎、金光敎、天理敎の十三派があつて、神道の總稱の下に、佛敎及び基督敎と同じく宗敎局の管理を受けつゝある。

世人の中には、純粹の神道（古神道）と宗敎としての神道とを混同し、信敎の自由といつた立場から、

神道を自己の精神生活と無關係に考へる者も多い。勿論、第二義の神道即ち天理敎とか、金光敎とかを信仰するしないは隨意であるが、第一義の神道は國民生活の道德的規範であるから、何人と雖も無視出來ないのである。否、日本精神を有する日本人の心には、神道とは意識しないまでも、神道の精神を心底に湛へてゐる譯である。なほ神社對宗敎問題に就いては、參考篇に揭げて置く。

※畢竟（ひつきやう）　つまるところは。はては。

※原理　principle. 物事の基礎となり根本となり、その秩序發生を規定する條理。

※傳統的信念　傳統は系統をうけつぐこと。又うけつたへた系統。信念は信仰の念。自信力、代々うけつたへて來たところの信仰の念。

※看破（かんぱ）する　見やぶる。見ぬく。「破」は讀破、說破といふ破と同じく、意味を强める爲の接尾語で意味はない。

※風靡（ふうび）　風の草木をなびかす如く、威風を以て民をなびき從はしめること。ここは學說を以て衆を服する意に用ひてゐる。

※本居宣長　享保十五年六月七日生。幼名富之助、通稱は彌四郎、後銀鐵、春庵、中衞等と改めたが、宣長の名を以て最も著れてゐる。別に鈴屋と號した。幼より讀書を好み、性强記絕倫、長じて京都に遊學し、堀景山に儒學を學び、醫術を武川法眼に受けた。嘗て賀茂眞淵の冠辭考を讀んで大いに悅び、奮然志を立て、遂に眞淵に書を送つて敎を請ひ、それより古い文獻を研究した。彼の名聲天下に轟くに及び、弟子五百餘名に達した。後紀州侯に仕へ、國政に參與した。享和元年（二四六一年）九月二十五日歿、

年七十二。明治十六年二月贈正四位。三十八年十一月更に從三位を贈られた。著書は神代正語、歴朝詔詞解、宇音假名遺、古今集遠鏡、源氏物語玉の小櫛、玉勝間等數百篇、中にも古事記傳は三十餘年を經て大成した畢生の力作とされてゐる。

※敷島のやまと心を云々　この歌はあまりに有名な歌で、解釋するまでもあるまい。下句に「と我は答へん」と附けてみるといい。「敷島の」はやまと（大和）に冠する枕詞。「匂ふ」はかをるといふ意ではなくて、はえる（映る）といふ意。

※たゝへる　ほめたゝへる。

※發揮　あらはし示す。ふるひおこす。

※ひたすらに　一途に。一向に。專心に。

※主張　自分の意見などをいひはかること。

※單純　まじりもののないこと。單一で少しもこみ入らぬこと。

※嫌味（いやみ）　相手のものに不快の感を起させる言語、態度。

※毒々しい　いかにも毒があるらしい。にくゝしい。しつこくくどい。ここは最後の意があたる。

※雅やかな　優雅な。上品な。卑俗でない。

※明るく、淨く、直き心　宣命、祝詞などによくいはれた言葉である。智に敏く汚れなく正しい心といつた意。

※一途（いちづ）に　一筋に、一向にの意。

※人性　人の性質。「人性の自然に存する」は、人の性質に本來自然にあるの意。

※神社は神道を形に生かした經典　譬喩を用ひて神社の特質を端的に言表したもの。即ち神社は神道を形に現した尊い書物であるの意。「經典」は、神の教を記した書物。作者はまた、同樣の言表し方で、「神社は生きた修身教科である。」ともいつてゐる。

※簡素　簡略質素で、飾り氣のないこと。

※尚ぶ　重んじる。尊ぶ。

※五十鈴川（いすゞがは）　三重縣度會郡大床山に發し、宇治山田皇大神宮の神域を過ぎて、北流四里、二見に至つて海に入る。別に御裳濯川（みもすそがは）ともいふ。

※鎮坐ます　鎮坐は神靈がその地に鎮まりますこと。「ます」は「ます」（ゐる、在りの敬語）を尚一層敬つていふ語。おはします。

※皇大神宮　三重縣宇治山田市に在り、いふまでもなく天照大神を祀る。豐受大神を祀つた外宮に對してそれを內宮といふ。我が國最高至貴の神祠で、社格を超越してゐる。宮域は六十七町餘、附屬の神苑九千六百餘歩、七別宮、二十五座の攝社、十六座の末社があり、東南に神路山を控へ、五十鈴川はその麓をめぐつてゐる。第十代崇神天皇の御代（六年）神鏡を大和國笠縫邑に遷し、皇女豐鍬入姫命をして奉齋せしめられたのが起源で、後八十餘年を經、第十一代垂仁天皇の二十五年（皇紀六五六年）皇女倭姫命をして鎮坐の地を求めしめた結果、伊勢度會の地に大宮を定められた。それが今の皇大神宮なのである。もと大神宮の「大」の字は點のある「太」の字を用ひたのであるが、明治五年九月十五日太政官の布告によつて「大」の字に定められた。

※西行法師　俗名は佐藤義清（のりきよ）。藤原秀郷九世の孫。左衞門尉康清の子。代々武を以て著れた。義清も亦勇敢で弓術をよくし、鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左衞門尉に任ぜられたが、常に名利を喜ばず厭離の心を抱いてゐた。遂に保延六年嵯峨に至つて剃

髮し、西行又は圓位と號した。時に年二十三。爾來專らその天性好むところの歌道に沒入して自然を友とし、東西に漂遊した。晩年は洛東雙林寺邊に草庵を結んで閑居し、建久元年（一八五〇年）二月十五日、七十三歳で入寂した。家集を山家集といふ。

※なにごとの云々　一首の意は、どんなに貴い神樣がおいでになるのか知らないが――實は知らないのではなく、そんなことを考へる人間心が出ないのである。餘りに嚴肅な感にうたれて――宮の大前に出ると、たゞ有難いやら勿體ないやらで、ぽろ〳〵と有難涙にくれるばかりであるの意。出典は異本山家集。

※情操（じやうさう）　英語 sentiment. 情緒の一層進歩したもので、高尚な觀念に伴なつて發する最も複雜な感情。卽ち眞理をたふとび、道德に從ひ、藝術を愛する如き感情をいふ。高等感情とも呼ばれてゐる。普通には知的情操、道德的（社會的）情操、宗教的情操、美的情操の各種に分れる。

※淺みどり澄みわたりたる云々　御題は「天」。明治三十七年の御作。「淺みどり」は薄い綠色に、薄綠にの意。「澄みわたる」はすうつと一面に雲もなく澄み晴れた。「おのが心ともがな」は自分の心ともしたいものであるわいの意。「がな」は助詞。強い希望の意を表はし、過去の助動詞「き」の連體形「し」や、助詞「も」に附く。（用例――今一たび見てしがな。あはれ紅葉を燒かん人もがな。）一首の意は、今更說くまでもなく明らかだ。先の「さしのぼる朝日のごとく云々」の御製と共に、その雄渾流麗、淸新颯爽の調、中にこめられた大御心、眞に日出づる國の大天子にふさはしい御製である。

※御詠　陛下又は殿下御作の詩歌をいふ。ここは御製の意。

※拜誦（はいしよう）　讀むことの敬語。

※大御心　天皇の「御心」。「大御」は或語に冠して尊んでいふ意を表す接頭語。大御燈、大御門、大御寶、大御食等の「大御」はいづれもその例である。

※因む　因緣する。よる。

※挿話（さうわ）　文章又は談話の間に挿む短い話。英語の episode である。

※御一年祭　崩御後、滿一年に取行はれる祭式。佛家の一周忌（一回忌）にあたる。ここは大正二年七月三十日であつた。

※遙拜式（えうはいしき）　遙拜の式。遙拜ははるかに離れた所で神佛などを禮拜すること。

※伏見桃山　京都市伏見區の町名。舊伏見市の東南、東山連峯南端の丘陵地で、南方は宇治川の低地に臨む。明治天皇、昭憲皇太后の御陵の所在地として有名である。乃木神社もある。

※祭壇　祭事を行ふ壇。まつりのには。

※榊葉（さかきは）　榊の葉。神事の際、祓を行ふ時、榊の葉に幣をかけて用ひる。榊は山茶（つばき）科の常綠喬木。高さ一丈乃至四丈に達する。樹皮は綠色を帶びた紫黑色、葉は互生し、長楕圓狀倒卵形で尖頭全緣、革質で厚く、深綠色で光澤がある。五六月頃葉腋に淡黃白色の細花を綴り、球果を結ぶ。

※徐（おもむろ）に　しづかに。ゆつたりと。

※生薑（しやうが）　茗荷科の多年生草本。廣く栽培される。根莖は黃色、辛味があり食用となる。

※目擊する　目にとまる。みとめる。

※涙ぐましい感に云々　感激して自然と目がしらが

熱くなる。思はず涙ぐむほど深い感激を受けたの意。

※たゝへる　塞いで滿たす。溜め滿たす。

※眞價を發揮する　ほんたうの値打を現す。

注　意

本課の文體は教材として比較的珍しい「であります體」である。依つて文體に就いて簡單な解說を施されるのも、また無意義ではないであらう。

文體といふのは、文章の形態、若しくは姿といふことである。文體といつても、見方によつて色々に分類することが出來るが、普通の分類は、文章の樣式如何、主として文尾の如何に着目せる分類である。これに從へば、文體は文語體と口語體とに大別される。そして文語體を「なり體」と「候體」とに分ち、口語體を常體と敬體とに分つて、常體に「だ體」「である體」、敬體に「です體」「であります體」「でございます體」がある。これを圖表に示せば次のやうになる。

- A文語體
  - なり體
  - 候體
- B口語體
  - 口語常體
    - だ體
    - である體（講義體）
  - 口語敬體
    - です體
    - であります體（兵語體）
    - でございます體（口上體）

文語體のことは暫く措く。口語體に就いていふと、「だ體」から「でございます體」へ、左へ移るに從つて、丁寧の度が加はるのである。括弧內は谷崎潤一郎氏が、「文章讀本」に試みた命名である。「である體」は、今日一般に最も普及してゐる口語文である。「である體」即ち現代文と稱しても過言ではない。谷崎氏はこれを、教師が教壇に立つて講義する場合に普通であるとして、講義體と名附けた。「です體」も、今日相當に行はれてゐるが、文法學者の中には、これを下品なりとして擯斥する人もある。「であります體」は、幾分儀式張つた感じもしないではないが、禮儀深い慇懃な心持が籠つてゐる。故に「である體」よりも優しみや親しさがある。「である體」ほど廣く行き渡つてはゐないけれども、なほ相當に實用化されてゐる。このいひ方は、軍隊に於て兵士が上官に物をいふ時に用ひられるので、谷崎氏はこれを兵語體と名附けた。「であります體」よりも一層丁寧ないひ方が、「でございます體」である。丁寧の點では申し分ないが、餘り廻りくどくなる嫌ひがある。このいひ方は、都會人が改つた席へ出て口上を述べ、挨拶を交す時に用ひられるといふので、谷崎氏はこれを口上體と名附けた。

資料篇

參考研究

我が國では、敬神崇祖といふことを以て、國民の道德生活の基礎としなければならぬといふ事が常に言はれてゐるのである。さうすれば、敬神觀念の對象をなす所の神社は、益々重んぜられなければならない。大正の半ば以來、神社對宗教問題も起つたが、今日では朝野共に神社崇敬の熱は盛んである。來朝外國人も神社を讃美し、日本精神の本源茲に在りと見てゐる。我々は神社崇敬の美風を一層盛んにして、國民精神の涵養に資すると共に、神社そのものの理解を忘れてはならない。直覺的理解より自覺的理解へ進む時、神社崇敬の念は愈々鞏固となるのである。左に掲げる河野博士の一文は、「神社の特質」を簡明に說いたもの、その概略を知ることが出來よう。

神社對宗教問題を解決するのには、先づ神社と宗教とがよくわからねばならぬ。神社とは如何なるものか、宗教とは如何なるものかが判然しないで、神社と宗教との關係を判斷しようとするのは、恰も自分の行先を知らないで、自分は何處へゆくのかと尋ねると同じである。抑も宗教といふものは、教義を基として、社會的に特殊の發達を遂げた現象をいふのである。宗教は宗旨の意に解かねばならぬ。神社に宗教的要素があるから宗教だとはいへぬ。あなたの身體には骨がある。故にあなたは骨だとはいへない。神社にはいろ〳〵の大切な要素があつて、それが日本民族の生活と一體となつて發展して來てゐるのである。今それを分解して述べてみよう。

（一）神社は日本民族の宗教的信仰の對象である。

日本民族の本來持つてゐる宗教的信仰の對象が神社となつてゐる。基督教や佛教によらずとも、純なる宗教的要素はあるから、これによつて滿足は出來る譯だ。その純なる宗教的要素を持つてゐるものが神社である。

（二）神社は日本國民の道德的觀念を基礎としてゐる。

日本人は我皇室を尊び、國家の益々隆盛ならんことを神社に祈る。神社には皇室の御繁榮を計り、國家の隆昌に盡した方々を祀る。更に職業そのものを尊重し、その職業を始めた方をも神として祀る。これらの道德觀念が神社の基礎をなしてゐる。

（三）神社は日本人の生活意識を背景としてゐる。

神社の祭は陽氣である。日本人の生活意識を味へば、神社の本質がよくわかる。太鼓の音、擊劍の竹刀の響は、神社にはよく似合ふ。誠にふさはしいものである。神社の祭には生々發展を望む。日本人の心持を味つてみると、一括して大和心といへる。この大和心が、我ら日本人の心の底に流れてゐる精神生活の眞髓である。本居翁は「敷島の大和心を人問はば、朝日ににほふ山櫻花」と詠んでゐるが、如何にもよく云ひ現してゐる。

（四）神社は日本民族の鄕土觀念の中心である。

神社は我々の鄕土、卽ち產土に鎭座する產土樣である。我々を氏子として立つてゐる氏神である。部落の心を纒めてゐるお宮である。村の生產と平和と幸福とを守護して、生里の賑ふ鄕と賴みまつる、希望の輝く所である。子供連も若い衆も、その社頭から少年團となり、青年團となつたのである。子が生れても、男女が結婚しても、壯丁が入營しても、兵士が凱旋しても、商賣が繁昌しても、他鄕に出稼しても、或は鄕土藝術でも、スポーツでも、土地の傳說でも、役場の建設でも、或は瓜が出來ても、俳句の會があつても、國家の慶事があつても、日本人の心は必ず氏神樣を思ひ起し、その鄕土觀念は直ちに鎭守樣に結びつけられる。この神社を中心とした鄕土觀念こそ、實に我が獨得の自治體觀念である。

（五）神社は歷史と習慣とを尊重する。

神社は國家の歷史と習慣とを尊重し、鄕土の歷史と慣習とを尊重し、又神社それ自體の歷史と習慣とを重んずる。

（六）神社は我國の政治と密接の關係を有する。

神社程、政治と關係の深いものはない。神祇史を一册讀むとよくわかる。我が國の政治とは切つても切れない關係をもつてをるのである。

一三　朝（詩）

川路柳虹

解說篇

作者

川路柳虹（かはぢりうこう）。詩人で美術批評家である。本名を誠といひ、明治二十一年七月、英學者たる寛堂を父として東京市芝區三田豪町に生れた。父は川路聖謨の孫に當る。父に伴なはれて幼少時を備後福山及び淡路洲本におくつた。洲本中學校を卒業してから、繪畫に志し、京都の美術工藝學校に學んだ。この頃詩作熱が高まり、畫事との二道に迷つたのであつた。後、上京して、東京美術學校日本畫科に入學、大正二年卒業した。明治四十一年河井醉茗の詩草社に入り、「詩人」の同人となつた。同年九月同誌上に口語體の詩「塵溜」外三篇を發表したが、これは我が國の詩壇に始めて口語詩を發表したもので、これを口火として自由詩運動に新機運が起つた。日本詩史上特筆すべき功績である。明治四十三年第一詩集「路傍の花」を出版、次々に詩集を出した。詩風は、初め佛蘭西近代詩から象徴派詩人の影響を受け、次いで理想的傾向の詩に向ひ、更に現實主義的傾向に向ひ、後、印象的詩風の聯詩をも創作した。詩話會の「日本詩人」の中心人物として、詩壇をリードしてゐたこともある。また大正七年以來、自ら曙光詩社を主宰し、詩誌「伴奏」・「現代詩歌」・「炬火」等を發行し、後進を誘拔したが、昭和四年解散した。昭和三年歐洲に外遊、四年歸朝し、現に一二の美術團體に關與せる外、日佛文化聯絡協會の理事になつてゐる。詩集に、「かなたの空」・「勝利」・「はつ戀」・「蘆の笛」・「曙の聲」・「預言」・「溫室の花」・「歩む人」・「川路柳虹詩集」等があり、飜譯には「ヴェルレーヌ詩集」がある。また美術論評には「現代美術講話」・「現代美術の鑑賞」・「マチス以後」・「コロー」等がある。

引用書

修養文藝名作選。講談社發行の「修養全集」中の一冊である。本書は小說、戲曲、詩文の三部に分類されてゐる。「朝」の詩は詩文の二番目に收められてゐる。「修養全集」は全十二卷、昭和四年三月に大日本雄辯會講談社から發行された。

教材

朝を主題とした文語體七五調の定型詩である。働く者の立場から、麗らかに晴れた朝を謳歌したものである。働く者に取つては、晴れた朝は特に悅ばしい。一日の十分な活動が約束されるからである。そこで、働く者は快晴を賜うた大自然の主宰者に、敬虔な感謝の念を捧げ、元氣一杯に、おのがじゝ生計の道に踏出して行く、さうした生活感情を歌つた詩で、明朗な生活行進曲である。

指導篇

扱方

詩であるから、朗讀に朗讀を重ねて、その感情なり、リズムなりを味はへば、それでよいと思ふ。けれども一應その文脈を解剖して、成分の省略を補ひ、倒置を正して後、大體の通釋を施して、然る後にこれを朗讀すれば、一層の滋味を味はふことが出來る筈である。

展開

四聯づつ四節を以て組立てられた詩。第三節を除き、各節の第一聯は、「朝は晴れたり」の句がある。「朝は晴れたり」といふ感動が全篇を覆つてゐると見られよう。そして、「友よ立て」「汝が胸に」等の句により、友に呼掛ける體裁になつてゐることが知られる。第一節は、空が曇りなく晴れてゐること、その空の色を、「聖者のひとみ」と形容してゐる。第二節は、第一節の空に對する關心を受けて、晴朗の空の彼方に、曉を生みなした神を想像する。第三節の前聯は、純粹の敍景と見るべきで、後聯は工場の汽笛を點し、勞働の讃歌と聞きなしてゐる。第四節は、意味の上からいつて最も重要な節で、生活の建設に雄々しく踏出すべきを勸誘してゐる。左に口語譯を掲げて置く。

第一節——朝は晴れました。友よ、起きなさい。空は遠く澄んで、高い理想に曇りのない聖者の瞳を偲ばせます。

第二節——朝は晴れました。口をすゝいで、この曉の生れて行く空のまん中に神在すと靜かにお考へなさい。貴方の胸の中で。

第三節——日に照されて霞んで見えるもの、それは遠い山々や町の屋根です。今、勢よく響く工場の汽笛の音は、勞働をほめたゝへる歌の叫びのやうに聞えます。

第四節——朝は晴れました。さあ、立上りませう。私たちの行くべき道に進んで行きませう。私たちの頼むのは、自ら生計を立てる自分の力だけです。さあ、「色澄む」を修飾する。空は遠くどこまでも青色に澄んでゐるの意。

解釋

※空ははるかに色澄みて　「はるかに」の副詞は、異論のない所であらう。

※高きおもひ　氣高い心でもよいが、高遠な理想といふのが當るであらう。

※くもりなき聖者のひとみ　眼は心の窓といはれる通り、心の美醜は眼に現れる。「高きおもひ」を抱く、「聖者のひとみ」は美しく輝いて、一點の曇りもない筈である。そこで、空の形容に持つて來たもの。「聖者」は聖人に同じ。知德最もすぐれて萬事に通じた人。萬世の師表と仰ぐべき知德ある人。具體的例を擧げれば、釋迦、孔子、ソクラテス、キリスト等は

※口すゝぎ　口中を洗ひきよめて。「口すゝぐ」は「口そゝぐ」といふも同じ。漢字は「口漱」または「漱」を用ひる。

※さなか　さいちゆう。もなか。漢字は「最中」と書く。

※日に照されて煙る　日が昇つて、相當の高さになると、地上の物體は、その輻射熱を受けて、水分を蒸發する。で、遠くから見ると、煙つて見える。

※山なみ　立並んでゐる山。連山。

※勞働のほめうた　勞働をほめたゝへる歌。勞働讃歌。民謠の中に、勞作歌と稱せられるものがある。これは勞働作業に從ふ者が勞力の統一及び慰安のた

めに歌ふもので、田植歌、草取歌、臼歌、茶摘歌、機織歌、馬子歌、舟歌等はこれに屬する。しかし、ここはその意味ではない。穿鑿せずに文字通りに解すればよいと思ふ。強ひていへば、ラヂオの國民歌謠の或もの（「朝」など）が當るであらう。

※汽笛　汽罐に取附けて蒸氣によつて音響を發せしめる裝置。上部に號鐘があつて、汽罐から細管を通じて來る蒸氣は、狹い環狀の孔から號鐘の薄い緣に向つて噴出し、號鐘内の空氣に振動を起して、音響を出す。汽笛といへば、先づ想ひ起されるのは、「汽笛一聲新橋を……」の、蒸氣機關車のそれである。しかし、ここでは汽車は餘りに突飛であるから、それでなしに、工場の號笛と見るのが至當であらう。

※いざ立たん　ここの「立つ」は蹶起の意。

※みづからのいとなみつくる力　自己の生活を營み維持する力。自營の力。

鑑賞

詩の形式が割合に舊いにも拘らず、清新な感じを與へる。それは平明な言葉を自由に驅使してゐること、及び現實に對する情熱と同時に未來へ飛躍する肯定的精神を内包してゐることに依るものと考へられる。

資料篇

參考資料

本詩と似た題材を扱つたものに、島崎藤村作の勞働雜詠「朝」がある。違ふ點は、本詩が工業地の朝を取扱つたらしいのに對して、藤村氏のは農村の朝である。參考までに左に掲げるが、この詩は「落梅集」に收められてゐるから、明治三十二年頃の作である。大阪放送局では、この詩に曲を附し（小田信吾作曲）、昭和十一年十一月から、國民歌謠として放送した。原詩は十二聯もあつて、餘りに長いので、初めの三聯だけに留めて置く。

朝

朝はふたゝびこゝにあり
朝はわれらと共にあり
埋れよ眠行けよ夢
隱れよさらば小夜嵐

諸羽うちふる鷄（くだかけ）は
咽喉（のんど）の笛を吹き鳴らし
けふの命の戰鬪（たたかひ）の
よそほひせよと叫ぶかな

朝

野に出でよ野に出でよ
稻の穗は黃にみのりたり
草鞋とく結へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ

一四　夏の小暦

田山花袋

解說篇

作者

田山花袋。名は錄彌、明治四年十二月群馬縣館林町字伴木に生れた。土地の小學校を卒へた他には學歷といふ程のものはない。明治三十九年「文章世界」の主筆となり、翌年に至り小說「蒲團」を發表して文壇に一大衝動を與へ、文名亦頓に揚つた。その後「生」・「妻」・「緣」の三部作を始め、「田舍敎師」・「髮」等の小說を發表し、自然主義の闘將として活躍した。晩年に至り宗敎的、哲學的傾向を帶びるに至つた。終生旅を好んで紀行を好くし、その足跡は內地、朝鮮、滿蒙にも及んだ。昭和五年歿す、年六十。今その遺著の全部は「花袋全集」十八卷中に收められてある。

敎材

季節に因んで紀行を以て名のある田山花袋氏の文を揭げた。本課は紀行とはいひ得られないが、作者の如く山川を遍歷して、到るところの景觀に接した人にして始めて語ることの出來る境地が巧みに描かれてある。都市の夏、山嶽の夏、それらをしつくりと一篇に纏めて夏の小暦を語つてゐる本課は文章上、一面からいつて作文の好品題であり好範例である。

指導篇

扱方

本文に扱はれてゐる題材は、題目の示す通り「夏の小暦」である。夏の天候や氣象、夏の行事、さういつたものが淡々とした筆致で趣味深く語られてゐる。日本の夏の樂しさ、夏の情趣といふものをしみ〴〵味はせたいものである。文體は文語文であるけれども、辭句、文脈共に平明で、解義に當つては、何等問題なくすら〳〵と進められる譯である。作文の模範としては、夏の初めから終りに亙る相當に長い期間の事柄が、よく一篇に纏められてゐる點、また天候や氣象の自然的なものへ人事的なものを配して、渾然融和させてゐる要領を學びたいと思ふ。

展開

敍述の推移によつて、次の三段に分けて見ることが出來る。

第一段——冒頭(から)此所にも人住めりやと懐かし(まで)。
夏の暑さについて。夏の晝と夜の興趣。——讀書、晝寢、夕涼等。夏の田舍の情趣。——蚊遣火。

第二段——夏の旅殊にをかし(から)徒に暑さを增すの料たらんのみ(まで)。
夏の旅行について。登山の愉快さ、山と海に對する作者の好み。

第三段——七月中旬乃至下旬より(から)終り(まで)。
夏から秋へかけての天候と氣象の變化。夏の雨の特徴、秋風、雲の色、稻妻等。

解釋

※**七月初旬の曇天は云々**　七月の月初めに曇つた日があると、そのまゝどうかすると月末まで曇り續けてしまふことがある。

※**赫々たる炎威**　「赫々」は明らかに輝くさま。ここは字義と同時に、かつと照りつける陽光を効かせてゐる。炎威は灼きつけるやうな暑さ。

※**茲に至りて**　かうなつてくると……。

※**夏は曇りたるより云々**　夏といへば曇つてゐるよりも赫々と照り輝いてゐる方が夏らしくていい。ここは助詞の「ぞ・なん・や・か」の係結の法則によつて結詞を連體形「き」で止めた形になつてゐる。

※**碧空**　あをぞら。澄みわたつて晴れた青空。

※**さららか**　きら〳〵してうるはしいこと。ここはギラギラと照りつける太陽の光にいつてゐる。

※**金をも鎔さん日**　いかなる金屬、くろがねさへとかしてしまひさうに暑氣のはげしい日。

※**興なきにあらず**　興がないことはない。面白いことである。

※**堆き裡に**　積み重なつてゐる中に。

※**華胥**　ひるね。黄帝が晝寢して夢に華胥といふ國に往き、その太平の狀況を見たといふ故事による。

※**岐阜提燈**　岐阜地方の名産で、盂蘭盆の頃に多く用ひられるので一に盆提燈ともいふ。長卵形で、吉野紙などの薄い紙を張り、涼しげな花や草の模樣などを描いたものである。

※**花ござ**　藺草を種々に染分けて模樣を織出し、又は

捺染して模様をつけた莫蘆。

※だんらん　團欒。親しい者の集合。楽しきよりあひ。まとゐ。

※物語に耽る　物語にふけるのは……の意。

※闇の夜にてもよし云々　その夜が月なしの闇の折であるのもまた面白い。さういふ夜は空に輝いてゐる星を數へたり、北斗星はあれだなどと探し合つたりすることが出來るの意。

※梧桐　あをぎり。落葉喬木。樹幹は直立し、高さ三丈餘、周圍三尺にも及ぶ。樹皮は綠白色、葉は闊大で、夏、五瓣黃白色の花を梢頭につける。

※寒山竹　竹の一種、庭園に栽培される。莖は高さ一丈、直徑一寸餘、葉は强直で細長、長さ五六寸乃至七八寸である。枝が多數一齊に上向するのが特徴である。

※研澄したる鏡　この形容は勿論古代の鏡から出てゐる。銀、銅或は鐵製で圓形の鏡を用ひたので、研ぐこともあつたから、圓い月の澄み切つた姿を形容するのに當てはまつてゐるのである。

※趣深きものなり　趣味深いものである。面白味の多い雅味のあるものである。

※其所とも知らぬ　どこともわからず、どことも知ることが出來ず。夫木抄に「山里は秋のねざめぞあはれなるそことも知らぬ鹿の一聲。」

※ゆくりなく　思ひがけなく。不意に。

※蚊遣の烟云々　蚊遣のけむりが思ひがけないところに立ちのぼるのを見て、あゝここにも人が住んでゐるのかと知つて懷かしく感じられる。

※さうめん　素麵、索麵。さくめんの音便である。小麥粉を水と鹽とで捏ね、胡麻油で細く引延ばして線狀とし、日光に晒して乾かしたもの。茹でて汁につけて食べる。

※食指動く　食指はひとさしゆび。饗應にあふ前兆としてゐる。左傳宣公四年に「楚人獻鼈於鄭靈公。公子宋與子家將見、子公之食指動、以示子家曰、他日我如此必嘗異味。及入宰夫將解鼈、相視而笑。云々。」とある。

※蒼翠　山々の青く藍紫色に見えるのをいふ。

※心既に白雲の上にあり　連山の姿を遙かに望み見ただけで、もうその山を攀ぢて高く雲の上を歩む樣な快さにうつとりしてしまふ。

※言ふを俟たず　いふまでもない。解りきつたことである。

※磊々（らい〳〵）　石のごろ〳〵と多く重なつてゐるさま。石の多くあるさま。

※天下を小とす　孟子盡心上篇に「孟子曰、孔子登東山而小魯、登太山而小天下。」とあるのに據つて書いてある。

※御嶽　飛驒・信濃の境上にある休火山。日本アルプス南端の雄峯で、北は乘鞍嶽、東は木曾谷を隔てて木曾山脈に對し、西は飛驒盆地に裾を引いてゐる。山頂には數箇の火口跡があり、一ノ池から五ノ池までの火口湖を湛へてゐる。三の池は海拔三〇〇〇米、我が國第一の高山湖である。最高峯劍峯は一ノ池の東壁をなし、ここに御嶽神社の奥院があつて、夏季參拜者が多い。標高は三、〇六三米である。

※駒ケ嶽　長野縣の南部木曾山脈中の山。前及び南駒ケ嶽の二部に分れ、兩者の間は嶮峻な山脊で連つてゐる。標高二九五六米。

※白馬嶽　日本アルプス北部の最高峯。越中・信濃の

國境に聳え、大雪渓、お花畑の美はアルプス中最もすぐれてゐる。標高二九三三米。

※槍ケ嶽　その尖峯が槍の穂先に似てゐて、アルプス展望の好目標となつてゐる。四方に雄大な尾根を引き、上高地、中房温泉、蒲田温泉等から登る。標高三一八〇米、蓋し飛驒山脈中の最高峯である。

※立山　日本アルプスの西北に連なる雄峯。雄山（二九九二米）を主峯とし、淨土山・大汝山（三〇一五米）・別山から成る。西側面の彌陀原の一帶は冬季積雪四米にも及びスキー場として名がある。

※嵐氣　蒸し潤ふ山の氣。

※分蘖（ぶんげつ）　實生の植物が漸次發育して或る時期に達し、その周圍に數多の新芽を出すこと。

※土用　暦で十八日を一季とした季節、一年に四回ある。ここは夏の土用（小暑後十三日より立秋に至るまで）をいつてゐる。

※沛然（はいぜん）　雨の大いにふるさま。

※氾濫（はんらん）　水のみなぎりあふれること。水のはびこりひろがること。

※歐陽修（ぉうやうしう）　宋代の政治家・學者。字は永叔、醉翁と號した。仁宗の時翰林學士となり、兵部尚書に進んだ。神宗の世王安石の新法に對し大いに反對した。熙寧五年（西紀一〇七二年）歿す、年六十六。謚を文忠といふ。文を以て鳴り、唐宋八大家の一人に數へられてゐる。

※秋聲賦（しうせいのふ）　歐陽修の作つた文章の名。天地物象の變態、春より夏、夏より秋となり、窮まらざるを述べて、終はこれを人生の憂感、時と俱に變ずるに歸してゐる。「詩法源流」にこれを評して曰く、「歐陽が秋聲、坡公が赤壁等賦、已に變化を極めて、起承轉合截然亂れず。」と。その辭に「歐陽子方夜讀書、聞有聲自西南來者、曰、噫嘻悲哉、此秋聲也、胡爲乎來哉云々。」と。秋聲賦の全文は、「古文眞寶後集」に載せてある。

※雲の色と態と云々　秋になると雲の色が夏とちがつてうつすらとしてくるし、その形も流れたやうなさまになつて來て、夏の雲とはやゝその樣子が違つてくる。

※奇峯漸く少く　眞夏の頃のやうに入道雲が出たりしなくなつてくる。眞夏の大空にはよく綿を積んだやうな層々たる雲塊が、恰も亂山の群立するが如き物凄さを以て、ぢつと聳え立つてゐる。これは夏の烈日に特有な積雲で、俗に「雲の峯」とも、入道雲ともいつてゐる。「奇峯」はそれをいふ。

※稲妻　空氣中の放電によつて生ずる閃光。この頃に見える稲妻は雷鳴を伴なはないことはいふまでもない。

一五　山嶽の日本

大町桂月

解說篇

作者

大町桂月。名は芳衞、明治二年二月高知市に生れた。第一高等學校を經て東京帝國大學國文科を卒業したが、在學中既に文名をうたはれ、卒業後、武島羽衣、鹽井雨江氏等と共に文集「花紅葉」を出して後、「黃菊白菊」によつて文は桂月とまでいはれるに至つた。三十二年島根縣簸川中學校に赴任、その後博文館に入つて「中學世界」を、富山房に入つて「學生」を主宰し、趣味と教訓を玉の如き麗筆に托して數多く發表した。生涯を好める文と酒と山水にひたし、遂に大正十四年青森縣蔦溫泉の旅宿に終へたのであつた、享年五十七。その著はすべて「桂月全集」十二卷に收められてゐる。なほ昆蟲學者、農學博士大町文衞氏は氏の令息である。

引用書

近年の我輩。桂月の隨筆集。大正十四年、東京、興文社發行。近年の我輩、自然と我輩、人物と我輩、酒と我輩、馬鹿珍傳、家訓等六項三十五章から成つてゐる。

教材

前課「夏の小曆」の中には夏の旅、殊に登山のことが書いてあつた。それと關聯させて、本課「山嶽の日本」を設けたものである。本課は文章家として明治から大正へかけての特異な存在であつた大町桂月氏の日本の山嶽に關する感想文である。

東洋風の氣骨のあつた作者は、人を對手とするよりも、虛僞のない自然を對手とすることを好んだ。そして、半生を旅行と登山に過したのであつた。折さへあれば、山へ出掛けて、山の豪莊、尊嚴、神祕の中に起臥した。だから、最もよく山の美に接し、山の生命に觸れることが出來たのである。この文はさうした作者と山との深い親和から生れたものである。この文は或日の或山嶽での紀行を描いたものではない。作者の多年の旅行生活から泌み出た體驗の總括である。作者の眼から見た日本の山嶽の特色や美しさが、大觀的に繰り擴げられてゐるのである。

指導篇

扱方

作者の才筆を通じて、日本の山嶽の特殊性や美觀を知らせることが第一の目的であることはいふまでもない。次に作者の立場と文章上の特徵を知らせたい。作者は日本的な文學者であつたので、その個性が自然この文に現れてゐるのである。これを念頭に置けば、第一節の國土の狹少を辯護してゐる點などは、自ら納得されるであらう。作者の文體に就いては「參考篇」の所に詳しく述べるが、要するに飾り氣がなく、漢語と俗語とをよくこなして用ひてゐるので

ある。それでゐて少しも不自然さがなく、却つて一種の風格を生んでゐるのは、作者の人格と教養とによるものであらう。題材もやはり、作者の東洋風の自然觀を反映してゐる。湖の仙境とか、山の幽邃味、幽玄味等を讃へてゐるが、それ等はすべて漢詩に扱はれる境地である。作者ならでは描き得ないかうした山の詩境を味ははせたいものである。

展開

敍述の推移によつて次の九節に分けて見ることが出來る。

第一節――冒頭(から)水田あるを以て米あり(まで)。日本の國土は山が多い爲に狹められてゐるのではないといふこと。山の效用。

第二節――活火、休火何れの火山も(から)想像の及ぶべくもあらざるなり(まで)。日本の火山について。火山によつて生じた山湖の美について。

第三節――平地ならば(から)高山の上にて見る如き色澤は得られざるべし(まで)。高山に特有な高山植物の美について。

第四節――山嶽に登れば(から)花の眞の美を味はひたりと言ふべきなり(まで)。山に特有な樹木について。また紅葉の美について。第三節と一緒にして見てもよい。

第五節――山靜かにして太古に似たる所(から)世にも可憐なるかな(まで)。山に見る珍しい鳥類について。

第六節――平地の水は(から)瀑布ありて溪益ゝ奇なり(まで)。山の水――溪流、激湍、瀑布について。

第七節――奇巖怪石は(から)山ならでは見られざるなり(まで)。山の巖石の趣について。

第八節――平地にても雲煙は(から)山ならでは得られざるなり(まで)。山の雲の趣、雲海の壯觀について。

第九節――日出、日沒の美は(から)終り(まで)。山に於ける景觀の壓卷として、御來迎を敍して一文を結んでゐる。

解釋

※英國　英本國である。

※島山の國　島國で、山地の多い國。

※座　元來は、佛の坐像を數へる語。それが、山のやうなものを數へるのに用ひるやうになつた。据りよい、どつしりしたものを數へる時などに。

※横より勘定云々　眞正な意味からでない見解であるといふ意。

※鳥瞰(てうかん)　上空より下界を見下すこと。鳥瞰の面積とは土地の高低を示し得ない平面圖による面積である。

※山の恩　山のおかげ。

※活火　活火山。程度に强弱はあるが、現に火山作用を營みつつある火山である。

※休火　休火山。過去に於て、火山作用を營み、又營んだと考へられる山である。

※東洋　西洋に對する語。アジヤ洲の東部の泛稱。

※山湖　山上の湖。

※平湖　平地の湖。

※仙境　俗界を離れて、清淨な所、幽邃閑寂の地。

※風聲雲色　風の音、雲の色。ここでは風景の意である。

※僻遠の地　かたよつて遠いところの土地。

※世上　世間。世間では。

※想像　おもひやる。おしはかる。經驗又は記憶を材料として、心の中に新しい觀念を作ること。

※北する　北の方に行く。北方の寒い地方に行く。

※草木風色　植物景觀の意。景色。

※造化　宇宙萬物を創造せる神。進化の神。造物主等。

又別に天地間に於ける萬物の生滅變轉して無窮に傳はることにもいふ。

※縮地術　同じ樣な植物分布や、氣象でも平地ならば數百里も南北しなければならないのを、高山にあつては僅か數里、十數里の登高によつて經驗することが出來る。その平地の數百里が山嶽の數里にしか相當せぬことをかういつたのである。

※ぶな帶（たい）　ぶなの木の多く自生する地帶。ぶなは落葉喬木、山地に自生し高さ二十數米、周圍二米に達する。樹皮は淡灰色で、平滑、葉は互生し、卵圓形で緣邊は波狀をなす。春花を開く。雄花は葉腋に垂れ、雌花は梢頭について總苞を被つてゐる。

※樺帶　樺の木の多く生えてゐる地帶。

※はひ松　姫松に似た葉を有して樹幹、樹枝は地面に伏して生育する。

※お花畑（はなはたけ）　高山の灌木帶を過ぎた所、多少の平地や凹地などに各種各樣の高山植物が妍を競ひ艶を競ふ所である。どの高山にも必ずあるとは限らない。

※奇花異草　不思議な花、めづらしい草。要するに目なれない草や花の意。

※映發　光や色などがきら〳〵とうつとりあらはれること。うつりきらめくこと。

※紫外線　太陽のスペクトルを分解して、波長の長い方から短い方に向つて、順序に配列すると赤外線、可視光線、紫色線となる。可視光線はいはゆる赤、橙、黃、綠、青、藍、菫の七色で、この中最も波長の短い菫よりも短い、我々の目に感じないスペクトルを菫外線と總稱する。俗にこれを紫外線といふのである。

※直射　ここでは光線がぢかに照らすことである。日向における日光の如きにいふ。日陰の明るさは反射光線によるのである。又別に直（ぢか）に射ること眞面（まとも）に射ることにもいひ、彈道の殆ど直線をなすにもいふ。

※それ故に　紫外線は大氣中を長く通過すればするほどそれに吸收されるのである。で高山では大氣中に吸收されることが少いのである。紫外線が植物の發育に缺くべからざるものであることは種々の實驗によつて證明されてゐる。例へば、甘藷を暗所で栽培して、相當成長後、普通日光に曝したが綠色を恢復することが出來なかつたが、紫外線に曝した所が僅か二時間で恢復したといふことがある。これでみると、紫外線の直射の多い高山で、植物の花が美しくなることも肯かれるわけである。

※とこしなへ　とこしへ。永久。

※生色　生々した樣子。

※幽趣（いうしゅ）　おもむきの深い、閑寂なさま。

※寸土　僅かの土。

※錦繡（きんしう）　麗しい衣服又は織物。又美麗な物のたとへにいふ語。ここでは紅葉、黄葉が滿山を飾るさまにいつてゐる。

※霜葉（さうえふ）　霜をうけて、紅、又は黄に變つた葉。紅葉。もみぢ。

※この世ながらの云々　神の庭はこのうつし世にあるはずはないが、そのすばらしい神の庭が我等の世界に現はれたかと思はれるほどに巧をこらした景色である。

※神苑　神社の境内にある庭をいふ。

※山靜かにして云々　閑寂にして、俗界を離れた山中には人間社會の喧しさ姦しさは及ばないで、幽々とした太古のさまが思ひやられる所。「山靜似太古。日長如小年。」の句がある。

※幽禽の和鳴　下界では見られない珍しい鳥が澤山鳴き立てること。和鳴はやはらぎ鳴くこと。

※仙樂（せんがく）　仙界の音樂。仙界でなければ聞くことの出來ないやうな妙なる音樂。ここで鳥の聲の美しく非常に快く耳に入るさまにいつてゐる。

※合奏　種々な樂器で調を合はせて音樂を奏することである。ここは鶯と杜鵑が交々鳴きかはすことをいつてゐる。

※駒鳥　鶯と共にその鳴音が頗る美妙なので、我が國では古來、ひろく飼養されたものである。雄の頭部背部は橄欖褐色で、眼や喉のあたりは赤褐色の部分が少い。日本と支那の東南部に產し、深山の檜などに巢を營む。

※嶽雀　「タケスズメ」と讀む。

※仙趣　寂びのある閑幽な風景。俗界には見られないさつぱりした神祕めいたさま。

※雷鳥　鷄、雉等と同じ類で日本アルプス連峯に棲息する。夏季と冬期で全く色彩を異にするので有名である。夏季には、雉、やまどりの雌のやうに赤褐色の地に黑色の細斑があるが、冬季には全身殆ど白色となる。春秋にはその中間色を呈する。數も少く、且產地も局限されてゐるので、天然記念物として保護されてゐる。

※水の樣千變し云々　水がその地勢によつて、單調な景觀を呈さずに、非常に種々樣々な趣を呈するものであるといふことをいつたのである。

※或は飛び云々　これは水の千變萬化するさまをいつてゐる。

※名にし負ふ　名に負ふに同じ。名高い。有名な。

※槍ヶ嶽　北日本アルプス（飛驒山脈）の南部、松本市の西方。松本市より島々を經て、上高地からするも一法であり、松本から豐科（信濃鐵道の一驛）に出で常念嶽を經て行くのも一法である。大槍と小槍とが山頂にあつて、尺土を冠らない奇巖が、槍の穗の如く天に高くそゝり立つてゐる。

※妙義　群馬縣北甘樂郡の妙義山。

※耶馬　耶馬溪である。大分縣下毛郡山國川の沿岸數里の間の奇勝は世に知られてゐる。

※重疊（ちようでう）　幾重もかさなること。重り合ひ、たゝまり合ふさま。

※雲煙　雲と煙と。ここでは霧、雲、霞、靄などを總じていつたものである。雲霧といふ意。

※その妙を極むるは　雲や霧の樣子の極めて面白いのはの意。

※白雲馬頭に生ずる　自分の乘つてゐる馬の鼻先き

に雲が湧き立つてくるの意。然し必ずしも馬に乘つた時とは限らないで、ここでは山上に居れば眼前に雲がわいてくるといふ意である。

※脚下に雷鳴云々　山頂に立つと、雲が山腹をめぐる關係上、時として雷鳴があれば下の方に聞えるといふのである。

※峯尖島となる　峯が山腹から下は雲に襲はれる。雲を海にたとへれば、峯はあたかも島のやうに見えるといふ意である。

※雲海　山上から眺めた、雲の重疊して殆ど際涯のないさまにいつたのである。所々に聳える峯はいはゆる尖島に見立てられる。

※躍出する　をどり出る。非常に勢の盛んな樣子である。

※世にも　ことのほか、とりわけて。又決して、更になどの意もあるが、ここは前者の意がよい。

※崇高（すうかう）　けだかいこと。尊嚴なこと。

注意

修辭上の注意並びに作者獨得の語法について述べて見よう。

○日本國民は米を食ふ人種なるが、その米を得るは山の恩なり。山あるを以て川あり。川あるを以て水田あり。水田あるを以て米あるなり。

これは修辭學でいふ所の漸層法の適例である。漸層法とは、語句、感想を次第に強く大きく高く深く、一歩は一歩よりその調子を高めて行つて、讀者の感興をその極に導かうといふやり方である。この法はこれをうまく用ひれば、文勢を緊張して、印象を非常に強める效果がある。本文にはこの外にも、漸層法を用ひた所がある。

次に作者特有の語句使用を檢して見れば、次のやうである。

○誤つて横より勘定したるなり。

○造化は一種の縮地術を山嶽に行へり。

○根に苦勞するを以て、その葉小なり。

○登り〳〵てはひ松を蹈むに至れば、ほつと一息つく。

○平地の水は、海の怒濤巖を打ち、川の細波岸を嘗むるくらゐの事なるが……。

○峯尖島となる。

資料篇

參考文

大町桂月氏の文章の特色について、少しく述べて見よう。

氏はどこまでも獨創的な人であつた。その文章も、氏獨得のものであつて、他人の文章道に依つて文章を書いたものではなかつた。尤も氏の文章も幾度か變化してゐた。即ち、三度の變化をしてゐる。で「黄菊白菊」や「花紅葉」時代の文章は、美辭麗句を以て頗る絢爛なものであつて、それが、批評家としての時代、いはゆるその全盛期に於ける時代の文章になると、一轉して全く美

辭麗句を捨て、俗語をふくこなし用ひ、「也」を以て結んだ文章である。また最後に於ては、時勢に從つて少しは口語の文章も書いた。要するにこれが、氏の文章に於ける三段の變化であつて、その中、いづれの時代の文章が、その特色を表してゐるものかといへば、いふまでもなくその中間期に於ける文章である。例へば「大久保村は躑躅にあらはるれど、その中、百人町の通は、長さ殆ど十町、眞直なること東京には稀なるに、兩側には櫻樹ならびつらなりて、陽春四月花の隧道を作ること、他の街路にその比を見ず。その花のトンネルを行きつくせば、屋根門の左右、生墻を壓して櫻樹數十本、枝をまじへかはして、義滿の花の御所もかくやと思はる。これ余が借りて住まへる處也。」といつた樣な文章であつて、その文章中いかに字句の絢爛な、調べの高い所があつても、その中屢〻俗語を用ひ、しかもその最後の結びに至つては、必ず少しも氣取らずに「何々也」といつて結んでしまつたのである。でその俗語を用ひるといふことであるが、それも俗語を用ひて文章を下品に書いたのではない。俗語を氣取らずに品よく使ひこなして文章を書いたのである。ここに氏の文章の獨創的な眞の特色があるのである。なほ氏は、非常に文法のやかましい人であつた。故に明治の文豪中、尾崎紅葉と共に、その點に於ては特に稱されてゐる。これも、氏の文章の一特色であるといはねばならぬ。

一六　夕陽の美

解說篇

作者

高山林次郎。評論家、思想家、文學博士。號は樗牛、明治四年一月山形縣鶴岡に生れた。幼時父の實家高山家に養はれて高山姓を稱した(舊姓齋藤)。七歲の時山形に移つて同地の小學校に入り、更に移つて中學は福島中學校を卒業した。次に仙臺の第二高等學校を經て、東京帝國大學哲學科に入り二十九年卒業後、第二高等學校に教鞭をとつたが、一年足らずで上京し、博文館に入つて雜誌「太陽」の主筆となり、傍ら帝國大學で日本美術史を、東京專門學校(早大の前身)では美學を講じてゐた。三十二年、文學博士の學位を授けられ、翌年春ドイツ留學の命を受けたが肺を病んで中止し、以來靜養に努めたが遂に全快せず、三十五年十二月二十四日相州茅ケ崎の病院で永眠した。時に年僅かに三十二。著作は「樗牛全集」五卷に收められてある。

高山林次郎

引用書

樗牛全集。全五卷。明治三十八年、博文館發行。後、大正三年六月に縮刷判六卷が發行され、更に大正十四年に改訂

註　樗牛全集七卷が刊行された。本課は、「海の文藝」として書かれた感想文の中の、海の夕陽に關する部分の節錄で

ある。「海の文藝」は、明治三十三年六月の作。

教材

前課は山に關する教材であつたので、ここに海の夕陽に關する樗牛の感想文を採つて、對照させたものである。本文は夕陽の限りもなく美しい輝きを、この實人生に譬へて、人の晩年はその夕陽の如くありたいものだと希望したものである。樗牛はいふ、「海の夕陽に對して起す感情は常に平和である。」と。しかもその平和は、「何事もなかつた」といふ意味に於ける平和ではない。「世界のあらゆる障碍にうち勝つた大勇者」の得る平和であり、あらゆる苦鬪を經て、始めて與へられる平和である。我々の一生の最後にも、この夕陽のそれのやうな平和あれかし、我々の死も、この夕陽の沈む時のやうな平和と榮光とに包まれてあれかし、といふのを主意としてゐる。

指導篇

扱方

本文の趣旨には誰しも同感するであらう。然しながら、お釋迦樣の涅槃にせよ、また作者のいふ凱旋將軍のやうな死の狀態にせよ、ロマンチックにたゞ憧憬しただけでは、現れるものではない。作者もいふやうに、「爭を經ない平和には平和たる價はない。我等は一生の戰鬪にうち勝ち、……」そこである。人生に於ける戰鬪に雄々しく戰ひ、これにうち勝つといふことが必要條件でなければならない。故に、我々當面の問題としては、屈せざる戰鬪意志を以て、あらゆる艱難にうち勝ち、日常の仕事なり、學問なりに專念することが大切であると思ふ。取扱上この點に注意して頂きたい。

展開

敍述の推移によつて、次の四節に分けて見ることが出來る。

第一節——冒頭(から)聊か不滿足に感じられる(まで)。

夕陽の美は、西洋に於ては多くの文學者に讃へられてゐるが、我が國の文學には、餘り現れてゐないといふこと。

第二節——夕陽は麗しいが(から)、繪にも筆にも現し盡し難い(まで)。

作者の體驗により夕陽——殊に海の夕陽の、何ともいひやうのない美しさを述べてゐる。

第三節——海の夕陽に對して(から)さながら人生の兩極端を現示してゐる趣があるではないか(まで)。

海の夕陽に對する作者の感情。勇者の死を聯想し、これを讃美してゐる。

第四節——あゝ人や(から)終り(まで)。

人生に對する作者の希望。海の夕陽の如き人生の晩年を強く希望してゐる。

解釋

※苟も　かりにも。かりそめにも。

一　※口を極めて　言葉のありつたけ。

※歎美（たんび）　感心してほめること。多く美しさに感じた場合に使はれる。

※ベーンの様な學者ですら　ベーンは、アレクサンダー・ベーン(Alexander Bain)で經驗派の哲學者である。西紀一八一八年英國アバーデーン(Aberdeen)に生れた。一八六〇年から八一年まで、アバーデーン大學に於て論理學の講座を擔當し、後、同大學の總長に推された。一八五五年後、彼は約二十冊の著書を出してゐるが、中でも有名なのは、「感覺と知識」(The Sense and the Intellect)「感情と意志」(The Emotion and the Will)「心理學と倫理學」(Mental and Moral Science)「論理學」(Logic)「科學としての教育」(Education as a Science)等であつて、心理學に關する著書が頗る多い。ここでは常にむつかしい、理窟つぽいことばかり考へてゐて、自然の持つ微妙な美しさなどは感ずることの少さうな學者ですら「夕陽の美」にはさすがに感歎してゐるといふので、その實例としてアレクサンダー・ベーンを引いたのである。

※心理學書　心理學の書。ベーンのそれについては前項參照。「心理學」(psychology)は、意識の作用、精神の現象等について研究する學問。

※夕日影　夕日の光、夕べの日影。「夕日影」なる文字の見える歌文は限りもないが、一二の和歌を例にあげれば、續後撰集卷四、夏歌、藤原雅經の歌に「里遠き田中の杜の夕日影うつりもあへずとる早苗かな。」續千載集卷二、春歌下、藤原爲家の歌に、「ながしとも思はで暮れぬ夕日影花にうつろふ春の心は。」とある。

※夕映（ゆふばへ）　夕陽に反射して、美しく映える即ち美しく色鮮かに照り輝くこと。又その映射したもの。宇津保物語に「ゆふばえして、いといみじく色麗しう」源氏物語に「夕ばえを見かはして」枕草子に「さうび(中略)黑きはしなどのつらに亂れ咲きたる夕ばえ」とある。又夕映といふ語こそ用ひてないが、同じく枕草子の四季の風趣を敍した所に「秋は夕ぐれ、夕日はなやかにさして云々」といつて夕陽の美を讃歎してゐることはいふまでもなからう。

※崇大（しゅうだい）　崇は慣用音「スウ」。たふとく大いなること。崇高壯大。

※名篇玉什（めいへんぎょくじゅう）　名のある詩文。什は詩經の雅と頌との卷の稱（十篇を一卷としてある故）。轉じて詩、詩篇をいふ。萬葉集卷一雜歌の「わたつみの豐旗雲に入日さし今宵の月夜明らけくこそ。」といふ歌などは、崇大なる海の夕陽の景をうつしてゐる。

※奥州の西海岸　「解說篇」でもいつたやうに樗牛は山形縣鶴岡に生れたのであるが、少年期に度々各地に轉住したといふから、日本海に面した海岸に住んだことも多かつたらうと思ふ。

※牢固（ろうこ）　しつかりしてゐること。かたいこと。「牢固として拔くべからず。」などといふ。

※印象　impression の譯。何かを見たり聞いたりすると、それが心に印されて殘る――その印されたものをいふ。心に銘して後まで殘つたもの。

※たゝずまひ　たゝずまふこと。即ちたゝずむことから延いて、そこにある樣子、ありさまの意に用ひられる。ここもその意。

※それに伴なつて　雲のいろ〳〵な姿形や、それに反映してゐる夕陽の濃い光、淡い光――その樣子に從つて、海の面も、或は赤く或は紫に、又或所は明

るく或所は暗くなつたりしてゐるの意。

※繪にも筆にも　繪にも文にも。

※感情　快、不快などの心持。

※障碍に打ち勝つ　障碍はさまたげ、邪魔。障礙、障害などとも書く。ここでは自分を邪魔し反抗するものや、困難などを征服する意。

※今方に　ちやうど今。

※最後の戰鬪を後にして　最後の戰を終へて。最後の勝戰を終へて。

※榮光と平和に擁せられながら　光榮と平和とに抱かれながら。幾度かの戰に勝ち、今や最後の戰をも鎭めて、その榮光と平和とに包まれながら。「榮光」は光榮に同じである。「擁す」は抱くに同じ。

※墓門に凱旋する　凱旋して墓門に入るといふので即ち戰に勝つて歸り、榮光と平和に包まれながら、

靜かに死んで行く壯烈美をいつたものである。墓門は墓碑の前に建つ門。凱旋は、戰に勝つて凱歌（勝いくさの歌）を歌つてかへること。

※疲れ憊れた老衰な趣　疲勞困憊して、老い衰へたやうな風。つかれて元氣のなくなつたやうな樣子。憊（音ハイ）もつかれる。

※爭はれない感情　打消し否定することの出來ない感情。どうしてもさう感じられる感情。

※萬づ生き〳〵として　すべてが活き〳〵として。

※初陣　初めて戰に出ること。

※概　趣。風情。樣子。

※兩々相對して　二つ（夕日と朝日）が互に對しあつて。

※さながら　そつくり。又ちやうど、あたかも。

※人生の兩極端　人生の兩方のはし。つまりこれから朝日の如く勢ひ盛んにならうとする青春時代と、これから夕日のやうに衰へて行かうとする晩年の頃と、極端は最もはし。

※人や　「や」は感歎詞。人は——。

※晩年　年の老いた時。

※爭を經ない平和は云々　爭の渦中に投じ、爭に打勝つて得た平和でなければ、平和としての價値はない、ほんたうの平和ではない。

※一生の戰鬪にうち勝ち　一生のうちのあらゆる苦しみに打倒されることなく、強く立派に生き通して。人の一生は無數に連續した艱難苦勞を一つ一つ征服して行く戰のやうだ。その戰に敗けた人、艱難苦勞にまゐつた人は、いはゆる人生の敗殘者である。

※榮光の雲に包まれて云々　朝からこの世界を照らしつゞけてきた太陽が、一日の終に、その務をはたして、ほまれの夕雲につゝまれて、悠々と西の空に沈んで行くやうに死んで行きたいの意。「榮光の雲につゝまれて」は、榮光を滿身に浴びながらといふので、それを夕陽が輝かしい夕雲に包まれて沈むに喩へたのである。又「西方の天云々」は、單に太陽が西の空に入るといふ表面の意味ばかりでなしに、佛教では極樂淨土——つまり死後の國は西の方にあることになつてゐるから、裏面には、「死ぬ」といふ意味をも含めて解すべきであらう。

資料篇

參考文

夕陽の美

一篇は美しとさ悲壯さとに滿ちてゐる。夕陽の美を讃歎してゐるこの文章そのものが、ちやうど夕陽のやうな輝を放つてゐるのは、何れの讀者も等しく感ずるところであらう。樗牛は文藝家であり、文藝批評家であり、思想家であり、社會批評家であり、又信仰家でもあつた。そして、その各〻の立場より放たれた言葉は善い意味に於ても、悪い意味に於ても、常に世人の視聽を集めてゐた。おそらく彼ほど、毀譽、褒貶、愛慕と憎悪との渦卷の中に、萬人注視の大舞臺に立つて華々しい生涯――短いだけに一層華々しい生涯を送つたものは他にないといつても過言ではないだらう。しかし彼が一面に於て實に驚くべき多數の熱烈なる憧憬者を、年若い青年男女の中にもつてゐたのは、批評、論文はしばらく別として、第一に、その華麗にして哀切極まりなき散文――感想隨筆の類の持つ魅力のためであつたことは否むべからざる事實である。言を換へてみれば、彼の主義や思想や信仰は如何なるものであるかなどといふことについては、何等の理解のない人でも、もし目に文字を讀み、心に文學を味はひ得るだけの素養のあるものなら、何人と雖も彼の「瀧口入道」や、「わが袖の記」や、「平家雜感」や、「清見寺の鐘聲」や、「思ひ出の記」等に涙を絞つた經驗のないものはないであらう。かの「吾人は須く現代を超越せざるべからず。」といふ言葉も有名であるが、又樗牛は「文は人なり。」「文章の基づく所はその人品なり。」「文字は符號のみ、そを註釋するものは、作者自らの生活ならざるべからず。文は是に至りて畢竟人也、命也、人生也。」といつてゐる。他の人々が口にすれば、齒の浮くやうにしか聞えないであらうやうな言葉も一度彼の筆端から流れ出てくると實に惻々として人に迫るのは、その文章が彼といふ「人」そのまゝであり、彼の內部生活が眞に彼の文章に現れた如くであつて、「人」と文との間に些の間隙がなかつたためであらう。まことに彼は、三十年の短生涯を通じて、議論に對しても、宗教に對しても、哲學に對しても、常に多情多感の詩人の如き情熱を以て相對してゐたが、その文章も實にそのやうな情熱のほとばしりであつた。正宗白鳥氏は、樗牛を評して、「茫漠たる文明の批評よりも、茫漠たる時代精神の追求よりも、自己の涙に映る乙女の正體や、自己の心に潛む惱みの正體を突きとめる方が、彼にとつて有意義であつたのだが、不幸にして彼は長生しなかつた。永久の青年として死んだ。しかし、そこに彼の遺著の今なほ多感多情の青年の心を惹く一つの理由が存在してゐるのであらう。」と極言してゐるが、それほどではなくとも、樗牛の眞面目は、より多くこの「海の文藝」のやうなものの中に見られる傾向のある事は確かであらう。本文最後の、「あゝ、人やその青年は朝日の如く……」といふ一節などは、實に樗牛らしい高調の美を發揮してゐる。くだ〳〵しい批評は不必要である。誦して情操の美を養ふべく、默して人生行路の行手を想ふに足る名文である。

一七　偉人野口英世

解說篇

教材

世界の醫聖と謳はれた野口英世博士が、西アフリカ黃熱病研究の犧牲となつて倒れた時、全世界はその長逝を哀惜した。病理細菌學の專攻學徒として、博士の研究範圍は全世界に亙り、研究發見の報告は百七十五篇の多きに上つてゐる。日本人が學術的に世界を壓倒し得ることは、博士によつて立證されたが、彼を磨き鍛へたのはアメリカのロックフェラー研究所であることを思ふ時、科學の尊重を高唱する心が頓に湧くのを覺える。博士は偉大な科學者であつたと共に、親に孝心の篤い人であり、舊師の恩を一生忘れなかつたゆかしい人格の持主であつた。黃熱病の原因を發見して南米大陸永遠の繁榮の途を開いた博士が、西アフリカに於て更に兇惡な黃熱病の征服を志し、傷ましくも人類愛の前に、悲壯な犧牲となつた事蹟を顯彰し、感銘を與へようとするものである。

指導篇

扱方

本課は偉人の傳記であるが、軍人や政治家のそれではなくして、近代日本の生んだ世界的科學者の傳記といふ意味で、珍重さるべき教材である。かういふ教材が國語讀本に、もつとあつていい譯であるが、さうした人物に乏しいため、悲しい哉多く載せることが出來ないのである。尤も文化的方面で世界的に有名な人物は、多少はあるが、私行上遺憾な點などある人は教科書には載せられないことは申すまでもない。野口博士は業蹟に於てづば抜けて世界的存在であつたばかりでなく、また人格も高潔で、親孝行の逸話がある位であるから、教材として申し分ないと思ふ。最近、改正小學國語讀本にも、野口博士の傳を入れるといふ記事が、新聞に見えてゐたが、宜なりと思はれるのである。

野口博士の最も偉大な點は、世界人類の福祉に貢獻した點にある。我々はこの世に生を享けた以上、國家社會のために盡すことは、國民の義務であり、光榮であるが、更に進んで人類の福祉に貢獻しなければならない。畏れ多くも「國際聯盟脫退ニ關スル詔書」にも、「進ミテ皇祖考ノ聖猷ヲ翼成シ普ク人類ノ福祉ニ貢獻セムコトヲ期セヨ」と、仰せられてゐる。第二の國民たる生徒の中から、第二の野口博士が踵を接して輩出することを庶幾したいのである。

展開

本文は敍述の推移によつて、次の四段に分けて見ることが出來る。

第一段――冒頭(から)千載遠く傳ふべきものである(まで)。

野口博士が歿せられた直後の、ロックフェラー研究所の悼辭並びに外字新聞の悼辭を借り來つて、博士の輪郭を紹介したものである。

第二段――博士は病理細菌學の專攻學徒として（から）科學者に對する敬意を昂むべき必要を痛感するのである（まで）。

アメリカに於ける醫學研究の努力を述べ、その輝やかしい業蹟を讃へてゐる。併せて、博士の研究を援けたロックフェラー研究所の功績を述べ、科學尊重の必要を說いてゐる。

第三段――博士は地球を墳墓として（から）これ等は共にその人格の麗しさと淸らかさとをおのづから感じさせる話柄ではないか（まで）。

博士の人格の麗しさを物語る逸話である。母堂に對する孝心、恩師に對する謙讓。

第四段――椰子の葉繁る南米エクアドルの（から）終り（まで）。南米に於ける黃熱病研究の業蹟を述べ、次いで西アフリカの同病征服に赴いて、病毒に感染し、遂に不起の客となつた事情を述べてゐる。最後に博士の生地を紹介して、一文を力强く結んでゐる。

解　釋

※野口英世（ひでよ）　世界的に有名だつた細菌學者。明治九年（一八七六年）福島縣耶麻郡翁島に生れ、年少にして獨學で醫師試驗に合格し、二十五歲の時壯圖を抱いて渡米した。ペンシルバニア大學で學位を得、カーネギー科學研究所から西歐留學を命ぜられて血淸の研究に從つた。歸米後はロックフェラー研究所の細菌部長となり、中央醫會の名譽會員となつた。我が國からは明治四十四年に醫學博士を、大正三年に理學博士を、翌四年には帝國學士院の恩賜賞を得、大正十二年に帝國學士院會員に推薦された。その學界に殘した功績は梅毒の病原體の發見、天然痘、トラホームの研究、オーロヤ熱の病原體研究などである。昭和二年ロックフェラー研究所から黃熱病の病原體研究のため、西アフリカのアクラに出張研究中同病に命を奪はれて研究に殉じた。年五十三。

※細菌學者　細菌の形態や性質を研究する學者。細菌は顯微鏡下で初めて見得る細少劣等の菌類で、分裂により增殖し、一箇から二箇、四箇、八箇と繁殖し一回の分裂の所要時間は約一五乃至二〇分間であるから一箇の細菌は一日中に四二〇億箇となる程の絕大な繁殖力をもつてゐる。ある種のものは殊に動物體內や人體內にのみ發育、增殖して疾病の原因となるので、細菌學は傳染病豫防や治療の上に重大な役目をもつてゐる。

※ロックフェラー研究所　詳しくはロックフェラー醫學研究所（Rockfeller Institute for Medical Research）一九〇一年アメリカの富豪ロックフェラー氏が私財をなげうつて設立した。人類の福祉の爲に醫學研究を奬勵するのを目的としてゐる。研究所と病院とから成り、研究所は左の五部に分れる。（一）病理及細菌學部。（二）化學部。（三）生理學及び藥物學部。（四）實驗生物學部。（五）外科學部。本研究所でなされた科學上の研究發見は月刊の「實驗醫學雜誌」（The Journal of Experimental Medicine）に發表される。

※卓越　衆人に超えすぐれてゐること。卓絕、卓異、卓殊、超絕。

※獨創（どくさう）的科學研究者　自ら研究發見して行かうとす

る科學者。獨創は、他人の說を何の批判もなしに頭から受入れたりすることをしないで、自分の力で研究し發見し創造して行かうとすること。的は形容語をつくる接尾語で「の」とか「なる」とかいふ意味をあらはす。科學研究者は科學を研究する人。科學者。

科學は、天地間の一の現象を概括し、部分的に系統をたてて論證し、實驗・觀察・比較・推理等により個個の現象から一定の自然法を發見しようとする努力である。英語の、science の譯で、ラテン語 scientia（知識）から來てゐる通り、本來は「組織立つた知識」の一切をいふわけだが、狹義には「自然科學」と同義に用ひられてゐる。左にドイツの哲學者ヴントWundt の科學分類表を掲げよう。

- 科學
  - 哲學
  - 特殊科學
    - 形式的——純粹數學
    - 實驗的
      - 自然科學
        - 現象的—物理學・化學・生理學。
        - 發生的—宇宙發生史・地質學・生物發生學。
        - 組織的—記述的星學・地理學・系統的博物學。
      - 精神科學
        - 現象的—心理學・社會學。
        - 發生的—歷史。
        - 組織的—系統的法理學・系統的經濟學。

※共働者　一緒に働いてゐる人。前の獨創的科學者と同格で、獨創的科學者にしてまた共働者と續く。

※痛惜　非常に惜しむ。心から殘念に思ふ。

※世界の醫聖　世界第一流の偉い醫者。

※全人類の慈父（じふ）　人類全體の惠み深い父のやうな人。恐しい病氣から全人類を救ひ出した人であるから慈父にたとへた。

※黃熱病　「クワウネツビヤウ」又は「オウネツビヤウ」とよむ。中央アメリカ、アフリカ・大西洋沿岸諸島の熱帶地方に流行する急性傳染病。原體は野口博士によつて發見された一種の波狀菌で、蚊によつて媒介される。概ね急劇な惡寒戰慄を以て始まり、直ちに三十九度以上に達する高熱を發し便祕を起す。通常四五日で下熱するが、また兩三日にして發熱する。次いで黃膽蛋白尿があらはれ吐血する。患者の二〇乃至三〇％は死亡する。輕ければ十日乃至十三日で下熱し、吐血・蛋白尿等がない。治療法は下劑・注腸・强心劑を用ひる外は對症療法である。又蚊を驅除し、戶窓をしめ、病人を隔離する等の方法を用ひる。

※犧牲となつて倒れる　研究のために自分の身を捨てて死ぬ。犧牲は本義は天地宗廟をまつる時さゝげるいけにへの動物。後に他人のために自分の身をすててつくす意味になつた。

※籍を置く　その團體に屬してゐる。その一員となる。

※學界　學問をする人々。學徒の仲間。實際社會の中から學徒の形成する社會を抽象して考へ來り、その集團を學界と名づける。

※聲明書　英語 declaration 又は statement の譯。ある事柄についての感想や意見などを社會全般に向つて公表する文書。

※その功績よりすれば　そのてがらの方から考へると。功績はてがら、いさを、勳績。

※獻身的生涯　研究のために自分の身を捧げて力を盡した一生。獻身は、ある事のために身を捧げて盡す。身を犧牲にする。

※範　手本。

※濟世（さいせい）の道　世を救ふ道。世俗の凡人を救ふ道。

※聖者のそれ　聖者の抱いてゐた理想。「それ」は前行

の理想をうける。聖者は智德神の如くすぐれて萬事に通曉してゐる人。德高く神佛につかへる人。キリストとか釋尊などはそれ。

※長逝　死ぬこと。永眠とも殞逝ともいふ。

※世界人　英語の cosmopolitan. 世界に有名な人。世界を舞臺として活躍する人。一つの團體、一つの社會、一つの國などの狹い範圍の爲ばかりを考へて世界全體の幸福を考へないやうなことなく、人類全體の福祉のために働く人。狹少な似而非愛國心にとらはれることなく、地方的偏見にとらはれることなく廣く人類愛のために働く人。

※國境を越え、人種を超えて　一つの國、一つの人種の爲ばかりでなく、國境や人種の差などの區別を超越して。

※研究貢獻した　研究し、貢獻した。貢獻は貢物としてたてまつること。ここでは世のため人のために働く意味。

※學勳　學問上のてがら。

※千載遠く傳ふべきものである　末長く傳へて賞讃しなければならぬものである。千載は非常に遠い未來といふ意味。

※病理細菌學　病理學と細菌學。病理學は疾病の原因・成立・結果及び病の際の諸器管・諸組織の變化を論ずる學である。細菌學は本課の冒頭に出た。病理學、細菌學共に基礎醫學の一つで、治療醫學に對してゐる。

※專攻學徒　專門に研究する學者。學徒は學問に從事する人。

※廣汎　非常に廣い。手廣い。日本に、北アメリカに西歐に、南アメリカに西アフリカにと研究の手をのばしたことを指してゐる。

※不滅の文獻　いつまでたつてもその價値を失はない立派な書物。文獻は古昔の制度、文物を知るべき書物といふ意味に使はれるが、ここではもつと廣い意味で英語の literature の譯語として使はれたもので、ある特定の事項について文字で書き表された書き物の全部を總稱する。ここでは病理細菌學に關するすべての書きもののうちで不滅の書物——不滅の研究物となつたといふ意味。

※研究道場　研究の場所。道場は、佛教や道教で道を修する場所をいふ。たゞ研究した所といふよりも、もつと嚴肅な氣分を漂はせるために特に研究道場といつたもの。

※ロックフェラー　John Davison Rockfeller. 西暦一八三九年ニューヨークに生れた。仲買業から身を起し、一八七〇年スタンダード石油會社を創立し、一八八二年頃迄に全アメリカ合衆國内の同業者を或は併合し、或は驅逐し、世界第一の富豪となり、一九一一年家をその子に讓つて實業界を隱退した。一九二七年に巨費を投じ、人類全體の幸福を增進することを目的としたロックフェラー財團（Rockfeller Foundation）を興した外、慈善事業や學術界の爲に常に巨額の出資を惜しまない。東洋一を誇る震災後の東京帝國大學附屬圖書館もロックフェラー氏の寄附に成つたものである。

※美擧　うるはしい企て。感心すべき行爲。

※雄飛　大勢力をもつて事に臨むこと。鳥が雄々しく飛ぶやうに、奮起して事を行つて、他を威服させること。

※醫學の王國の觀がある　醫學の方面に於て最も權

威ある所であるやうに見える。王國は王によつて支配されてゐる國。醫學の王國は醫學の王者として君臨し權威ある組織をもつた所の意。觀は外觀の意で、あたかもそのやうだといふ意味。

※萬丈の氣を吐く　意氣大いに盛んに活躍すること。

※權威　authority の譯語。ある特定の事に關して最高至善の標準となり、依り所となる人。又さういふ人の有する力。

※フレキシナー博士　Simon Flexner. アメリカの有名な病理細菌學者。西暦一八六三年ケンタッキーのルイスビルに生れ、同地の大學を出て更にドイツに學びジョンズ・ホプキンス大學ペンシルバニア大學等に教鞭をとつたが、一九〇三年聘せられてロックフェラー研究所長となり、病理細菌學上多くの重要な研究發見をした。

※創成の業を輔けた　初めて事業をしはじめる時、その仕事を手傳つた。

※異常の天才　なみはづれた才能。天才はうまれおちるときからその身にそなはつてゐる立派な才能、又はその才能を有する人。

※學界多年の謎　學者仲間で長いあひだ分らないこととされてゐたもの。

※異邦白面の一醫學者　外國のまだ年わかい一人の醫學者。白面は年がわかくて經驗に乏しいことをいふ。

※かうした所　かうした醫學の王國の如きロックフェラー研究所。

※乘出す　關係して仕事をし始める。出て來る。

※醫學關係者　醫學に關係をもつた人のすべてをさす。醫者も、醫療器械屋も、病院經營者も、病院事務員も、醫學雜誌記者もすべて醫學關係者。

※驚異の的　みんなが驚きあやしむ種。

※弱齡　年若いこと。弱年ともいふ。

※爾來　それ以來。それからこの方。

※鏤骨彫身の努力　自分自身の骨身をきざみつけるやうな、苦しい絶大な努力。鏤も彫も「ほりつける」「ゑる」。鏤は、「ロウ」又は「ル」と讀む。

※最高の名譽　醫學博士、理學博士、ドクトル・オブ・サイエンス等の學位をうけ、世界第一流のロックフェラー研究所の細菌學部長となつたことなどをさしてゐる。

※かち得る　かち(贏)は利益の意。輸の對。

※到底人間業とも思へぬ程の　とても人間に出來さうもないと思はれる程の。

※根氣　忍耐する氣力。物事に耐へ得る心の力。精力と大體同じ意味である。

※この世の讃辭　人間世界のほめ言葉。人間が考へ出せるあらゆるほめ言葉。

※超人間的　人間業以上の。人間には出來難い程の。

※學術的に世界を壓倒する　學術の方面に於て完全に世界第一となる。壓倒するはおしたほす、つきとばす、文句をいはさない。

※立證する　證據立てる。

※とかく冷淡な傾がある　どうかすると科學を餘り尊重しないやうになりやすい。

※限りない光榮を人類の上に享けしめた　人類愛といふ點に於て、限りない光榮をうけさせた。多くの研究發見に成功して人類の幸福のために盡し、名譽をうけたことをいつてゐる。人類愛は、人類を全

體として愛する。人類全體を片手落なく愛すること。一個人一國民をのみ愛して他を憎むのは人類愛ではなく、また眞の愛でもない。

※これを思ふ時　ロックフェラー研究所が外國人だからといつて野口博士を差別待遇したり、研究に便益を與へなかたりはしなかつた。まことに科學に國境はないといふことを思ふと。

※高唱　熱心にとく。

※敬意を昂む　一層敬意を拂ふこと。

※地球を墳墓として　墳墓ははか、おくつき。地球を墳墓とするとは、飽くまでも全人類の爲に盡し、全人類の爲に一身を捧げるといふ覺悟を以ての意味。

※冷徹明澄　冷たく明らかに澄みとほつてゐること。

※精進　佛教語、精神を籠めて一所懸命に佛道を修め勤むこと。「サウジン」ともいふ。ここでは一心不亂に學問研究をつとめはげむといふ意味。

※使徒　キリストの十二人の弟子をいふ。使徒たちは眞心を盡してキリストにつかへた。轉じて「科學の使徒」といへば科學の爲に身命をなげうつて忠實に研究をはげむ人といふ意味になる。

※餘影　死後にのこる故人の面かげ。

※聞くもゆかしい　聞くだけでも何となく慕はしくなる。ゆかしいは何となく慕はしいといふ意味。更に知りたい聞きたい見たいと思ふ、眞相を見とゞけたく思ふといふ意味に用ひられることもある。

※挿話　英語の episode. 傳記又は一貫した長い話などでその本筋には關係なく、間に挿入されて一側面から、生き〳〵とその人がら又はその情況などを聞き手に感じさせるやうな、小さな短い話。

※故國をしのぶ　生れた國をしたひ思ふ。

※鄕黨　むらさと。ふるさと。支那周代の制に一萬二千五百家を鄕といひ、五百家を黨といつたのに起る。

※骨肉　骨と肉とを分けた近親。親子、兄弟。

※繁劇　非常に忙がしい。

※公務に縛せられ　公けの仕事があるために自由にならぬこと。

※勃々　盛んに起りたつ有樣。

※研究心に驅られ　研究したい氣持に追ひたてられて。研究に忙しくて。

※招聘　禮を厚くして丁寧に招きたのむこと。

※知友　心を知り合つた友だち。親友。

※切なる慫慂　非常に熱心に誘ひすゝめること。

※母堂　他人の母に對する敬稱。母君、母御、北堂。

※小影　小さな寫眞。小照ともいふ。

※小影に接す　小さな寫眞をうけとる。小影を見る。

※倉皇　蒼黃とも蒼惶とも書く。あわたゞしいこと。あわてること。

※故山　さと。故鄕。家山ともいふ。

※健在　すこやかにくらしてゐること。

※學僕　先生の家に下男として住みこんで學問をする人。

※恩寵　目上の人が目下の者になさけをかけてやること。恩倖、恩顧、寵愛などと同じ。

※權貴　權力があつて身分の貴いこと。

※薰陶　道德をもつて自ら範をしめして感化しその德性を成就させること。薰は香のしみこむこと、陶は燒きつけること。

※到らざるなし　十分に薰陶し後援した。

※牛追太郎　牛飼ひ小僧、太郎は長男につける最も普通の名前であるから、轉じて何の特色もない世間一般の少年といふ意味に用ひられたもの。

※話柄　話の種。語りぐさ。談柄ともいふ。

※椰子（やし）　棕櫚科椰子屬の常綠喬木で、高さは七八丈に達し、熱帶各地に自生する。木材は堅牢なので建築などに用ひ、樹液は砂糖を含んで、酒を作るに用ひる。果皮の外圍は强靱な纖維にとみ、これで綱具や綱を作り內面に附著する堅い胚乳を蠟燭及び石鹼の原料とし、內部の乳樣液は食用に供する。效用のひろい樹木である。

※青銅　唐金（からかね）。錫の合金で青黑い色を帶び、鑄物や打物に用ひる金屬。

※メンバー　member. 團體に屬する人。研究所員。

※泰斗　泰山北斗の略で、その道で最も偉い人として世に仰ぎ尊ばれる人をいふ。泰山は支那の名山で山東省泰安縣の北に聳えてゐる。北斗は北斗星のことで北天にある星座であり、その大なる星七つを結ぶと斗狀をなすのでこの名がある。泰山は山の王者として、北斗は星の王者として、共に世人の尊ぶものであるからこれを世人に尊ばれる偉い人にたとへる。

※先驅（せんく）の勇者　野口博士よりも前に黃熱病研究に從つた勇ましい學者たち、先驅は車馬に乘つて前列に行くこと、又その人をいふのが原義。

※業半（げふなか）ばにして倒れた　その仕事（研究）を完成しないうちに死んでしまつた。

※百千年の繁榮の途　百千年の後までも末長く榮えて行く途。恐しい風土病である黃熱病の原因が發見されて、豫防や治療の方法が見出されたから、黃熱病に脅かされずに榮えて行けるわけである。

※熱帶　南北回歸線の間にある地方。地球上溫度最高の所で一年に二度太陽を頭上に仰ぐ。晝夜長短の差甚だ少く、四季の變化は殆ど感じない。

※猖獗（しやうけつ）を極む　非常に猛惡に狂ひまはる。惡者の勢の非常に盛んであること。甚だしく惡强い。

※敢然（かんぜん）　思ひきつて。勇ましくも。

※天職（てんしよく）に殉（じゅん）ず　自分の身に自然に備はつた職務のために身命を捨てる。天職は天から與へられた職務としてはげむ仕事。自分の天稟の性に最もよく合ふ職業。

※人道の父　人の肉體的の苦痛を取り除いてくれる醫學に於ての大立者だから、人のふみ行ふべき道における父の如き偉い人といつたのである。

※猪苗代湖（ゐなはしろ）　福島縣中部の湖で磐梯山の麓にあり、水面は海拔五一四米、會津盆地は海拔凡そ二二〇米だから、これに注ぐ日橋川は激流をなし、ここに猪苗代水力發電所が營まれ、東京市の電燈と電車はここから多大の電力の供給を受けてゐる。翁島村はこの湖の西北岸にあつて、湖岸の風光はここが最も優れてゐる。御用邸があつて高貴の邸宅が多い。

※一寒村（かんそん）　さびしい村。貧しい村。

注　意

本文は所謂傳記的體裁を具へたものではない。併し野口博士の傳記の核心を最もよく紹介するものである。博士の死に對する世界の哀悼から始り、その學勳に及ぶのは傳記としては逆な順序であるが、併し此の如き突如たる出發によつて、勞頭先づ博士の學界に於ける偉人であることを讀者に强く印象づけてゐるのである。しかし、如何に偉い事業

をなした人であつても、その人に人格の床しさがなければ、我々の胸に直接觸れてくる偉人とはなり得ない。野口博士は冷靜な理性のメスを縱横に揮ふ科學の使徒であつたと共に、故國に殘した母堂の一片の小影に接するや、繁劇な公務も、研究もうち捨てて、倉皇歸朝の途をたどる孝子であり、舊師の恩を一生忘れなかつた床しい人格者であつた。かうした挿話をここにさしはさむことによつて博士の偉大な學勳と、床しい人格とは一つになつて我々の胸に迫つて、ここに博士の全容の紹介が完成されてゐる。最後に自分を犧牲にして濟世の道を歩んだ聖者のそれの如き悲壯な博士の死を敍して、人類愛に生きた博士の生涯を最も端的に讀者の胸に燒きつけて終つてゐるのは印象深い筆致といはなければならない。乾燥無味な傳記ではなくて、最も迫眞力をもつた全容の紹介になつてゐる。かうした全文の構成を生徒に特に注意させたいものと思ふ。

資料篇

參考文

本課に於ては、國境を超え人種を越えて全人類に貢獻するといふ人類愛の精神が强調されてゐる。人類愛の精神は我々の祖國を愛すること、卽ち愛國心と撞著するものではない。眞の愛國心といふものは祖國を愛する爲に友國を憎まなければならないやうな狹いものではない筈である。眞に祖國に貢獻する道は直ちに全人類に貢獻する道と通はなければならないもので、戰爭の如き極端な例でもそれは自己防衛以外の意味であつてはならない。世界人野口は人類愛の精神を雄々しく體現しつゝ、生涯日本人であることを誇つた。「我は日本人也」の自覺に立つて、世界全般の幸福の爲に働く人こそ眞の世界人であらうと思ふ。冷靜な科學の使徒であつたと共に、溫かい人格の人であつた野口博士の偉大さ——眞の偉人はかゝる人格の麗しさを一面に必ず具へてゐることを生徒にさとらせたいと思ふ。

自修文

大村彦太郎と三輪執齋

解說篇

教材

江戸時代に於ける出世二人男、大村彦太郎と三輪執齋とにまつはる挿話である。おみくじに暗示を得て將來の方針を定めた、二十歳と十八歳の青年二人が、相連れて江戸に上り、年限を定めて出世競爭を始め、早くも八年の後には、雙方共に數多の人の上に立つ地位、名望を獲得し、上京の日に別れた「日本橋上の夜に、舊を憶ひ今を思つて、相擁して泣いた」といふ、誠にめでたい話である。現代の青少年の氣風には、ちよつとそぐはないやうな節もないではないが、二人の競爭心、その奮勵努力は、以て大いに學ぶべきものがあると信ずる。

指導篇

扱方

發憤立志に關係した讀物的教材であつて、用語文章共に平易であるから、生徒各自の自修に委せて、話の面白さと含まれてゐる教訓とを酌み取るやうにさせたい。この物語の面白さは、二人の青年の出世競爭の方法の異常な所に懸つて居り、それは一應の通讀によつて、たやすく理解されるはずである。けれども、話の本當の面白さは、時と場所と登場人物との三者を理解する時、一層加はるわけであるから、若し時間の餘裕があつたなら時代の觀念と、彼等がおみくじを引いた京都の「北野神社」、人生雙六の振出し「日本橋」、三輪執齋の屬する學派「陽明學」、大村彦太郎を祖とするデパート「白木屋」等に就いて、簡單に解說して頂くと、結構だと思ふ。

展開

本文は敍述の推移によつて左の六段に分けてみることが出來る。

第一段——冒頭(から)をりからの朝日を受けて紅潮を呈した二人の頰には、鐵よりも堅い決心が見られた(まで)。京都は北野の天滿宮で、二人の青年——大村彦太郎と澤村善藏——が、おみくじを引いて、神託を得、互に立身出世を誓ふ條で、この物語の發端をなしてゐる。書出しはいきなりおみくじの文句から始る。地の文から始る普通の行き方と逆である。かういふ書方は、會話から始めるのと同樣に、讀者の注意を卒直に文中に惹き入れる效果があるが、無暗に用ひると嫌味を感じさせる。

第二段——鐘一つ賣れぬ日もない(から)夜の群集に紛れ込んでしまつた(まで)。

彦太郎と善藏の兩名が江戸へ出て、日本橋に現れ、その橋の上で、出世競爭のスタートを切る所である。二人は五年後の今月今日此所で再會することを約して別れる。この一段は主として會話によつて筋を運んでゐる。第一段と第二

段との間を一行明けてあるのは、京都から江戸へ、場面が移るからである。

第三段――彦太郎は商賣にかけては（から）店運は日に〳〵隆盛に赴いた（まで）。

彦太郎が商人になつて、日本橋通一丁目に小切の店を開くほど、若干出世するまでの經緯である。

第四段――滿五年目の三月三日は來た（から）三年後の大成を誓つて、二人は再び袂を分つた（まで）。

五年後の約束の日、幾分か出世した兩名が、日本橋橋上で劇的對面をする所である。彦太郎の出世ぶりは前段で語られたから、ここでは善藏の身の上が語られる。彼は初め醫師たらんとしたが、志を儒者に轉じ、佐藤直方の門下となり、厩橋の酒井侯から十人扶持を賜はるに至つてゐた。職業は變れども榮進ぶりは、甲乙なかつたわけである。これに滿足せず、二人は更に頑張り期間を三年延長し、三たび日本橋で逢ふことを約束する。

第五段――三年は經つた（から）舊を憶ひ今を思つて、相擁して泣いた（まで）。

三年後の邂逅で、今度は二人とも、飛躍的に出世してゐたことが、簡潔に語られてゐる。彦太郎は手代五十人も使ふ大呉服商に、善藏は酒井侯から三十人扶持を賜はり、その邸内に賓禮を以て遇せられる大した學者となつてゐた。かくて出世競爭はめでたく終りを告げる。

第六段――江戸時代を通じて（から）終り（まで）。

無名の二青年が、實は有名な儒者三輪執齋と、大百貨店白木屋の祖大村彦太郎であることを附記して、本文を終つてゐる。

解釋

※ 東に赴き商賈云々　東方に赴いてあきんどになるならば運の開けることは疑ひない。

※ みくじ　（御鬮）神社佛閣に備へて置いて、參詣人に探り取つて吉凶を決めさせるくじ。「おみくじ」は「みくじ」で敬語であるのに、俗人がこれを忘れて、更に「お」を添へたもので、「おみ輿」、「おみ酒」などもこの類である。

※ 會心（くわいしん）の笑（ゑみ）　心にかなつて發したわらひ。

※ 東に赴き儒醫云々　東方に赴いて儒者、若しくは醫者になるならば非常によい。「大々吉」は「大吉」に輪をかけた吉である。

※ 北野の天滿宮　今京都市上京區馬喰町にある官幣中社北野神社。祭神は菅原道眞。

※ 大村彦太郎　近江から出て白木屋呉服店を開業した。白木屋はそれから二百餘年連綿と續き、今日の株式會社白木屋に至つてゐる。今の社長は大村彦一郎といひ、男爵鴻池善右衛門、男爵牧野忠良等と姻戚關係がある。

※ 澤村善藏　三輪執齋。江戸時代の儒者。名は希賢。通稱善藏、別號躬耕廬。京都の人。佐藤直方に師事して、王陽明の良知の說を奉じ、厩橋藩主酒井侯に仕へたが、程なく辭し、三都の間を往來、遊說した。中院内大臣に和歌を學んだ。寛保四年（一二四〇四年）歿、年七十六。陽明學明義、四言教講義、傳習錄標註等の著がある。

※ 老鋪　數代續いて繁昌してゐる商店。

※ 家運を挽回（はんくわい）する　一家の運命をもとへひきもどす。

※ 町醫者　昔、御殿醫などに對して、坊間に開業して

ねた醫者をさういつた。

※青雲の志（せいうんのこころざし）　立身出世の願。「青雲」は高位の地。

※神慮　神樣のおぼしめし。

※通夜（つや）　佛堂に參籠して、終夜祈願すること。ここでは佛堂でなくして、神社である。

※身を粉にする　能ふだけの力を盡くす。身を碎く。粉骨碎身といふ熟語がある。

※志望の達成　こゝろざしを遂げること。

※紅潮を呈した頰　くれなゐ色のさして來た頰。

※鐵よりも堅い決心　非常に堅い決心。

※鐘一つ賣れぬ日もない云々　「鐘一つ」の其角の句を引いて江戸の繁昌を形容したもの。其角の句の意は文字通りで、鐘のやうなものでも、（鐘などは日用品と違つて取引されることの少いものである。）一日に一つ賣れない日はない、さすがは江戸である。

――「鐘一つ賣れぬ日はなし」で、殷賑で太平な江戸の春を表象したもの。「大江戸」は江戸をほめたゝへていつた語。

※眞直中（まつたなか）　まんなか。中央。

※日本橋　市内電車日本橋停留場の北にある。慶長八年（家康が將軍となつた年）の創架で、翌年この橋詰を國内里程の元標と定められた。現今のものは明治四十四年の架替で橋名は德川慶喜の揮毫に成る。今の橋の中央に全國里程元標がある。ここを起點として市内を通ずる國道は左の五線である。東海道（銀座通を經て品川に至る）、中山道（神田昌平橋、本鄕、追分、巢鴨を經て板橋に至る）、奥羽街道（大傳馬町、淺草橋、花川戸を經て千住に至る）、千葉街道（日本橋區元柳町で奥羽街道から分れ、兩國橋、相生町、竪川通を經て市川に至る）、甲州街道（呉服町から丸ノ内に出で、外濠に沿ひ、半藏門から麴町通を經て新宿に至る）。

※往來の群集車馬が云々　ゆききの群集や車馬が機で布を織るやうに行交うてゐる。

※旅姿　旅行する時の衣服をつけたすがた。

※聞きしに優る　聞いたのに優つてゐる。聞いてゐたのより優つてゐる。「し」は時の助動詞「き」の連體形。き（終止）、し（連體）、しか（已然）と活用する。過去を表す助動詞である。

※目のあたり（め）　目のまへ。目前。

※身より賴りのない　身内やよるべのない。親類とか緣者とか賴る所のない意。

※精限り根限り　精力と根氣とのありつたけを出すこと。精根を盡くすこと。

※身上　とりえ。ねうち。

※獨立獨行　他に賴らず自己の信ずる所によつて世に立ち事を行ふこと。特立獨行。

※見ず知らずの他人　一面識もない他人。

※張合（はりあひ）　かひのあること。せんのあること。

※赤の他人　全くゆかりのない他人。

※身體をな大事に　「な」は感歎の意を含んだ感動詞。

※商賣にかけては　商賣にわたつては。商賣に至つては。

※桂庵（けいあん）　奉公または緣談などの媒介をなすもの。桂庵は江戸の醫者の名で、その人が緣談の媒介をしたことからいふ。

※手代（てだい）　商店で番頭と丁稚との間に使はれる召使。見世の者。若い者。

※寢る目も寢ず　よどほし寢ずに。よの目も寢ずともいふ。

※資本　事業の成立存續に要する基金。もときん。もとで。

※日本橋通一丁目　日本橋通町の謂で日本橋から南へ四丁目まで數へた。通一丁目はその最初の一角である。今は通三丁目までしかない。

※小切（こぎれ）　布帛の小さい切れはし。反物の切れはし。

※かうした商法　小切ばかり專門に賣る商賣である。

※涙ぐましい努力　涙をもよほすほどの努力。

※日ならずして　とほからずして。不日。

※櫛比（しつぴ）する　櫛の齒のやうに密にならぶ。

※客足を引く　顧客を吸收する。「客足」は商店または興行場などに客の來るほどあひ。來客の多少。

※仲間（ちゆうげん）　武家のしもべの長。

※一目見るなり　一目見るや否や。一目見るとすぐ。「見るなり」は副詞で、下の動詞「思つた」に係る。「行きなり」などと同類である。

※佐藤直方（なほかた）　江戸時代の儒者。剛齋と號した。備後福山の人。山崎闇齋の門に學び、江戸に移り、初め結城侯に仕へ、後、辭して厩橋侯に仕へること二十年。辭して更に彦根侯の殊遇を受けた。性闊達不羈、頗る才辯あり、淺見絅齋、三宅尚齋と併せて崎門の三傑と稱せられた。享保四年（一三七九年）歿、年七十。

※塾生（じゆくせい）　塾にある學生。塾は子弟を教授する私學舍。

※夙夜（しゆくや）　あけくれ。あさゆふ。

※代講（だいかう）　他人に代つて講義する者。

※推擧（すゐきよ）　人を薦めあげること。上へとりもつこと。

※厩橋（まやはし）　前橋市の舊名。同市は群馬縣の首都。兩毛線の重要驛。利根川その西境を洗ひ、背後に赤城の雄峰を負ふ。酒井氏及び松平氏の舊城下で、今本丸趾に縣廳がある。製絲業盛んに行はれ、繭、生絲の取引が多い。人口八萬七千。

※酒井侯　清和源氏の裔で、譜代大名。大老、老中等の要職に就いた家柄である。寛延二年（一二四〇九年）忠恭（たゞすみ）の時、厩橋から播州姫路に移封、爾來相繼いで明治維新に至り、華族に列し伯爵を授けられた。さて三輪執齋の仕へたのは厩橋時代の酒井侯の誰であつたか。それは執齋の傳記等にも記されてないので、明らかでないが、時代考證の結果、忠擧（たゞたか）であらうといふ結論を得た。忠擧は慶安元年（一二三〇八年）に生れた。執齋は寛文九年（一二三二九年）の生れだから、忠擧の方が二十一歳年長である。忠擧は元祿十一年（一二三五八年）幕府の大留守居役になつてゐるが、この時執齋は年三十で、學問にも油の乘つて來た頃である。なほ執齋が酒井侯に仕へたのは、二十二歳の春であつた。

※十人扶持（じふにんぶち）　「扶持」とは米を以て給する祿をいふ。石高は一人一日の食料を標準として與へるものだから、何人扶持の稱がある。一人扶持は、大抵四合の割合であつた。故に十人扶持はその十倍で、四升の割合になる。「扶持」はもと「タスクル」の義で扶助といふに同じ。その人に祿を與へて扶助するの意から轉じて、祿そのものをいふこととなつたのである。

※邸宅を賜はる　酒井家の邸舍の中に居宅を賜はつたのである。

※袂（たもと）を分つ　離別する。わかれる。

※推しも推されもせぬ　獨立獨行のさま。

※名を馳せる　名を走らせる、即ち有名になる。

※三十人扶持　十人扶持の項參照。

※賓禮（ひんれい）　客分としての禮遇。

※諸侯　大名。

※たゞならぬ　一通りならぬ。つねなみでない。

※知遇を得る　あついもてなしを受ける。「知遇」は己の性質をよく知られて厚く待遇されること。

※番頭　商家の雇人で、店の萬事を預るもの。

※若黨　年若い郎黨。郎黨は武家の家臣。

※舊を憶ひ今を思ひ　「憶ふ」はおもひやる意。「憶ふ」、「思ふ」は、同じ字が重なつては面白くないから、別の字を使つたもの。

※相擁して　相抱いて。

※陽明學　王陽明の學說。その根幹は致良知の說に基づく。良知は先天的、絕對的、普通遍實在で、陽明はこれを天または理と稱した。吾人は本來良知を具有するが、私欲に蔽はれて昏迷する。故に誠意を以て心の不正を去り、その本體の正を全くし(格物)、以て良知を開明すれば卽ち天理明らかに萬物正に服する。また知は行の始、行は知の成といひ、知行合一を說く。江戸時代に於ける陽明學者の著名な人を擧げれば、先づ德行で名高い中江藤樹。日本の陽明學は、固より王陽明に淵源するのであるけれども、半ばは藤樹學であるとまで言はれる。次は藤樹の門弟熊澤蕃山、蕃山が若い頃藤樹に弟子入せんとしてなか〳〵容れられなかつたのは有名な話である。蕃山は藤樹の學をよく繼承した人であり、かの物徂徠も一目置いたほど偉い學者であつた。藤樹蕃山以後には、陽明學者が陸續と輩出した。北島雪山、三重松菴、三宅石菴、それから三輪執齋である。執齋は初め佐藤直方に就いて朱子學を學んだが、一度陽明の書を讀んで、陽明學派に歸し、中江を深く尊信した。朱說を聞きながら反つて私に王學に歸したので、師直方の怒に遭ひ、絕交せられ、暴言を受けるに至つたが、後、直方は漸くその學を變じたのは名利の爲でないことを知り、遂に許して舊のやうに會ふに至つたといふ。執齋の後に、川田雄琴、中根東里、三奇人で名高い林子平、それから佐藤一齋、梁川星巖がある。次は亂を起した大鹽平八郎(中齋)、彼は陽明學の方では大した學者であつた。中齋以後に、吉村秋陽、山田方谷、橫井小楠、奧宮慥齋、佐久間象山等があり、維新の豪傑西鄕隆盛、その門下から多くの元勳を出した吉田松陰も、明らかに陽明學を受けてゐる。

※泰斗　世人の最も仰ぎ尊ぶ人。泰山北斗の義。

※儒林　儒者のなかま。

※東京に於ける大百貨店　東京には百貨店(department store)が多い。これからも益〻殖える一方である。先づ大きな所を擧げると、三越、白木屋、高島屋、松坂屋、松屋等。これ等は東京の代表的百貨店でもあるし、また日本の代表的百貨店でもある。關西では大丸が大きい。東京には以上の外に、伊勢丹があり、從來の百貨店と行き方を異にしたものには、電鐵會社の經營する百貨店(例へば地下鐵ストア、東橫デパート、京濱デパート)及び一般商店の百貨店化したもの(例へば伊東屋、萬崎、美津濃等)がある。

※白木屋　日本橋區通一丁目及び同平松町に跨つて位置し、日本橋の市電交叉點の角に立つ。資本金一千五百萬圓の株式會社として逐次發展した。三越に亞いで日本に於ける最も古い百貨店としての歷史を有する。昭和三年十一月、構成主義的なモダーンな建築を完成し、世界の建築界に衝動を與へた。鐵骨鐵

筋コンクリート造七階建で、設計は東京朝日新聞社屋と同じく石本喜久治氏。昭和七年十二月火災に遭ひ、翌年六月改築が落成した。昭和十年四月六割の減資を斷行、その後營業の發展と內容の堅實を計つてゐる。本店の外に多數の出張所、分店がある。

注　意

彦太郎と善藏との二青年が一生の方向を決する大方針を定めるに當つて、おみくじに賴つたといふことは、現代の常識から考へてみると、隨分滑稽であり、無分別である。現代の青年なら夢にも企てはしまい。幸ひ二人に相當した職業が指定され、且出世したからいいやうなものの、若しこれが失敗したら、一生の笑ひものである。しかし、諸式鷹揚に出來てゐた昔には、屢〻かういふ方法が選ばれたものであることを知るべきである。發憤の動機はともあれ、志を立て合つた同志が、或期間を置いて再會を期し、それまで競爭的に勵み合ふことは、朝夕語り合ひ、日夜激勵し合ふといふやうな普通の方法より、相手の成績がいよ〳〵つき合せて見る瞬間まで皆目判らないだけに、一段の刺戟と興味を惹き、從つてそれだけ效果の多い方法であるかも知れない。しかし、この方法は、社會生活が複雜化し、活動の天地が擴大するにつけ、實行に多大の困難が豫想されるので、萬人が模倣するわけには行かないであらう。それよりも根本的な朋友の問題に就いて考へてみたい。假に彦太郎と善藏とが孤立してゐて、同志を持たなかつたとしたら、あのやうな出世競爭は行はれなかつたであらうし、從つてあのやうな成功は結實しなかつたかも知れない。さうすれば、彦太郎に取つても、善藏に取つても、良い友人を持つたことが、成功を齎す根本原因であつたといへる。友人は善惡ともに感化力の甚大なものである。彦太郎と善藏とは優良な人物と人物との交りであつたため、その進步發展は目覺しかつたのである。生徒をしてここに思を致さしめ、優良な友人を選んで交り、交るには信義を以てし、互に切瑳琢磨して人格の修養と學力の向上とを圖るやう指導して頂きたい。

資料篇

關係文獻

本文は訂補者が主として「獻徵先賢錄」に據り、傍ら二、三の書を參考にして書下したものである。故に左に「獻徵先賢錄」の文を揭げて置く。

執齋は京師の人なり。歲十八の春母方の族人大村彦太郎といふ者と、何ぞ相應の功業を成して、世に知らるべしとて種々の事を考へしが、兩人して、北野の菅公廟に通夜して銘々に終身の決着なすべしと鬮をとりしが、醫者か儒者になるべしといふ。彦太郎は商估となりてよく產業を豐にすべしといふ。さあらば、江戸へ行くべしと定めて、兩人して遂來下し品川驛に到りて、これより速ならば十年、遲くならば二十年、互に時を得るをまちて面會すべし。されども是より何方へ寄寓するも、各〻の知音を賴んで、人の手をまつ事なれば、行く先も知れず、命さへあらば、まづは五年の星霜を經て、日本橋の上へ斯日の夜を以て待逢ふべしとて別れぬ。時に貞享三年、丙寅の歲の三月三日なりとぞ。執齋は東下の歲は、眞野善藏と稱し、諸方の藩醫などへ隨身して醫業を學ばんとせしが、これぞといふ名師にも遇はずして、空しく一年の光陰を過せしが、翌年十九歲の春、初めて佐藤直方の門に入りて儒者と成るべしと思ひ、直方が塾生となりて、其家に寓せり。直方は厩橋の酒井侯の賓師として侯の餼糧を受け、其優禮甚だ厚くして、

大手前の邸舍中に在り。執齋能く師を敬し、業を勵み、學術も大に進む。直方も大に其人となりを賞して、時々諸家よりの招請の請筵に、執齋をして代りに行かしむ。二十二歳の春は、直方の推擧によりて、學業の賚として、酒井侯より俸米十口を賜り、別に邸舍中に於て居宅を賜はるに至る。時に三月三日に至りければ、兼て五年以前、大村彦太郎と日本橋の上にて、夜中に待合ふべき事、約し置しなれば、黄昏より僕奴一人を召連れ、橋上へ行きしが、彦太郎もまた一人の僕を從へ來りて、互に舊を談して、時刻を移しけるが、間も四日に近ければ、互に居處をあかし歸り、尋ねゆくべきにまだ十分の時を得しといふにはあらざれば、今三年を過ぎて、又々斯所にて出あふべしとて別れぬ。果して亦三年の後には執齋は、若黨兩人蒼頭兩人を從へて、箱提灯をとぼさせゆきぬ。彦太郎も亦若者兩人、小僧貳人を從へて來りぬ。互に先づは時を得しに近しとて、今は廐橋より三十口の扶持を贈られ、其邸中に賓禮を以て遇せられ、其餘の諸侯數家に招請せられ、衣食まで何の不足もなくして、昔に異なるを告げれば、彦太郎も日本橋通一丁目へ、以前より小切の店を開きしが、今は小切にてはなし、次第に繁昌して、呉服の商ひを爲し、白木屋と唱へ、先は五十人に近き手代を抱へ、千金の産を成したりとて語りける。これより互に往來して、兄弟の交りを爲すべしとて、彦太郎は執齋より歳二つ長じければ、兄なりとて、生涯を送りしなりとぞ。

一八　蟲の音

解説篇

作者

高濱虚子（たかはまきょし）。俳人。本名を清といふ。（清からキヨシといふ號をつけた。）明治七年二月、愛媛縣松山市に生れた。第三高等學校、第二高等學校を中途退學した。正岡子規の門に入り、國民新聞俳句の選を擔當し、明治三十一年「ホトトギス」を東京に移しこれが主幹となつた。その後、國民新聞に入り、「國民文學」を創設したが、二年で退社した。また夏目漱石と共に小説に筆を染めたこともあるが、以後は「ホトトギス」の主宰者として、俳句道に專念してゐる。その作品は子規と同じく寫生文をよくし、俳味、輕快味があり、熱情を以て事物に同感し、主觀を詠じ複雜なる人事時間を含める事物を描く。言換へれば、主觀的であり、理想的であり、餘韻があり、大舞臺を描くに適し、餘裕ある作風を示してゐる。著書に、「俳偕師」・「朝鮮」・「柿二つ」・「二三片」（以上長篇）「鶏頭」・「凡人」・「道」（以上短篇）「一二片」（隨筆）・「俳句入門」・「俳句とはどんなものか」・「現代俳句評釋」・「虚子句集」・「句集虚子」等があり、この外に寫生文、紀行文、能樂、小鼓に關する者がある。その主なものは、改造社の「高濱虚子全集」に收められてゐる。

引用書

高濱虚子全集。全十二卷。昭和九年、東京、改造社發行。全集とは稱するものの、虚子の著書は非常に多いので、悉くが收められてゐる譯ではない。先づ選集といつたところである。本課は、第三卷（寫生文集、下）から採つた。原文では標題が、「蟲の音と秋草」となつてゐる。註によれば、大正八年の作である。

教材

秋もなかばの一夜、下弦の月の出かゝる頃、草の葉も土の中も空氣のすみ〴〵までも、しつとりと夜露にうるほつた頃、庭一ぱいに、否天地の間にあふれてなきしきる蟲の音を、いとも微細に描き出した作者得意の寫生文である。「闇の涼しさ」もそれからくるのではなからうかと思はれる蟲の聲。闇の中に明らかにその色が感じられるやうな蟲の聲。足音の移動につれて波の起伏のやうに高まり低まる蟲の聲。月の光がゆきわたるに從つて、影のやうにうすれてゆくやうに感じられる蟲の聲。それは作者の纖細を極めた情感と筆とに依つて心ゆくばかりに寫し出されてゐる。一讀何人も溺れるばかりに蟲の音にかこまれ、ひえ〴〵とした秋の夜の空氣が、直接膚に觸れてくるやうな氣持にひき入れられずにはゐられないだらう。

指導篇

扱方

季節に關聯を持つた文學的教材であるから、表面的な解釋に止まらずに十分に鑑賞せしめたい。本文は寫生文の實に申し分なき見本である。作者得意の描寫の筆は冴え渡り、讀者をして蟲の音すだき、秋草亂れる庭の直中にあるやうな感を起させる。この描寫の妙味を十分に味はひたい。寫生文といつても、作家によつて、その書き方に相違がある。眼の働きを主にして、眼に映る對象のみを文章に描く作家もあれば、眼以外の、感官をも働かせて、これを巧みに按排して書く作家もある。五官といへば、眼、耳、鼻、舌、皮膚の感覺であるが、これを適當に働かせて描寫する方が、視覺のみを主とするよりも、作品が立體的となることは確かである。本文はどうかといふと、聽覺（蟲の音）と視覺（庭の景色）とを主に働かせてゐることはいふまでもないが、皮膚感覺――觸覺を働かせて書いてゐる部分も、僅かではあるけれどあるのである。即ち「冷やかな沓脱石の上に素足をのせて……。」また「涼しさといふ感じは通り越して、うすら寒い感じである。」等はその例である。五官のうち、三つの感覺が動員されてゐると見てよいと思ふ。かういふ點に注意されれば、生徒の作文の參考になるであらう。全文の鑑賞に就いては、後の「鑑賞」の所に述べてある。

展開

敍述の推移によつて、左の八節に分けて見ることが出來る。

第一節――冒頭（から）それはきつとこの蟲の音から起るのであらう（まで）。

作者は緣に腰かけ、闇の庭から聞えて來る夥しい蟲の音に耳を傾けて、音色を聞分けようとする。

第二節――ふと聞くと(から)天井や床の下の音に張合ふもののやうに見える(まで)。

蟲の音の聞える方向は、まち〳〵であつて、庭と天井と床下のそれが、互に呼應するやうに聞える。

第三節――じつと闇を見詰めてゐると(から)眼前に明らかに見えるやうな感じを起させる(まで)。

闇を見詰めてゐると、蟲の音色が目に見えるやうに感ぜられる。松蟲、馬追蟲、轡蟲の鳴聲は、それ〴〵或意味を以て聞かれる。これ等の鳴聲の錯綜する樣が、宛も目の前に見えるやうに感ぜられる。

第四節――沓脱石の上を足で探ると(から)愈〻蟲の音の直中にゐるやうな心持がする(まで)。

作者は庭下駄を突つかけて庭に降り立つ。蟲の音は、その足音につれて、音を潛めたり、高く張上げたりする。

第五節――この時、どことなくほの白くなつて來た事に氣がつく(から)その有樣も手に取るやうに見える(まで)。

時間が經ち、下弦の月が現れようとして、庭が薄明るくなつて來る。今までたゞ黑い叢であつたのが、それがさまざまの秋草であることが分つて來る。そしてその秋草の樣子や風情まで、はつきりして來る。

第六節――月はやがて(から)殘らず目に入るやうになつた(まで)。

下弦の月が、愈〻昇つて、庭のたゝずまひが隈なく視界に入る。

第七節――ふと氣がついて見ると(から)哀れにか細い音に聞える(まで)。

月が昇つて、庭の景色が明らかになると、今度は蟲の音が朧氣になつて行くやうに感ぜられる。

第八節――私は再び竹緣に來て(から)終り(まで)。

作者は再び緣に腰かけて、庭の面を眺める。秋草に置く露の一つ〳〵光るのが、よく見える。露の玉がはつきり見えるのに引替へて、蟲の音は段々消えて行く。作者は再び蟲の音に耳を傾ける。

解釋

※朽ちた　枯れくさつた。

※竹緣　竹を並べて造つた緣。

※沓脱石(くつぬぎいし)　戸口又は緣側のあがり口に履物をぬぐためにすゑた石。

※素足　「スアシ」と讀む。

※松蟲　直翅類の昆蟲。體長六七分。體は紡錘形をなし、體長の二倍ほどある觸角を持つてゐる。雄は雌よりも幅廣く、前翅を相摩して聲を出す。雌は上方に曲つた產卵器を有し、多く松林に產する。八九月頃清らかな聲で鳴く。これについて文學博士西村眞次氏の「鳴く蟲の觀察」には次のやうに書いてある。

「マツムシはチンチロリンと鳴く。その聲をスヾムシに比べると、休止が促急であるのみならず、調(しらべ)も複雜で、何となく忙しい感じが起るが、蟋蟀科の中では一番進歩した調を持つてゐる。」

※こほろぎ　蟋蟀。直翅類の昆蟲。全體褐色で頭部は比較的大きく、觸角は頗る長い。二つの尾毛を有してゐる。常に日光を嫌つて日陰に棲み、人家近くコロコロコロと鳴く。なほ西村氏はいふ。「鳴き聲ははつきりして力强く、ヒメコホロギなどよりは落ちついて聞かれる。初めは草むらだの、石垣の中だの、垣根の下だのにゐるが、夜寒になるまゝに段々と家の側近く寄つて來て、夜つぴてコロコロジイジイと鳴く。旅などでこの聲を聞くと物のあはれが感ぜら

れて、家郷の事を思ひ出す。」

※いとど　こほろぎの異名で、京都の方言である。作者は、こほろぎといとどを別のもののやうに書いてゐるが、これは作者の思ひ違ひである。

※きり〳〵す　直翅類の昆蟲。形はいなごに似てゐる。觸角は體より長い。雄は一寸二分ばかり、雌は更に肥大で一寸四五分。雄の前翅の相接する所は強硬で發音器となる。雌は翅短く、腹部の後端に產卵器を出してゐる。晩秋地中に產卵し、卵子は翌春になつて孵化する。八九月ごろ草間で晝夜を分たずに鳴く。はたおりむしはきり〳〵すの異稱で、その鳴聲の聯想から名づけられたものである。又西村氏の文を引用すれば、「廢址、荒園、秋草の思ふまゝに生えたところでこの蟲の鳴く聲を聞くと、何となく寂しく憂はしいやうな氣になる。暑い眞晝の唐黍畑にかのギイイイスチョンと鳴いてゐるのが、風に誘はれて耳に入ると、眠いやうな、懶いやうな感じが起つてくる。」と述べられてゐる。なほ古くは、こほろぎときり〳〵すとをとりちがへて呼んでゐた。で古歌できり〳〵すと詠んだのは皆今のこほろぎである。

※聞分ける　よく區別して聞くこと。又なつとくする、得心するといふ意もある。ここでは前者。

※綾錦　綾と錦、綾はいろ〳〵の色どり模樣などを綾織（後出）で表した美しい絹織物である。「錦」は精良な絹絲を用ひ、地を綾織とし、金箔、又は金絲と畫絲を用ひて繪模樣を織出して、これ亦美麗な織物である。

※絲を云々　即ちすでに出來上つた綾や錦を見ながら、その綾絲をこれが赤、これが青などと選び分け見分けることの困難さをいつたのである。

※織成された　織つて仕上げられた。

※凜々　鋭い感じの身にしみるさま。又勇ましいさまにもいふが、ここは當らない。

※一叢　一かたまりに生ひ茂ること。

※音を張上げる　一所懸命に高く鳴き聲をたてるのである。「張る」は盛んにする、奮ひ起す等の意がある。

※騷々しい　さわがしいこと。物音のうるさいこと。

※闇の涼しさといふ樣な云々　「闇の涼しさ」（それに對して「光の暖さ」）といふやうなことがあるとすれば、その「闇の涼しさ」といふものは、きつとこの闇にすだく秋の蟲の音から生れ出てくるものであらう――一般に光は我々に暖氣を思はせ闇は涼氣を聯想せしめる。又科學的にいつても、螢の光のやうに全然熱のないものあるが、普通は光は必ず熱に依つて發するものであり、熱の冷却は同時に光の減退――闇――を意味する。

※否　ここは、いや、「涼しさ」といつたのでは當らないの意。

※うすら寒い　少し寒い。どことなく冷え〳〵として寒いこと。「うすら」は薄。清愼公集に「はつ雪のうすらにふれる庭のおもは蹈み見んこともあたらしきかな」とある。うそ寒い。

※壁の所に當つても　壁のある方にも。

※床の下　「ゆか」は室內の人の居坐し又歩行するところ。

※高音　高調子の音。ここでは高い鳴聲。

※一際　一だん。一層。ひとしほ。

※張合ふものの樣に云々　「張合」は競爭すること。「見える」は思はれる。いくつもの蟲がお互にその聲

の高さをきそつてゐるやうに思はれるのである。

※音色（ねいろ） quality of tone. 音の高さ、長さ、強さが等しい場合にも、なほその發音體の種類を識別させるもの。例へば同じハ（C）調のド（Do）であつても、又その強さと長さとを同じく奏しても、ピアノの音とオルガンの音とは明らかに聞きわけることが出來る。つまり音色は音の持つ個性である。

※ちんちろりんと鳴くその鳴聲　松蟲の鳴聲である。

※透明（とうめい）な音色　「透明」はすきとほること。くもりなくあきらかなこと。すんだ音色。反對に木を伐る鋸の音などはすんだ音色ではない。

※りん〳〵と鳴く蟲　鈴蟲。

※明らかに「響く」にかゝる。はつきりひゞくのである。

※此所もとにあるぞよといふ風に　「此所もと」は此所許。このところ。ここ。「ぞよ」は「ぞや」に同じく、これと指し示して意を強めていふ語。ここにゐますよ！とでもいつてゐるやうに。

※すいつちよ〳〵といふ蟲　馬追蟲。　きり〴〵す科に屬し、綠色小形で、きり〴〵すに似てゐる。夏の夜、燈火を慕つて人家に入つて來て「しい、しい」又「すいつちよ、すいつちよ」といふ風に特有の鳴方をする。それが馬を追ふ聲に似てゐるといふのでこの名がつけられたのである。

※がちや、〳〵、〳〵　轡蟲（くつも）。がちや〳〵と鳴いて轡の音に似てゐるからこの名がある。きり〴〵す科に屬する昆蟲。形は殆どきり〴〵すと同じであるが、翅がきり〴〵すより大きく、觸角が體長よりも長く細長い肢が特殊の形を呈してゐるからそれと區別がつく。和泉式部の歌に「吾が脊子は駒に任せて來にけりと聞きに聞かするくつわ蟲かな」といふのがある。

※格段（かくだん）　かくべつ。とりわけ。

※あばれ者　暴者。亂暴者。がむしやらな者。

※もの哀（あは）れげ　何となく哀れをおびてゐること。「もの」はあらはに言はず、漠然と言ふ接頭語。

※のさばり出る　「のさばる」はほしいまゝにはゞをきかすこと。ひとりはゞをきかして出しやばるのである。

※一種の哀れさが見える　思ふまゝのさばり出て我意を通してゐるやうで憎らしいのであるが、またその中にある特別な可憐さが感じられるのである。「見える」は感じられる。聞きとられるといふ程の意で、のさばり出るやうな聲の中にこもつてゐる哀れさが看取されるのである。

※看取（かんしゅ）　むづかしくいへば、見てその眞相をつむかこと。見てとること。ここで「看取される」といふのは聞きとられる、さういふ風に聞きなされる意。

※諸の音　いろ〳〵の物音。ここでは種々の蟲の鳴聲。

※つぶ〳〵とした　極めて小さな粒になつて散らばつてゐるさま。ここでは單に小さな細かな、たとへばチチチチといふやうな鳴聲の形容である。

※錯綜（さくそう）　くみあはせること。又いりまじること。ここでは後の方が適してゐる。

※この音色のをさになり云々　いろ〳〵の蟲のさま〴〵の音色が、幾百千となく入りまじり、入り亂れて響くのを聞いてゐると、ちやうど織機（はた）の筬が縱絲や横絲を織り組ませるやうに、無數のいろ〳〵の音色が組合つたり、又綾織のやうに美しく斜に交叉

し合つたり、又縦絲横絲がもつれたりほどけたりするやうに入り亂れたり、又絲を一度ほどいて卷返すやうに、或は卷きつけておいてひき出して又それを卷きつけるやうに、韻律的に繰返し〳〵響いてくるさまが手に取るやうに、はつきりと聞えてくるといふ意。即ち蟲の音が入り亂れ、遠のいたり近づいたり、やめたり又始めたりしてゐるさまを、織物に譬へて述べたのである。筬は織機の附屬具。縦絲（經絲）の位置を整へ、横絲（緯絲）を織込むに用ひるもの。我が國在來のものは、薄い竹片を連ねて櫛形とし、上下左右に框をつけたもの。現今では鋼鐵、又は眞鍮製の針金を以て製した薄片を用ひるものもある。綾は綾織（斜紋組織）の意で、織物原組織の一で、平織、繻子織と共に織物三原組織と名づけられ、他の組織はみなこれから誘導せられたのである。

即ち綾織は斜に線を交叉して目覺めるやうな美しい模樣を表す織方。單に織方の名稱であるから、その絲は絹でも木綿でも差支はない。但し前の「綾錦」の綾は綾織物――綾織に織られた絹のことを意味してゐる。

※闇に目があれば　闇でも見える目があるなら。

※庭下駄　庭園を歩くための粗末な、齒の廣い、多く麻繩で鼻緒をすげた下駄。

※つゝかけて　突掛けて。ちよつとひつかけるやうにはいて。

※おり立つ　降りて行つて立つ。

※音を潛める　鳴聲をひくくする。「ひそめる」はしのび隱れるやうにする、しのびやかに、ひそかにする意。

※佇む　立つてやすむ。立ちとゞまる。

※心をゆるす　心をゆるやかにする。安心する。

※高まる　高くなる。

※潛み音　しのび音。ひくくおさへた鳴聲。

※最前　ここは先ほどの意。

※眞中　まんなか。

※ほの白く　かすかに白く。ほのかに白く。「ほの」はほのかに、かすかにの意。

※下弦の月　月が弓狀に見える場合の一。即ちその弦が下方に向いてゐる時の稱。滿月後七日餘りを經た後の月。その反對即ち滿月以前の弦月を上弦の月といふ。

※月白　月の出ようとする時、空の白み渡ること。「月白が上る」とは月の出前に空の白んでくる意。

※紫苑　菊科の多年生草本。稀に山地に自生するけれど、多くは庭園に觀賞のため栽培せられる。春、宿根から新葉を叢生する。葉は卵狀楕圓形で鋸齒を有してゐる。秋に至り葉間より六七尺の莖を出し、莖頭、枝梢に淡紫の美花をつける。「おにのしこぐさ」、「ひつじぐさ」ともいふ。

※枝垂れる　「垂る」のみでも「しだる」とよむ。下にたれること。「圓く枝垂れる」は、萩の枝が曲線を描いてしだれてゐるのである。

※先　非常に長くてしなやかな萩の莖は地面に接するまでまるくしだれ、更にその尖端は首をもたげて花を咲かしてゐる。

※たゆたふ　搖きたゞようて定まらないこと。ゆらゆらすること。轉じて心が動いて決しない、即ちためらふ意にも用ひるが、ここは原意。

※その風をじつと云々　初めはゆら〳〵とゆれ動いてゐるが、次第に風が强まるに從つて、やがてさつ

と二つに割れて伏せるだけは伏したまゝ、じつと動かずに風を受けとめてゐて、風が弱つてくると再びざわ〳〵と起き上つてくるのである。

※一輪　一つの花をいふ。輪は花の大きさ。まはり。また花を數へる時の單位名。

※夜目にも云々　夜目は夜見ること。「夜目にも」は夜見るのではありながら――勢よくたのもしげに見えるのである。

※咲滿ちる　一ぱいに咲いてゐること。

※とり繕ふ術も云々　「とり」は接頭語。「とり繕ふ」はいろ〳〵と包みかざること。つまり、桔梗の花は體裁をかざる方法も知らないとみえてといふ意味である。

※頑な人　片意地な人。またぎこちない、融通のきかない人。

※規則正しく云々　桔梗は大抵一莖の頂に一花をつけ、花は比較的大きく五瓣を有し、極めて單純であり、葉ならびもそろひ、全體に整然としてゐて複雜な感じがない。ここでは、桔梗がいかにも堅氣らしく、キチン〳〵と咲いてゐるのを、とり繕ふ云々といひ、かたくなな人のやうにいつたのである。

※その弓は可なり引絞つた形　弓を引絞るのであるから、弦はふくらんでゐる。即ち滿月後間もない頃の月のことをいつてゐるのである。いはゆる切つた西瓜よりももつとふくらみのある十八九日頃の月である。

※一點の雲　たゞ一片の雲。

※隈なく　隈は奥まつてかくれた所。かげ。ここに「隈なく」とあるのは、少しの陰影もなく、少しの曇もなくの意である。

※たゝずまひ　もとたゝずまふ（たゝずむ）こと。轉じてそこにある樣子、ありさま。

※朧氣　はつきりしないこと。ぼんやりしてゐること。「おぼろ」（朧）は、はつきりしないで、ぼんやりと霞んだやうになつてゐること。朧月、朧夜、などと熟する。

※か細い　甚だ細いこと。又よわ〳〵しく細いこと。「か」は接頭語。「か弱い」などとも使はれる。

※透明に搖動く　すき通りながら（叢がゆれるにつれて）ゆら〳〵と動いてゐるのである。

※なり代つて　最前は蟲の鳴聲がいろ〳〵な音の色や光を見せて（感じさせて）ゐたが、それがおぼろげになつたので、今度はそれに代つて露の玉が無數の透明な光を見せてゐるのである。

※今はどうやら止んでしまつた　止んでしまつたやうにまでおぼろげに感ぜられるの意。

※秋草に置く露の玉の云々　風が吹いて葉が搖ぐと、小さな露の玉が轉つて、それがいくつか集つて大きな玉になり、それが又一つ〳〵前の小さな玉と同じやうに光つてゐる――といふ意であらう。これは八つ手や蓮のやうに大きな葉では、特によく見られる美觀である。

鑑賞

「彼所にあるであらう一叢の草の根元から、また此所にあるであらう一叢の草の根元から」「涌きたつやうに響いて來る」蟲の音に對して、また闇はかくれて月にあらはれ、露にひかり風にたゆたふ萩の叢に對して、また月白が上る頃のしめやかに落ちついた空氣に對して、またその他すべての仲秋の夜のさゝやきに對して、何と作者は纖細な神

經とゆたかな情操と、靜かな觀賞とを懷いてゐることだらう。それは何の苦もなく我々を、綾のやうに錦のやうに、美しく錯綜する蟲の音のオーケストラのただ中につれて行く。ほの〳〵と上る月白のしめやかさがうつとりと我々の感覺を包んでくる。そしてまたしつとりとぬれた夜の秋草の、あの冷やかな葉の尖端が、ひえ〳〵と我々の足裏をぬらすやうな氣を起させる。一つ〳〵に蟲の音を聞分けようとするのは、ちようど綾錦の絲を選り分けるやうなものであるといふ比喩の巧妙さ。闇の涼しさといふものがあるなら、それはきつとこの蟲の音からくるものであらうといふその想像の快適さ。秋風がきて叢に吹當ると、暫くはたゆたふやうにしてゐるが、やがて二つに割れてその風をじつと萩に支へてゐるといふその觀察の細やかさ。月の光が明らかになればなる程蟲の鳴聲はおぼろになつて行くやうな氣がするといふ感覺の鋭敏さ。それ等は皆、少しの衒氣もない、極めて平易な言葉で、しかもその際に、何ともいへない微妙な技巧や、さすがに俳人らしい洒脫な垢ぬけした所をひそめて水の流れるやうに書かれてある。

一九　大海原の歌（詩）

坪内逍遙

解說篇

作者

坪内逍遙。文學者、教育家。文學博士。名は雄藏。初め春廼舍朧（はるのやおぼろ）、後逍遙または小羊と號した。安政六年五月、美濃國加茂郡太田村に生れた。平之進の第十子（三男）。東京大學文學部本科（政治經濟科）に學び、傍ら英文學に親しんだ。卒業後、早稻田大學の前身東京專門學校の講師となる。爾來死に至るまで五十餘年間、同大學の要職にあつた。明治十八年、小說「書生氣質」續いて新文學論「小說神髓」を公にするに及び、文壇に多大の影響を與へた。二十四年雜誌「早稻田文學」を創刊、また演劇革新運動を始め、新史劇「桐一葉」を發表、劇文學開拓の先驅をなし、引續き「牧の方」・「沓手鳥孤城落月」その他を公刊した。後、新樂劇創建のために、「新曲浦島」・「かぐや姫」・「お夏狂亂」等を作つた。三十九年、文藝協會を組織して新劇勃興に先鞭をつけた。また新舞踊劇、兒童劇等の創成にも努めた。生涯を通じて忘れなかつたのは、沙翁の研究で、飜譯に、講義に獨得の妙味を發揮した。最初二十卷の傑作集に次ぎ、晩年全譯集を志し、昭和三年全功を見た。昭和八年以來、重ねて「新修シェークスピア全集」の刊行に著手し、略〻その完了を見、昭和十年二月二十八日、伊豆熱海の落柿舍に歿した。年七十七。著書は前記の外、「逍遙選集」（十五卷）・

「文學其の折々」・「柿の蔕」等多數ある。その活躍した文藝方面は廣く、詩・小說・美術・戲曲・沙翁劇等に亙るが、これを大觀すれば、劇文學の開拓、演劇の革新が中樞をなしてゐる。

引用書

教科書の方には、引用書を註記してないが、この詩は坪內雄藏著「國語讀本高等小學校用」卷七から引用したものである。坪內博士の小學國語讀本は非常に舊いもので、御存知の方は少からうと思ふから、一言解說を加へて置く。今日では小學校の教科書といへば、誰しも國定のものと思ふが、昔は民間の編纂で、自由競爭が許されてゐた。明治三十二年の春、冨山房の坂本社長は、當時行はれてゐた小學教科書の時代錯誤的の物であることを看破し、新機軸の讀本を發行しようと企畫し、坪內博士にその編纂を委囑した。その頃、博士は早稻田大學の教壇に立つ傍ら、早稻田中學教頭の任にあつて、國民教育に深い關係を持たれてゐたので、大いに乘氣で編纂に從事されることになつた。かくして明治三十三年九月「國語讀本尋常小學校用」八冊と「國語讀本高等小學校用」八冊とが、冨山房から公にされたのである。兩教科書は、詞藻豐かな、識見高邁な坪內博士が心血を注がれたものであつただけに、斷然當時の水準を拔き、進步的な教科書として教育界に迎へられたのであつた。けれども、時運はこの讀本に幸せず、版權は有力書肆の合同によつて成つた新會社に移り、間もなく國定の制が布かれるに及んで、惜しくも早世した。この讀本は今日見るも、なほ斬新にして創始的な所が認められ、編纂法や教材の採り方に於て、後の國定教科書の參考となつた功績は長く記念さるべきである。

教材

海を題材にした七五調の新體詩である。海は古來、詩歌の好題目になつてゐるが、それ等の多くは、或時の、或場所の、海の敍景なり、敍情なりを歌つたものである。これはさうでなくて、海を大觀的に見、時空を制限せられず、海の雄大、豪壯な姿と、海の生命ともいふべき永遠性、神祕性を巧に摑んで歌つてゐる。さうした內容にふさはしく、格調は高く、韻律は莊重である。

この詩は元來、作者が高等小學校用の國語讀本の爲に書下したもので、教育的意圖の下に作られたものである。故に內容は固より、語法、用語に至るまで、教材向きに出來てゐる。この點を考慮に入れて、十分活用せられんことを望む。

指導篇

扱方

四面海もて圍れた國に生れた日本人としては、海そのものを知り、海に親しみの情を持たなければならない。さういふ考の下に作られた詩であらうから、朗讀に朗讀を重ねて、海の持つ樣々な相貌や情趣を味ははせたい。また自然の悠久さ、偉大さに就いて思惟させたい。

展開

全詩は五節から成る。第一節は、海の一般性、通有性を述べたもの。第二節は、海の偉大性を讚へたもの。地理通

論的知識が背景になつてゐるやうである。(解釋の所で、後述する)第三節は、春の海の長閑かな朝夕を敍したもの。第四節は、第三節の優雅な一面に對して、時化や津浪の物凄い有樣を敍したもの。第五節は、陸上の山河、國家、人事すべて有爲轉變の理に漏れないのに、海洋のみは世紀を超越して悠久なことを述べてゐる。

解釋

※大海原(おほうなはら)　ひろ〳〵としたうなばら。廣い海。

※大いなるかな　大きなものだなあ。「かな」は體言と活用語の連體形について、感歎の意を表はす助詞。

※たう〳〵　鐘・大鼓の音の形容。ここでは波濤のひびきの形容。漢字は「韆々」と書く。類語に「韆鞳(たうたぶ)」、「鼕々(とうとう)」等がある。

※とどろく　(轟)響きわたる。なりわたる。なりひゞく。

※夜もすがら　よどほし。さよすがら。徹夜。徹宵。夜は「よもすがら」といふに對して、晝は「ひねもす」といふ。

※大浪小浪云々　大きな浪、小さな波が寄せてはかへる。

※いづこに打たぬ云々　何所に打たない浪を見よう。即ち何所ででも浪は打つてゐる。

※いつ浪の音を云々　何時浪の音を聞かない時があらう。四六時中浪の音を聞く。

※世界の山々云々　世界中の山々を全部崩して埋めても、海は埋まらないであらう。詩の領域では、必ずしも科學的眞と一致させる必要はないのであるが、この詩では一致してゐる。前述したやうに教育的意圖を以て作られた詩であるから、その邊も考慮に入れられたものであらう。さて、世界中の山々を全部崩して海を埋めたらどうなるであらう。地理書によれば、海洋は地球表面の約七割を占めるとあるから、陸地の二倍以上である。假に陸の高度の平均と、海の深度の平均とが等しいとしても、當然陸は海に埋まつてしまふ。實際は、海の深さの平均は四千米であつて、陸の平均高度の約五倍に當るといふから、愈ゝ以て埋め合せがつかないわけである。

※世界の川々云々　世界中の川々が絶間なく海に注いでゐるけれども、海は永遠に、增しもせず減りもせず、美しい瑠璃色を湛へてゐる。瑠璃色は紫色に似た紺色。大川も小川も絶えず海に注いでゐるのを見て、昔の人は海が溢れはしないかと疑問を持つた。けれども、未だ海の溢れたといふ例を聞かない。これも科學的說明を加へれば、海洋の表面から絶えず水分が蒸發して、大氣の媒介によつて陸地に輸送せられ、河水となつて再び還つて來る。この循環によつて海水は不增不減の狀を保つ。誠に自然の妙といふべきであらう。

※長閑(のど)けき樣　のどかなさま「のどか」はゆつたりしてゐること。落着いて靜かなさま。

※風なぎ果てし　風がすつかり止んで波穩かな。

※おぼろにうつる　ぼんやりとうつる。「おぼろ」(朧)ははつきりしないこと。ぼんのり。うつすら。

※荒(あら)ぶる心も云々　あれ立つ心も鎭まるであらう。荒ぶるは亂暴する。あばれる。あれくるふ。

※松島かげ　「松島」は、松の生ひしげつた島。「島かげ」は、普通は島に隱れて見えない所、或は島で日の當らない所の意であるが、ここの「かげ」は語調

を整へるために添へた言葉で、單に「島」といふに同じい。

※朝ぼらけ　夜の明ける時。あけがた。「朝ぼらけ有明の月と見るまでに、よし野の里にふれるしら雪。」（坂上是則、古今集）「朝ぼらけ宇治の川霧たえ〴〵に、あらはれわたる瀬々のあじろ木。」（藤原定頼、千載集）

※蓬莱山（ほうらいさん）　支那の傳説に、東海中にあつて仙人の住むといふ神山。よもぎがしま。史記の封禪書に、「蓬莱、方丈、瀛洲、此ノ三神山ハ、渤海ノ中ニ在リテ人ヲ去ルコト遠カラズ、諸ノ僊人及ビ不死ノ藥皆在リ、其ノ物禽獸盡ク白シ、而シテ黄金銀ヲ宮闕トナス、未ダ到ラズシテ之ヲ望メバ雲ノ如シ、到ルニ及ビテ三神山反リテ水下ニ居リ、之ニ臨メバ、風輙チ引キ去ル、終ニ能ク至ルナシ。」

※よそならず　ほかの場所ではない。松島の夜明方ののどかな景を見ると、かの傳説にある蓬莱山など別の所ではない、此所が蓬莱山であらうと思はれるの意。

※すさまじさ云々　ものすごさはまた海にある。

※春秋二季の云々　春と秋と二季のおほあらしに。海は舊暦の二、八月に荒れる。秋はかの颱風である。

※はやて　忽然として吹起り、忽然として去り止む一種の暴風。疾風。

※甲鐵艦も云々　甲鐵艦も木の葉のやうに漂ひ……。「甲鐵艦」は甲鐵鈑を以て裝防せられた軍艦。「木の葉と漂ひ」の「と」は助詞で、下に動詞を含んで副詞句を作る。

※おほ高じほの云々　おほつなみが湧きあがれば……。「高しほ」はつなみ。「逆巻く」は水底から波が湧きあがる。

※村々流れて云々　村々は流されて跡かたもない。

※山は崩れ云々　山は崩れ川はかわき……。「涸る」は水がなくなること。ひる。

※國興亡し云々　國は興つては亡び人はかはり……。

※陸には古今の云々　陸には昔と今の區別があるけれど。

※海原のみは云々　海原ばかりは天地のはじめの……。「開闢」は天地のひらけはじめ。世界のはじめ。

※神代の姿そのまゝに　神代の時の姿そのまゝに。

※動きとどろき云々　動き鳴りひゞき寄せかへる。

鑑賞

七五調の定型詩であるから、音聲上のリズムと言葉の妙とを味はふべきである。七五調を説く前に、定型詩に就いて一言解説しよう。詩には定型詩と自由詩とがある。定型詩とは、七五、五七、八六等の音數を基調として均整したものであり、何よりも調子の整齊といふことを形式上の重要な約束とする。この定型詩に慊らず、內面の感情のリズムをそのまゝに表現したものが自由詩である。（詩壇の常識では、單に詩といへば自由詩のことを意味する）七五調は七音と五音との音數律から成る定型詩の一種であつて、明治の初期以來盛んに行はれた新體詩は、この詩形を取るものが、甚だ多かつた。七五調の特徴は、流暢で優しい抑揚を持つといはれる。「大海原の歌」に就いて見れば、流暢の點は首肯出來るが、優美の感よりは、寧ろ莊重の感を餘計受ける。それは主として、題材から來る感じが、リズム本來の感じより強いが爲であらう。

前に述べたやうに、定型詩は一定の型に言葉を當嵌めて、均整した體裁を形作るものであるから、言葉の選擇、配列に特別の苦心が拂はれる。故に言葉そのもの、言葉の技巧的な用ひ方に注意して見るべきである。その點から本詩を檢討してみよう。全詩を通觀して感じられることは、日本の傳統的な言葉を多く用ひてゐることである。例へば、「大海原」「瑠璃の色」「長閑けき樣」「おぼろにうつる」「荒ぶる心」「朝ぼらけ」「蓬萊山」「はやて」「おほ高じほ」「開闢」等である。これ等は何れもクラシックな語感を有する言葉であり、これ等を選擇し、巧に驅使することにより、全體に統一ある典雅な調子を生み出すことに成功してゐる。言葉の技巧的な用ひ方は、これは修辭法の分野になるが、疊語、對句を非常に多く用ひてゐることに氣が附く。

疊語は同じ形の語句を重ね用ひたもので、例へば、「朝に夕べに」「大浪小浪」「不增不減」等である。對句は說明するまでもない。「いづこに打たぬ浪を見ん」と「いつ浪の音を聞かざらん」、「世界の山々ことゞく云々」と「世界の川々絕間なく云々」、「はやて起つて浪立てば云々」と「おほ高じほの逆卷けば云々」、何れも對句をなしてゐる。一節の中ばかりでなく、三節と四節とは、全體が思想的に對照をなしてゐる。この樣に種々の技巧を凝らして、均齊の美を計り、讀者の印象を、鮮明に、强大に、趣味深からしめてゐる點を見るべきである。

資料篇

關係文獻

今日でこそ新體詩は、國定小學讀本をはじめ、諸種の中等學校の讀本に、いくらもはいつてゐて、一向珍しくないが、昔（明治三十三年以前）の讀本にははいつてゐなかつたのである。新體詩を國語讀本の教材に、初めて採入れられたのは、坪內博士であつた。卽ち博士編輯の「國語讀本」中に、「足柄山」や「蘇武」などの詩がはいつたのが嚆矢である。博士は如何なる趣旨で、自作の新體詩を讀本中に入れられたのであらうか。それに關して博士は、冨山房の記念出版「冨山房五十年」への寄稿文の中で、次のやうに述べて居られる。

「其ころ（註—明治三十年頃）一般に使用されてゐた韻文の餘りにも無生命な雅文調、餘りにも外國樂譜への嵌め込み式であるのに慊らなかつた。で、非難は覺悟で、自作の童謠調、民謠調を處々へ挿入し、杉谷（註—代水氏、早大出の文藝家、讀本の編纂助手）にも試みさせ、それを添削して採用した。」

博士が「非難は覺悟で」といはれたのは、謙遜の辭とも取れる。或は實際新しい試みであるだけに、毀譽褒貶相半ばするであらう位の氣持を持たれたのかも知れぬ。當時の反響は知らない。けれども、教材としての價値は次の一事を示せば判斷されよう。卽ち明治三十三年發行の「國語讀本」に入れられた「足柄山」「村上義光」の詩が、今なほ高等小學校用國定讀本に採られてゐる事である。このやうに永年の生命を維持してゐる教材は比類がない。

これ等の詩は教育的目的で作られたものであるから、文藝批評の立場から、その藝術性を云爲するのは無理である。隨つてこれ等の作品を以てしては、作者を詩人として高く評價することは出來ないであらう。然し、作者には外に數篇の劇詩もあることだし、その詩壇的地位はどうであらうか。詩壇の元老河井醉茗氏から、批評を聞くことにしよう。

醉茗氏は「現代詩の展望」（現代詩人全集第一卷の附錄）に於て、森鷗外を論じた後で、次のやうに述べてゐる。

「直接詩歌の方面には現れてはゐなかつたけれど、坪内逍遙の幾種かの新曲（註―新曲浦島、かぐや姫、お夏狂亂等）も亦、今日の民謠や童謠の隆興を來す先驅であつた。逍遙の作品は最も純日本的の傳統を重んじ、それを完成した點に前人の成し得なかつた功績を擧げてゐる。」

これによつて見れば、坪内博士の文藝界に於ける指導的役割は、啻に小說や演劇の方面のみに止まらなかつた事を知るのである。誠に文豪たる名に恥じないものと言へよう。

二〇　今

市島春城

解說篇

作者

市島春城。實業家、學者。名は謙吉、萬延元年（一八六〇年）、新潟縣に生れた。開成學校に入り、次いで東京帝大文學部に學んだ。嘗て小野梓等と立憲改進黨の組織に與つたこともある。高田新聞、新潟新聞、讀賣新聞等の主筆を經、數回衆議院議員にも選ばれた。また東京專門學校（早大前身）の創立に參し、講師として教鞭をとり、また早稻田大學の經營に當ること四十餘年、現に同大學の名譽理事である。「隨筆賴山陽」・「春城隨筆」・「藝苑一夕話」等は氏の著として廣く讀まれてゐる。

引用書

春城筆語。市島春城著。昭和三年八月、早稻田大學出版部から發行された氏の隨筆集である。

教材

「今」といふ字程力强い字はない。人生唯、「今」あるのみ。既往は「今」の葬られた殘骸であり、未來は「今」のまだ生れない陰影である。既往は追ふべくもなく、未來は期し難い。一人の生涯、一國の運命、たゞ、「今」に全力を傾注す

るに於て、始めて大成が期し得られる。本課の文はその趣旨に則り、縱横に說破したものである。餘りにも豐富な春秋を持ち過ぎる故に、却つて刻下の努力を忘れ易い年少の生徒に、適切な教訓を與へる教材である。

指導篇

扱方

過去、現在、未來の時間の推移に就いて、考察し、現在の貴重さを說き、賴むべきは現在のみであるとなし、將來の大成を期せんとせば、國家に於ても、個人に於ても、現在の瞬間に、全力を傾けて努力しなければならぬといふのが、本文の眼目であつて、誠に尤もな說であるから、これが徹底を計りたい。本文は單に抽象的な文字を並べたものでなく、具體的な例を擧げてゐる。豐太閤がその偉業の祕訣を聞かれて、「今日一日の事業を一心不亂に爲したに過ぎぬ。」と答へ、茶人千宗旦が新たに建てた茶室に、淸嚴和尙から「今日庵」といふ庵號を貰ふや、直ちに障子の張殘しに、妻の眉掃で額字揮毫を請ひ、また卽日和尙を招じて、茶室開の茶を點てた。

さうした佳話のヒントがぴつたり來れば、尊い「今」の一字が强く印象されるであらう。だが、作者の禮讃する「今」は、所謂刹那的現實主義（享樂主義）の意ではないことは、特に注意を與へる必要があると思ふ。「今」の意義を履き違へて、過去は濟んでしまつたものだから仕方がない、未來の事はどうなるか分らぬ。賴むのは現在だけだから、面白をかしく、太く短く世を渡つた方がよいと考へるのは、刹那的現實主義である。かういふ思想は、社會を毒し、自己を害ふものである。

展開

敍述の推移によつて、次の四段に分けて見ることが出來る。

第一段——冒頭(から)「今」こそ宇宙の本體である(まで)。「今」の意義に就いての概說。

第二段——これを我等の日常に見るも(から)その優柔怯懦を自白するものでなくて何であらう(まで)。「今」の貴重にして、「既往」と「未來」との賴むに足らぬこと。

第三段——故に私は全力を「今」の一字に注ぎ(から)「今」の成功の積まれたものであるのだ(まで)。「今」の禮讃と豐太閤の逸話。

第四段——私は「今に」因んで(から)終り(まで)。千宗旦の遺事。

解釋

※古來の賢哲　昔からこの方、世にあらはれた賢人や哲人。賢哲は、才德すぐれ事理に通じた人。詳しくいへば、賢人は德聖人に亞ぐ人。聖人は智德最も勝れ、神の如く萬事に通曉する人である。哲人は識見高く智德明らかで、道理に通じた人。

※百代の師たり、萬世の範たる金言　いつまでもいつまでも、永い後世まで變らずに、手本と仰がれる立派な言葉。百代も萬世も共に、末遠い後の世といふ意味。師も範も共に、のつとり效ふべき手本といふ意味。金言は教訓として尊重すべき言葉。格言

ともいふ。

※七首肺肝を穿つの語　心の奥底までずぶりとつき徹すやうに力強い語。七首は懐劍、短劍、あひくちのこと。肺肝は、肺臓と肝臓の義で、轉じて、心の奥底といふ意味になる。

※人生唯「今」あるのみ云々　人の一生には結局今といふ時があるばかりだ。昨日といつても、昨日の自分にとつては、それが「今」であつた。明日も、明日になつてしまつた時を考へるとやはりそれは「今」だ。その時、その場合に身を置いて考へると、昨日も明日もみな「今」になる。

※回顧　ふりかへつて思ひ出して見ること。

※過去つた事に對するもの　過去つた事に對して、それを顧ることに名附けた言葉——といふ意味。

※假設　假に設けられた不確かな、あてにならない事

といふ意味。幾何學では定理及び問題に於て、その情況を假定した事項といふ意味に用ひられる。

※我等にあるものは　我等が確實に持つてゐるものは。

※日月は移る　朝になり夜になり絶えず移り變つて行く。

※代謝　入りかはる。かはり合ふ。うつりかはる。古いものが去つて新しいものがこれにかはる意味で、新陳代謝ともいふ。

※天地は須臾も息まない　大自然の森羅萬象はしばらくの間も休まずに變化をし續けて行く。須臾はほんの少しの間の意。

※本體　物事の根本。變化する諸現象の根柢にあつて恒に變ることなく存在する根本のもの。實質とも、實體ともいふ。「今」といふものの集積が「無限の時」になる。日月は移り、動植物は代謝し、天地は須臾も息まずに變化しつゞけて行くが「今」は常住不變にその變化現象の根柢をなしてゐるから、「今」こそ宇宙の本體であるといつた。

※これを我等の日常に見るも　この「今」が我等の毎日の生活の上にどんな意味をもつてゐるかを考へて見ても。

※事の成るのも敗れるのも　物事が成功するのも失敗するのも。

※髓の底までも振ひ起す力　心の奥底までも振ひたたせる偉大な力。髓は骨髓の略で、骨の内部の腔所を充たし、骨の榮養を司つてゐる黄色及び赤色の油狀の液。轉じて心の奥底といふ意味になる。多く怨恨についていふ「骨髓に徹す」とか、「骨髓にこたふ」とかの骨髓もこの意味である。

※既往　すでにすぎさつた時。過去。

※畢竟　つまる所。つまり。畢も竟も「をはる」。

※既往は「今」の葬られた殘骸　既往はその當時の、「今」が時の經過と共に「今」でなくなつたものだから「今」の葬られた死骸といつた。

※未來は「今」のまだ生れない陰影　未來は現在の「今」が移つて行つてなるものだから、まだ生れないさきに現在といふものの後におとしてゐるくらい影だといつた。

※既往を語る　昔はかうだつた、あゝだつたと、せんないことをむしかへして語る。

※死兒の年を數へる　くよ〳〵しても今からは何ともすることが出來ない事を思ひ煩らふことに「死んだ兒の年を數へる」といふ。諺である。死んだ兒の年を數へても何にもならないから。

※鬼が笑ふ　未來の事は豫知することが出來ないといふ意味で、諺に「來年の事をいふと鬼が笑ふ」といひ、また「烏が笑ふ」とも「天井で鼠が笑ふ」ともいふ。鬼は仲々笑ひ相もないもの、烏や鼠は人間を笑ふ資格は普通の場合ならあり相もないものだから。

※追ふべくもなく　くよ〳〵したつて追つて行つて取りかへすことが出來るものでもなく。

※期し難い　前々から待ち設けてちやんと豫定しておくことは出來難い。期すは待ち設けること、かねてよりさうねがふこと。

※根強く　非常に強く。基が強固に。

※今日しなくても明日ある　古歌に「明日ありと思ふ心のあだ櫻夜半に嵐の吹かぬものかは」とあるのは有名である。朱熹の詩「少年老い易く學成り難し。一寸の光陰輕んず可からず。未だ覺めず池塘春草の夢。階前の梧葉已に秋聲。」などとあるのは同じ趣である。

※天地不息の大道　天地は須臾も息まずに變轉し、「明日しよう」と思つてゐたその「明日」もたちまちにしてすぎ去つてしまふといふ大事な道理。不息は「息まず」を漢文に書いたもの。

※別境地　「現在」と別な「未來」といふ場所。「現在」とは關係のない「未來」といふ所。境地は境界ともいひ、場所といふ意味。

※今――現在の推移…これやがて云々――は「今」卽ち「現在」と「卽ち」の意を含ませたもの。……は餘韻を含ませ、注意をひくために加へたもの。

※薄志弱行者　氣だてが弱くて、しようと思ふことを斷行する力の弱い人。少しばかりの困難に逢つてもすぐそれに打負かされて志を變へてしまふ人。

※遁辭　逃げ口上。一時のがれにいふごまかし言葉。

※空虛を假定する　實際は「殊に未來といふ別境地の存するのではない」のに、ありもしない未來を、あるかのやうに假りに定める。空虛はからなこと、何もないこと。假定は前に出た假設に同じ。

※爲さざる　上に「ぞ」といふ助詞のくる時は下を連體形で結ぶ。「さる」は打消の助動詞「ざり」の連體形である。

※期し難い假定に遁れる　はつきりと豫定しておくことの出來難い「未來」といふやうな假定をこしらへてこれを逃げ口上に利用する。

※怯懦　おくびやうなこと。怯懦。怯弱。

※斷として　斷乎として、ともいふ。きつぱりと、はつきりと。

※傾注　一つの事に力をあつめそゝぐ。「に於て」は傾注する時にの意。

※大成が期し得られる　大きな成功を豫め待ち設けることが出來る。大成が願ひ得られる。大成は、大いなる成功といふ意味、又完全になしあげる意味。

※「今」を外にして　「今」を度外視して。「今」に全力を傾注しないで。

※競爭場裡に立つ　力をくらべ成功を競ひ合ふ場所に自分も立つて他人と競ひ爭ふ。場裡はその場所の中。場裏。場中。

※鬪は「今」である　鬪は「今」の一瞬を斷として守るかどうかにかゝつてゐる。

※時は「今」　自分の運命を決すべき時、自分の鬪ふべき時は今だ。

※直截　まつすぐに斷ち切ること。すこしも躊躇しないこと。まつすぐに一心不亂に。

※邁進　はげみすゝむ。勇進。邁往。勇往邁進。

※一毫　一本の毛筋。轉じて、すこしばかり、ごくわづか。一豪とも書く。一毫一絲ともいふ。

※惰容　なまけてだらしない樣子。たいぎなふう。

※精神一到して　たましひが一つの事にあつまり注いで。朱熹の語「精神一到何事か成らざらん。」から取つたものでこれは、人は熱心になれば何事でも出來ないことはないといふ意味である。

※一意　心を專らにして一事に注ぐ。ひたすら。一途に。

※禮讃　佛教語で、三寶（佛・法・僧）を禮拜してその功德を讃歎すること。轉じて、ほめたゝへること。

※黑田如水　名は孝高。筑前國福岡藩祖。播磨の姫路に生れた。秀吉の腹心として常にその帷幕に參與し、畫策の功が甚だ多かつたので、今張良と稱せられた。豐前六郡の地に封ぜられて中津城に居つた。天正十七年家を子長政に讓り、入道して如水と號したが、その後も秀吉は常に左右に侍せしめ、軍議に參與せしめた。朝鮮征伐にも出征して軍功を建ててゐる。慶長五年の關ヶ原役には德川家康に屬して九州の地を定めた。同九年五十九歲で卒した。また彼は熱心なキリスト教信者で、シメオン（Simeon）といふ法號をも受けて、印に刻んで使用してゐた。

※豐太閤　豐臣秀吉。太閤は關白職をその子に讓つた人の稱であり、豐はその姓を取つたものである。秀吉は天文六年尾張に生れた。織田信長に仕へて屢〻武功をたてて信任を得た。天正十年本能寺の變の際は中國征伐の大任を命ぜられて高松城攻擊に從つてゐたが、直ちに歸つて明智光秀を山崎に破つた。十二年に大阪城を築いた。十三年に關白となり、十四年には太政大臣を兼ねて姓を豐臣と賜はつた。十八年北條氏直を小田原に亡すに及んで海內初めて統一した。十九年關白職を猶子秀次に讓つたが、軍國の機務は尙親しく裁決した。文錄元年征韓の師を起し、同三年明が和を請うたので撤兵したが、翌年明の國使のもたらした書辭の無禮をいかつて慶長二年再び征韓の師を起した。三年八月病を得て伏見城に薨じた、歲六十三。秀吉は卑賤より起つて戰國時代の末に初めて武力統一を成就した。誠に彼は一代の風雲兒であつた。後年は伏見桃山城を築いてこれに居つたので、この時代を桃山時代といひ秀吉の氣象にふさはしい豪華な美術の華の咲いた時代でもあつた。

※偉業　偉大な事業。すばらしく偉い仕事。

※殿下　陛下につぐ敬稱で、專ら皇族方に申し上げるが、昔は攝政・關白・將軍などの敬稱にも用ひたのである。

※一心不亂　一事に心を專らにして他事を顧ないことをいふ。

※因んで　……の緣にたよつて。……のついでに。

※茶人　茶道にたづさはる人。茶道を好む人。客を會して濃茶薄茶をたてて供するのを茶の湯または茶の會といひ、この際特にその作法があつて技藝の一つとなつてゐるのが茶道である。

※千宗旦　千家流の茶人。茶の湯の作法を大成した千利休の孫。父宗淳（少庵）に茶道をうけた。榮利や仕官を好まず、たゞ茶事を以て家名を振ひ、墨畫にたくみであつた。元伯、元叔、元寂、今日庵、不審庵、咄々齋、隱翁などと號した。萬治元年十二月十九日八十一歲で歿した。或は明曆三年十二月十九日年七十八歲で歿したとも傳へてゐる。

※遺事（ゐじ）　死者が生前にした事柄。死んだ人の遺して行つた事柄。古くから傳はりのこる事跡といふ意味になることもあるが、ここではその意味ではない。

※茶室　茶の湯をするのに用ひる座敷。初期の茶室は普通の客間の一部分を茶の會のために屏風で仕切つたもので、その仕切つた部分を圍（かこひ）と呼び、今日も家の中に作られて獨立した建物でない茶室を圍と呼ぶ。獨立した建物になつてゐる茶室は數寄屋と呼び、五人しか入れない仕組の茶室本部と、茶器を洗つて揃へておく控の間（水屋）と、客が茶室へよび入れられるまで待つてゐる玄關（待合）と、待合と茶室を連絡する庭の小徑（露地）とから成りたつてゐる。茶室の廣さは標準的な物は四疊半で、それ以上のを廣間、それ以下のを小間又は小座敷といふ。

※別懇　とりわけてしたしい仲。昵懇（ちつこん）、又は入魂（じゅつこん）といふに同じ。別懇は國訓で、支那では使はない熟字。

※大德寺　京都市上京區紫野大門町にある。臨濟宗大德寺派の大本山。元應元年、大燈國師がこの地に法堂を創めて住したが、花園、後花園兩天皇の歸仰を得て寺地を賜り、伽藍を建立した。天弘三年に朝廷の祈願所となつた。その後二回の火災に逢ひ、天正十年秀吉がその主信長をここに葬つて以來諸堂漸く修營された。千宗易（利休）が山門を營んで樓上に自作の像を安置した爲、豐臣秀吉に罪を得て死を賜はつたといふ由緒がある。塔頭（たつちゆう）の一なる大仙院の庭園は林泉の美をもつて有名である。

※清巖和尙　宗渭。大德寺百七十世の住僧である。名は清巖、自笑子又は孤陋子と號した。江州大石の人、奥村氏。慶安二年台命を以て東海寺に住した。清淨本然禪師の號を賜はつた。書畫を能くし、書は張即之虛堂禪師に學び、雄拔痛快なること却つて師に過ぎたといはれる。寶文元年十一月二十一日偈を書して化す、年七十四。

※普請（ふしん）　土木建築をいふ。もと佛教語で、堂塔の建立に普く諸人に請ひ上下力を均くし共同して造營するといふ意味で「普請」といつたもの。「シン」は請の宋音である。

※庵號　いほりにつける名。庵は、いほり、草ぶきのそまつな家、又僧尼などが佛にたてまつる舍。

※いかさま　なるほど。いかにも。げにしかり。

※尤（もつと）もの事　道理のある事。肯定出來る事。

※何ど好（この）みはないか　どんな風な名をつけてもらひたいといふやうな希望は何かないか。「好み」は、のぞみ、希望、註文といふ意味である。

※懈怠比丘期（けたいのびくきす）明日（あすを）　懈怠心のある比丘は明日もあると思ふといふことから、その日〳〵の修業を怠るの意。出典不詳。

※懈怠（けたい）　佛教語で、惡を斷じて善を修することに力をつくさぬこと。おこたりなまけること。精進（しやうじん）の反對。

※比丘　梵語 bhiksu の音譯。佛教語、僧侶のこと。意味は乞士の義とするのが普通で、「上は如來に從つて法を乞ひ、以て神を練り、下は俗人について食を乞ひ以て身を資く。」といふ意味。出家した男子をいふ。この語を、あま、即ち出家せる女子の意味に用ひるのは本來からいふと誤である。女子の方は「比丘尼」といふ。尼は梵語で女性をあらはす接尾語である。比丘は又苾芻（びす）、煩芻（びす）、比呼（ひこ）などにもつくる。

※明日を期す　明日から精進すればいい、今日は懈怠してゐてもかまはない、と明日をあてにしなまけてゐる。

※うちうなづく　成程々々と肯定して頭を前に搖がすこと。「うち」は强勢の接頭語。「うなづく」は「項衝く」の義である。

※今日庵　この茶室は今も京都市上京區小川通寺内上ル裏流宗匠千家家邸内に殘つてゐる。

※額字（がく）　額にする字。額面の字。額は扁額、又は横額ともいひ、紙や絹や板などに文字、又は繪などを記して、門頭、又は壁上に高く揭げるもの。

※揮毫　筆を振るつて書畫をかくこと。揮は振る、動かすの義。毫は筆のこと。揮洒（きさい）、揮灑（きさい）、揮染（きせん）、揮筆ともいふ。

※時も移つた　時間も經過した。時もたつた。

※暇乞　別れの挨拶をすること。別れをつげること。

※需（もと）める　要求する。ねがふ。

※倉卒　にはかなこと。あわたゞしいこと。あわてること。

※認（したた）めて進（しん）じ申さう　書いて上げませう。

※さやうにては　そのやうでは。それでは。

※今日庵の意にかなはず　今日庵と名づけたその趣旨に合はない。意は意味、趣旨。「かなふ」は適合する、ぴつたりと合ふ。

※唐紙　支那製の紙。新竹と楮の皮とを煮て漉いたもので、質は濃（こまや）で厚く、裂け易い。淺黄赤色なものを上等とし。白くて堅いのを下等とする。

※辯（べん）じかねた　調へることが出來なかつた。

※眉掃　眉掃毛（まゆはけ）ともいふ。白粉をつけた後、眉を書く爲に用ひる小さい掃毛。昔は眉毛を拔いて書き眉毛をつけたのである。

※と言ふに任（まか）せ　といふまゝに。といふやいなやただちに。

※立所（たちどころ）に　すぐさま、たゞちに。即座に。

※額面　扁額のおもて。扁額。

※果（はた）す　終る。

※歸院　院に歸る。院は僧侶の居る所、寺。

※不審を抱く　不思議に思ふ。いぶかる。

※さた　沙汰。報知、しらせの意味。

※茶室開きの茶を點（た）てた　茶室を初めて使用する記念の茶の湯をした。茶を點てる、は抹茶を湯にかきまぜて泡立たすこと。

※その日を越さず　その日を過ごさずに。

※趣向　趣意。こゝろざし。かんがへ。

※感に入る　大層感心する。

資料篇

參考文

遠い昔に經驗した過ぎ去つた黄金時代の快い夢にのみ耽つて、刻下の努力を忘れるのは亡國の民である。「昔はかうだつた。昔はあゝだつた。」と、華やかであつた既往の追懷をのみせめてもの心遣りとするのは、人生に於ての自分の役目を既に演じ果ててしまつた廢者の繰言である。また反對に、來る筈のない未來の華やかな幻影をのみ追求めて、頭ばかり前進しても足はこれに伴なはずに顚倒するのは年少者の通弊であらう。過ぎ去つた黄金時代を追懷するのはいい、その黄金時代を再現すべき現在の努力を忘れなければ。未來を待ち望むのはいい、未來の大成を招來すべき現在の奮闘を忘れなければ。すべては「今」の努力の如何にかゝつてゐる。いかなる大事業も畢竟「今」の努力の集積であ

る。千宗旦の遺事を學んで直ちに思ひ浮ぶのは菅得庵が歳暮に林羅山に向つて、「先生、私はまだ通鑑綱目を讀んだ事がありませんからどうぞ明春から私のために御講義が願ひたい。」といつた所、羅山は言下に「貴君の心がもし眞に通鑑綱目を讀みたいと求めてゐるのだつたら、どうして明春を待つ必要があらう。」といつて直ちに大晦日から講義をはじめたといふ話である。これは「除日講起」といつたやうな題で漢文教科書卷一あたりで多分生徒も學んでゐることと思ふ。思ひ出させて見たら、生徒の興味を呼ぶ上に效果が多からうと思はれる。

二　窓のすさみ

解說篇

作者

松崎堯臣

松崎堯臣。江戸時代の儒者。字は子允、白圭または觀瀾と號する。通稱は左吉。江戸の人。天和二年(一六八二年)に生れた。丹波篠山侯に仕へ、世子の近習となり、嚴莊を以て重んぜられた。年三十二にして父歿し、嗣いで家祿を受け、世子の封を襲がるゝに及んで、侍臣の長となつた。弱冠の頃、中野撝謙に朱子派の學を受け、後、西京に適き伊藤東涯を訪ひ、また三輪執齋に就いて王陽明の學を修め、江戸に於ては屢ゝ物徂徠に見え、その門弟太宰春臺、高蘭亭と親交があり、兼ねて越後流の兵法を茂久景泰に學んだ。嘗て妬者の中傷により、國の留守となり篠山に歸いたが、後に事を用ひし者、果して驕淫を以て罪を得て、堯臣の寃罪明白となり、舊職に復して江戸に移居した。この時、侯は奏者番衆となり、乃ち堯臣をして藩政を總領せしめたが、堯臣は會ゝ嫉人に忌まれ、久しく職にあるを得ず、典客となつて政に與らず、延享三年致仕し、優游として著述を樂しんだ。寶曆三年(一七五三年)五月十二日歿す、年七十二。麻布廣尾の天眞寺に葬る。著書に、「正言」・「中庸管見」・「三勇傳」・「史材乾坤小說」・「經世五論」・「觀瀾小記」・「君道撮要」・「窗下草」・「白圭集」等がある。

引用書

窓のすさみ。松崎堯臣の著。三卷。德川初期頃以來、享保の當時に至る見聞を雜記したもの。忠義、貞節等の美談が文中に多い。享保九年甲辰(一三八四年)の自序がある。外に本書の續編「窓のすさみ追加」二卷がある。同じく忠孝義烈、その他に關する見聞雜事を記したものである。今、全卷塚本哲三氏校訂の有朋堂文庫に收められてゐる。

教材

平易な近世文である。題材は作者松崎堯臣が恐らく見聞したであらうところの二つの美談である。前の話は、京都の富家に仕へる雇人が、集金しての歸るさ、金を落してしまつた。それを偶〻拾つた乞食が、待構へてゐて返してくれた。その乞食との應答が本文の主眼になつてゐる。雇人は大いに喜んだが、乞食の心持を不審に思ひ、「物を乞ひ得なければ餓死しなければならない身を以て、かういふ寶を人知れず拾ひ得たのは天の賜物である。どうして自分の物として急を補はなかつたか。なぜ返したのであるか。」と、問うた。乞食は、「不幸にしてかういふ身にはなつてゐるが、乞ひ得ないで死ぬとしたら、天命だ。一旦の飢を遁れようとして、どうして天命を斷つやうな非業をしようか。」と答へたといふ。乞食にしては珍しい高潔な志操の持主の話である。

後の話は、大名に仕へる子供が、果物の一つを盜んで隱してゐたところ、菓子を運ぶ途端に、落してしまひ、赤面し進退に窮した。その樣を見て取つた主君は、自分の與へたものは早く食べるものだ。彼は母があるために、送り與へようとして貯へたに違ひないのだが、それにしても無禮なことだと、客の手前を繕ひ、子供の竊んだ事實を庇つてやつたといふ話である。

指導篇

扱方

前述した教材の解說により、その扱方は自ら明らかであらう。即ち、前の話では、乞食をしながらも、廉潔な志操を持ち、且つ喉から手の出るやうな誘惑に打克つて、堂々と自らの主義を守り通した彼の、毅然たる態度に感銘せしめたい。どん底の貧にも屈しなかつた彼の節操は、武士のそれにもをさ〳〵劣るまじきものである。

後の話では、主君の深い思遣り、召使ふ者を庇ふ美しい心持に就いて考へさせたい。かゝる主君を持つたればこそ彼の小童は主君の恩義に報いるため殉死したのであるが、これによつて、主人對召使、上の者對目下の者の關係にも考へ及ぼしたい。

なほ全體に亙り、語句は平易であるが、古文の入門ともなるべき課であるから、成るべく文法上の說明を加へつゝ、解釋を進めて頂きたい。

解釋

※窓のすさみ　窓下のなぐさみといふ意。和文の隨筆的內容のものであるから、かういふ名前を附けたものであらう。

※京なる富家(ふうか)　京都の金持の家。「なる」は「にある」

を約めた語。

※七月　「ふみづき」と訓んだ方が、この文にふさはしい。

※債を乞ひに　貸した金をもらひに。

※歸るとて　歸らうとして。「とて」は、口語では「として」または「といつて」に當る。

※四條あたり　「四條」は今、京都市下京區にある。「あたり」は、附近、邊。

※初昏　むかしの一夜を五つに分けた最初の時間。今の午後八時から十時までの間。初夜、初更といふも同じい。「昏」は、日暮、夜。

初更	戌の刻	午後八時——十時
二更	亥の刻	午後十時——十二時
三更	子の刻	午後十二時——午前二時
四更	丑の刻	午前二時——四時
五更	寅の刻	午前四時——六時

※一奴　一人のしもべ。一僕。奴は漢音「ド」、呉音「ヌ」。

※月影をあてに　月光をたよりに。

※此所彼所　あちらこちら。

※假橋　間に合はせに架けた橋。

※乞食　「こつじき」または「かたゐ」と訓んでも差支へない。

※そこ　對稱の人代名詞。そこもと。そなた。

※金子　貨幣。金錢。

※員數　かず。たか。

※心待ちに云々　かねて心の中で待つて居りました。

※あからさまに　包みかくさず。あらはに。

※手をすりて　嬉しさの餘り掌をこする仕草をしたのであらう。手を合せて拜んだ意ではあるまい。

※かしこき志　忝けない志。有難い心。

※曇なき心　集金した大切な金を失つた使の者の心はふさいで雲が懸つたやうであつたに違ひない。然るに乞食の深切によつて、金が出たのであるから、使の者の心は一變して朗かになつた。そのはれ〴〵しい心をいふ。

※さるにても　それにしても。

※わぬし　（吾主）對稱の代名詞。お前。

※乞ひ得ざる時は云々　もらひ得ない場合は、食べる事を止めなければならない身でもつて……。

※天の賜　天からのくだされもの。天與。

※など　何ゆゑ。何とて。なぜ。疑問を表す副詞で、「……返しつる。」に係る。

※急を補はず　困つてゐる今の場合の足しにせずに。

※返しつる　（なぜ）返してしまつた。「つる」は、完了の助詞「つ」の連體形。上に「など」といふ疑問の語があるため、連體形で終止してゐる。（例）何事か候ひつる。

※そは潔き心ながら　それは清らかな心ではあるが。

※身の爲には殘り多くこそ思はるれ　自身（乞食）のためには殘念に思はれる。「思はるれ」は、「思ふ」の未然形に、受身の助動詞「る」の已然形「るれ」の附いたもの。これは、上に「こそ」があるから、係結の法則により、已然形で結んでゐるのである。「係結の法則」——用言または活用連語が、上に助詞「ぞ」「なむ」を受けて文を終止する場合には連體形となり「こそ」を受けて終止する場合には已然形となる。

※身にこそあれ　「係結の法則」に從ふこと前文に同

じである。「あれ」は動詞「あり」の已然形。

※死なんは天命なり　死ぬだらうことは天命である。「死なん」の「ん」(む)は、未來の助動詞で、動詞の未然形に附く。

※面を赤らめ　赤面し——。

※恩に報ゆべきなれども　恩に報いるべきではあるが——。「報ゆべき」の「べき」は推量の助動詞「べし」の連體形。この助動詞は、動詞の終止形に附く。「報ゆ」は、上二段活用の動詞、「報い、い、ゆ、ゆる、ゆれ、いよ、」と活用する。終止形は「報ゆ」であることに注意。口語では、「報いる」が終止形になるから、「報いるべき」といつてもよいが(上一段)、文語では「報ゆるべき」といふのは誤である。

※私なり難し　私(すること)なり難しで、勝手に計らふ事が出來ないの意。

※聞きて過さぬ人　聞きぱなしにしてはおかない人。

※謝し申すべし　御禮をいふだらう。

※待ちてたべ　待つてゐ給へ。「たべ」は、動詞「たぶ」(給)の命令形。

※飢ゑてこそあるらめ　饑ゑてゐるであらう。やはり「係結の法則」により、「こそ……らめ」になつてゐる。「らめ」は、推量の助動詞「らむ」の已然形。

※得させて　與へて。「させ」は使役の助動詞「さす」の連用形。

※しか〳〵　かやう〳〵。かく〳〵。長い文句を省略して、これに代用する辭。

※いたく感じて　ひどく感心して。

※常ざまならぬ人　常樣ならぬ人で、なみ〳〵でない人。

※乞食にて終らしめんこと口惜し　乞食で終はらせることは惜しい。

※我これを免れさせん　私はこれを(乞身となつてゐること)を免れさせよう、即ち、乞食を止めさせよう。

※駕籠をしつらはせ　駕籠をとゝのへさせ——。駕籠の用意をさせたのである。

※急に多く食しける故にや　急に澤山食べたからであらうか。

※厚く葬ひけるとぞ　厚く葬つたといふことであります。「ぞ」は、強く指示する意味を表す助詞。

※或君　或大名。或殿樣。

※小童　子供。童子。ここでは主君に近侍する小姓であらう。

※持出づるとて　持出ようとして。

※ぽかり落しぬ　ぽかりと落した。「ぽかり」は、頭などをなぐるさまにもいふが、ここでは物を落すさまである。

※進退さはまりしに　進退きはまつたのに。立往生したのに。「進退きはまる」は、前に進むことも出來ず、後に退くことも出來ず、どうにも手段の施しやうなく困つた場合にいふ。

※無賴の小兒　不屆な子供。不埒な子供。「無賴」は、普通やくざ、放蕩の意に使ふが、ここでは輕く罵る意味の語である。

※さりながら無禮にこそ　然しながら無禮である。「無禮にこそ」は、「無禮にこそあれ」の「あれ」の省略された形。「こそ」は助詞で、「ぞ」よりも、もつと強く指定して、特に事物を取立てゝいふ意を表す。

※滿座の客　座中全體の客。

※陸績の橘にこそ云々　陸績の橘であるといつて賞し合つた。「陸績の橘」は、『吳志』に次のやうに出てゐる。「陸績、字ハ公紀、康ノ子、年六歳、九江ニ袁術ニ見ユ、術、橘ヲ出ス、績、三枚ヲ懷ニシ、去ルトキ拜持シテ地ニ墮ス、術曰ク、陸郎何ゾ乃チ賓客トナリテ橘ヲ懷ニスルヤト、績跪キテ答ヘテ曰ク、歸リテ母ニ遺ラント欲スト、術之ヲ奇トセリ、（以上は頭註に出てゐる）績、容貌雄壯、博學多識、星歷算數、該覽セザルナシ、吳ノ孫權ニ仕ヘ、直道ヲ以テ憚ラル、出デテ鬱林ノ太守トナリ、偏將軍ヲ加ヘラル、軍事アルト雖モ、著述ヲ廢セズ。」（節文）

※面ぶせ　恥ぢて面を伏せること。おもぶせ。

※たはぶれ　（戯）たはむれ。いたづら事。眞面目でないこと。

※卒せられし時　亡くなられた時。「卒す」は、我が國では五位以上の人の死にいひ、支那では大夫の死にいふ。

※殉死せしとかや　殉死したとかいふことである。「殉死」は昔主君の死去に際し、臣たちがそのあとを慕つて自殺すること。おひばら。歷史上では、垂仁天皇の殉死の禁が名高い。上古、貴人が死ぬと、從者を生きながら墓側に埋めて殉死せしめた。天皇はこれを憐み給ひ、殉死を禁じ、野見宿禰の議を用ひて、土偶の人や馬をこれに代へしめられた。これが埴輪である。近くは、乃木大將の殉死が國民の記憶に遺つてゐる。乃木大將は、大正元年九月十三日、明治天皇の御大葬當日、「うつし世を神さりましゝ大君のみあとしたひて我はゆくなり」と、辭世の歌を詠んで、夫人靜子と共に殉死された。「殉死」は、野蠻なものとして排斥されてゐるが、乃木大將の場合だけは、大將の誠忠無比な心情を酌んで、同情しない者はなかつた。

資料篇

參考文

本文は短文ながら二つとも味はひ深き文である。そして古い時代の事柄に拘らず、現代の我々に尊い教訓を與へてゐる。つまり、現代的意義を失はない點に於て、價値があると思ふ。

孔子が魯の司寇となつた時、政治がよく行屆いて、「道遺を拾はず」であつたさうだが、段々世が進むにつれて、人心が惡化し、遺を拾ふどころではなく、進んで他人の物を奪ふやうになつたらしい。それはさておき、現代日本でも拾得物を屆けずに横領するやうな不心得者が、どれ位あるか知れないが、毎日ラヂオで警視廳から拾ひ物のあつた報せを、夥しく放送する所を見ると、屆ける正直な人も相當多數あるものと見える。拾つた物を屆け、或は落した人に返すことは、當り前な行爲であるのに、段々文化が進み、社會が復雜になると、勵行されないやうになる。その屆出の率は文化の進歩と逆比例するかの如くである。日本などはまだ〳〵良い方で、巴里邊で物を落したら、絶對に出ることはないさうである。先年、日本から歐洲へ留學した某氏は、巴里で、何萬フランかの金とパスポートを落した。金は何とか都合つけるにしても、パスポートを失くしては旅行に差支へるので、「金は進呈するから、パスポートだけは返して下さい。」と、新聞に何回も廣告を出したけれども、とう〳〵出なかつたさうである。

以上は餘談であるが、本文の乞食の如きは、境遇が境遇だけに感心なものである。この乞食には「貧のぬすみ」といふ諺は通用しない。寧ろ「武士は食はねど高楊枝」の類である。この文は短い中にも、雇人と乞食と主人と、三人の性格が明らかに出てゐて面白い。雇人が、「恩に報ゆべきなれども、債を乞ふ使なれば、私なり難し。」といふものも、律義である。主人が顚末を聞いて、いたく感じ、駕籠で迎へにやるのも、常ざまならぬ主人と見受けられる。乞食が餅を食ひ過ぎた爲に死んでゐたといふのは、ペーソスの中に一抹のユーモアを漂はせてゐる。

二三　桃山御陵

田山花袋

解説篇

作者

田山花袋。第十六課「解説篇」參照。

引用書

花袋行脚。田山花袋著。大正四年七月、東京、大日本雄辯會講談社發行。內容は作者が近畿地方を中心に中部地方、鎌倉街道、瀬戸內海沿岸の渚々、北九州一部の史蹟、名勝の地を行脚して描いた紀行集で六十七篇から成つてゐる。

教材

明治の御代こそ我が國史の上に、とはの光を擧げる輝かしい時代である。この大御代に乾坤の御德あつく國民の敬仰し奉つた明治天皇、照憲皇太后は、今桃山御陵に永へに神鎭まりましていらせられる。本課の文は、御陵に參りひ知れぬ感慨に打たれた作者が、謹嚴な筆致を以て書き綴つた參拜記であり、同時に御陵にぬかづいた時ひし〳〵と胸に迫つた感慨を記した涙と熱の大文章である。

指導篇

扱方

桃山御陵に對する敬虔な國民感情の範を示したものと見てよい。他の卷にある明治神宮參拜、多摩御陵參拜等の教材と相俟つて、國民精神の涵養に資すべき教材である。取扱上注意すべき點は、次の二つである。

一、桃山御陵は申すまでもなくすべての御陵は、歴代の天皇または皇后を葬り奉つた聖地であり、皇室の御祖先の御墓であるから、國民たる者は崇敬の誠を致さなければならない。

二、明治天皇の御鴻業により、我が國力は未曾有の發展を遂げた。この光輝ある時代を十分に解し、この時代に生きる幸福を感ずることが、國民の最も幸福なことであり、國家としても最も喜ぶべきことである。故に作者が時代に對して感謝してゐる心を通して、現代人の幸福を力説して頂きたい。

展開

敍述の推移を辿つて次の三段に分けて見ることが出來る。

第一段――冒頭(から)その當時の國民の悲歎をも倶にその中に混ぜて、埋葬されたのであつた(まで)。桃山御陵に額づいて、大倭時代の皇威盛んなりしことをしのぶ。

第二段――であるのに、中世以後はどうなつたであらうか(から)徒爾には見逃してしまふことの出來ない事實であつた(まで)。中世以後の山陵の荒廢と國の衰へとを思ふ。

第三段――桃山の御陵に參拜する者で(から)終り(まで)。大倭の盛時に還された明治天皇の偉業に對する讃仰。

解釋

※**桃山**　京都市伏見區の桃山町にある小山。一に伏見山ともいふ。もと豐太閤の伏見桃山城のあつたところで、江戸時代になつて山林畑地となり、單に桃林、或は椰溪の梅林、又は宇治見臺としてのみ世人に知られた。今御陵のある地を古城山と云ふ

※**二つの御陵**　伏見桃山御陵と伏見桃山東陵をいふ。伏見桃山陵は明治四十五年七月三十日神去り給ひし明治天皇の御墓所である。御陵は上圓下方の式で天智天皇の山科御陵とその制を同じうしてゐる。御陵用の石材は小豆島(讃岐國)の御影石であるから、白い玉柵と松の翠と相照映して閑雅で森嚴である。伏見桃山東陵は大正三年四月十一日に崩御あらせられた昭憲皇太后の御墓所で、伏見桃山陵の東七三米のところにあつて、陵域は稍狹いが、その型式は略〻同一である。

※**額づく**　額突くの義で、額を地につきて禮をする意で、恭しく禮をするにいふ。

※**天武天皇の陵**　第四十代天武天皇の御陵で、持統天皇の御陵と共に、奈良縣高市郡高市村大字野口にあり、檜隈大内陵といふ。

※**持統天皇の陵**　持統天皇は第四十一代の天皇。天武天皇の皇后が即位せられた女帝である。本文に、持統天皇の御陵を後から天武天皇の御陵へ合はせたといふのは、別に葬られてあつたものを合はせたの

ではなく、天武天皇の御陵に合はせ葬つたといふ意である。

柏原の陵（かしはばら） 第五十代桓武天皇の御陵。京都市伏見區桃山町永井久太郎にあつて、伏見桃山陵の北西九町の所にある。桓武天皇は平安京奠都の御門、明治天皇は平安京最後の御門、兩天皇均しくこの桃山に尊靈を鎭めましますことは不思議な御因緣と申すべきである。

嵯峨天皇 第五十二代。桓武天皇の第二子。平城天皇の同母弟、大同四年即位。學を好み詩を善くし、又書に長じ、空海、橘逸勢と併せて三筆と稱せられる。在位十五年。位を淳和天皇に讓り、承和九年に崩御。陵は嵯峨山上にある。天皇は非常に仁德の深い方で、民に災厄のあつた場合、屢々柏原の御陵に祈念されたことがある。ここはそれを指すので、天皇が藤原氏の專横によつて廢立の憂目を見られやうとした場合に祈願された意ではない。

祈念 念じ祈ること。神佛を祈り念ずること。

國民の悲歎をも云々 國民が心から慕ひ悲しみつつ葬り奉つたことをいふ。天皇の崩御にあたつて、當時の國民が擧げて歎き悲しむ心を、一緒に籠めて齋き奉つたことをいふのである。

中世以後は云々 普通中世といへば、平安朝の時代をいふので、ここも平安の時代までは、天皇を葬り奉る場合には、國民が心から悲しみつつ葬つたものであるが、それ以後はといつて、鎌倉武家政治以降を指したものである。

京都の東山 東山は京都市の東方、賀茂川の東によこたはる一脈の連山。北方如意ヶ嶽から南方稻荷山まで三十六峯、嵐雪がいはゆる「蒲團着て寢たる姿や東山」の風情で、優美な曲線を連ねてゐる。この一帶の松山とその中腹にのぞく清水の五重の塔とは、全く京都の風景の象徵といふことが出來る。なほ山麓一帶には智恩院、三十三間堂、（蓮華王院）泉涌寺、南禪寺。八坂神社等がある。

泉涌寺 京都市東山區今熊野町にあり、東山の南部稻荷山の北にあたる。眞言宗泉涌寺派の大本山。弘法大師の開基といはれる。始は法輪寺と稱し、文德天皇の御代、藤原緒嗣修理を加へて仙遊寺と稱し、後、廢頽し、順德天皇の御代に至り、俊芿律師（しゅんじょう）再興して、泉涌寺と號した。この時より天台、眞言、禪、律の四宗兼學の道場となり、後堀河天皇の御代に勅願寺となつた。仁治三年五月二十五日四條天皇をこの寺に葬り、後、後光嚴天皇を葬つてより以來、歷代の廟所となり、いはゆる泉涌寺陵（或は月輪山陵）と呼ばれてゐる。寺背の山にある月輪陵には四條天皇、後水尾天皇をはじめ十二の陵、後月輪陵、後月輪東山陵を併せると十六の御陵がある。

亡びた國の帝王の陵 これはどこといふことなしに、單なる比喩として用ひたものとみるのが穩當である。

國が衰へ世が沈んでゐた 戰國の世には、交戰することばかりに驅られてゐて、天皇をたすけて內政を顧る者がなかつたので、國勢は自然と衰微して、世の中のすべてのことが沈滯して振はなかつたのである。

足利時代 足利尊氏が元弘の變に乘じて遂に京都朝を擁立し幕府を開いてから、義昭に至る十五代二百三十五年間をいふのである。然し尊氏、義詮の二代の間は紛亂常に絕えず、威令は少しも行はれなか

つたので、三代義滿が室町に幕府を開いてから十三代義昭まで百八十餘年間とする說もあり、又、これに據つて室町時代とも呼んでゐる。

※戰亂に追はれ　つぎからつぎと、戰爭が起つて他を顧ることの出來ないことをいふ。

※自己の驕奢に心もしひて　自分の驕奢な生活に心を奪はれて。驕奢はおごりたかぶること。「心もしひて」は心がそれにとらはれて他に對して盲目になること。卽ちここは本心を失つて驕奢な生活に夢中になること。

※長い間の歷史の波云々　歷史を一つの流と見、史上の事件はその波に依つて打出す、卽ちつくり出されたものと考へていつたので、ここは歷史といふ流の波はだん〳〵と大きな時勢をつくり出して來ての意。長い間の歷史の變遷紛擾は遂に德川の末期に至つて、王政復古といふ大事を起して來たことをいふ。

※維新　これあらたなりの義で、國政の改ること。詩經、大雅に「周雖舊邦、其命維新。」とあるより出た。維新といへば我が國では明治初年の政變卽ち王政復古に限つて用ひられる。我が國の上世は天皇萬機を親裁せられたが、文治元年（壽永四年）以來政權全く武門に歸し、天子は空名を擁する有樣となつた。後醍醐天皇の時、朝權一度恢復したが三年にして、復足利氏に移り、織田、豐臣、德川交ゝ政權を掌握した。德川の末に及んで、尊王攘夷の論起り、遂に慶應三年十月、十五代將軍慶喜は大政を奉還し、十二月九日、明治天皇は王政復古の大號令を發せられたのである。

※山陵の荒廢に著目して云々　みささぎの荒れすたれてゐることに目をつけてといふ意で、ここは、下野宇都宮の人蒲生君平を指す。君平の事蹟に就いては「資料篇」に揭げておいた。

※勤王　帝王の業を助けることで、王事につとめ、皇室のために力を盡すこと。

※徒爾　いたづら。むだ。無益。

※大倭　大和を中心として、皇威の國內に盛んであつた王朝の初を意味することより、ここは廣く王朝の時代を表した言葉である。

※偉さな功業　非常に立派な功績。顯著な大事業。卽ちここでは王政復古を指す。功業はもと土木の業をいふので、轉じていさをとなつた事業。いさを。功績。而して「功業を」といつて「を」で結んでゐるのは、後の「硬政策を」と同じく皆「千年にして云云」の前へ「なほ」といふ語を加へて、その前なる「思ひ出さぬものがあらう」へかけて解釋するのである。

※自ら戶を閉ぢるやうな云々　ひつこみ思案的な消極的な鎖國主義政策を指す。卑屈は心がいやしく、氣力の挫けてゐることで、卽ち意氣地のないこと。又は元氣のないこと。

※對外の硬政策　外國との交涉（外交問題）に對して强硬な意見を主張する政策。政策は政治の方針。政略。

※あり〳〵と　はつきりと。あざやかに。

※感傷的　英語 sentimental の譯。物事に感じ易く涙もろい心持をいふ。ここでは涙もろくといふのがあたる。

※社會の空氣　世の中一般の狀態。

※脫却　ぬぎすてること。ここはぬけでて、又はのがれての意。

※自由に更に大きく呼吸づく　自由にのんびりと生活すること。

※遭逢　遭遇と同じく。めぐりあふこと。又は單に會ふこと。

※雄大な時の羽風が云々　羽風は羽ばたきによつて生ずる風をいふので勢といふ意。即ちここは大いなる時代の勢が、強い羽風のやうに耳の邊を吹通つて行くといふことで、大いなる時代――明治天皇の御治世四十五年の偉大な時代を一入強く感ずることにいつてゐる。

資料篇

參考資料

1. 御陵と法律との關係

御陵に對して不敬の行爲があつてはならないことは、申すまでもないことであるが、我が刑法は次のやうにその罪を規定してゐる。

第七十四條　天皇、太皇太后、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太孫ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者ハ三月以上五年以下ノ懲役ニ處ス　神宮又ハ皇陵ニ對シ不敬ノ行爲アリタル者亦同ジ

次に御陵に對する一切の規則は、皇室陵墓令に定められてあるが、その第一條及び第二條は次のやうに「陵」と「墓」との意義を明らかにしてゐる。

第一條　天皇、太皇太后、皇太后、皇后ノ墳塋ヲ陵トス

第二條　皇太子、皇太子妃、皇太孫、皇太孫妃、親王、親王妃、內親王、王、王妃、女王ノ墳塋ヲ墓トス

2. 蒲生君平の尊皇に就いて

蒲生君平は寛政の三奇人と稱せられ、御歷代山陵の荒廢を歎いて、山陵志を著したことは、生徒は國史で學んで知つてゐる筈であるが、なほその事蹟を「大日本全史」から抄錄して、參考に資することにしよう。

蒲生君平　名は秀實といひ字は君臧、伊三郎と稱へ明和五年に下野宇都宮に生れた。もと福田氏であつたが君平に至つて蒲生氏を稱へた。（中略）嘗て歷代の山陵の荒廢して居るのを聞いて之を慨き、當路者に告げて其の修復をしようと思ひ、躬自ら其の地を踏査し古圖舊記を參照し、遐陬僻遠の地と雖も必ず之を窮め、脛の毛のすり切れるに至つても之を意としなかつた。嘗て佐渡に至り順德天皇の陵を拜した時、下野鹿沼なる鈴木石橋（君平の舊師）の家に來り「今度佐渡の陵を拜したが、荒蕪最も甚だしく悲しみに堪へなかつた。夫故先生に告げようと思つて急いで參りました。」と斯く言つて號泣した。聽く人も皆爲に感動されたといふことである。文化五年に「山陵志」の稿が完成した。彼が平生の精力は半ば此の書に籠つて居ると謂ふべきである。かくて之を朝廷及び幕府に獻上した所が、有司は其の論が處士にふさはしからぬ所があるとて君平を召して詰問し之を法に處せんとしたが、林大學頭衡（述齋）が之を遮り、「草野に危言の士のあるは國家の福である。」と言つたので、罪せられずに濟んだ。君平は文化十年七月、四十六歲で、江戸本石町三丁目なる修靜庵に歿した。君平の歿後五十年にして其の鄕里宇都宮藩の老臣戸田忠至（大和守）が藩主を輔けて幕府に建議し、命を受けて山陵百餘處を修復し、山陵奉行に任ぜられたが、蓋し君平の志を繼いだものであらう。忠至の歌に、

山陵に志厚き蒲生君の遺像を拜して

君のため心つくしゝいさをしも
いまぞ雲井に高くきこゆる

国修文

ゆかしの杉

幣原坦

解説篇

作者

幣原坦（しではらたん）。河内の人。舊幕臣の裔、明治三年九月を以て生れた。同二十八年東京帝國大學文科大學國史學科を卒業し直ちに鹿兒島高等中學造士館教授に任ぜられ、その廢校となるに及んで女子高等師範學校囑託教授となり、任を帶び朝鮮に赴き、三十七年四月文學博士の學位を授與せられ、次いで韓國政府學政參與官となり、學政改革の端を啓き經營苦心する所が多かつた。三十九年七月文部省視學官を命ぜられ、第四地方部を擔當し、又文科大學講師を囑託せられた。四十一年九月第二地方部擔當となる。四十三年八月改めて文科大學教授兼任を命ぜられ、學術及び學制視察調査の爲、歐米各國に派遣せられた。後、文部省圖書局長となり、昭和三年臺北帝國大學の創立せらるゝや、初代總長に任ぜられた。長年その職にあつたが、昭和十二年退職し、現在は臺北帝國大學名譽教授である。男爵幣原喜重郎氏は氏の弟である。著書としては「南島沿革史論」・「韓國政爭史」・「世界小觀」・「朝鮮史話」等がある。

引用書

世界の變遷を見る。幣原坦著。大正十五年二月、東京冨山房發行。本書序文の一節に「八重の汐路の遙かな異域からお土産を積んで國に歸つた。珍らしい物もあり、さうでないのもある。自分で求めた物もあり、懇ろな人々からの贈り物もある。これ等を獨りで愛玩して、なつかしい思ひ出にしようと考へたが、一つ呉れ、二つ呉れと、人からいはれるにつけて、一般の趣味に適用しない分を取除いて、他は盡くこれを解放することにした」と、かくして本書が成つたのである。約百篇、歐洲大戰後、一變した世界の面目が紙上に溢れてゐる。

教材

乃木大將に關する逸話である。然し、大將を正面から描いたものでなしに、側面から描き、大將のプロフィルを浮彫にしたものである。乃木大將の世界の人々、貴賤男女に與へた影響が、作者の眼を通して、流暢に語られてゐる。乃木大將に就いては、生徒は小學讀本その他の讀物で學んで、よく知つてゐるであらう。けれども、本文は普通の乃木大將傳とは行き方を異にしてゐるので、新しい興味を以て迎へられることと思ふ。而も作者が實地に體驗した材料によつて書かれてゐるから、非常な迫眞力をもつてゐると信ずるのである。

指導篇

扱方

死して惜しまれる人となり、擧國の悼惜を受ける身となることは、人間至上の榮譽である。我が國の生んだ世界的

偉人乃木大將の人となりの一端を知らせて、その溫藉、威武、高潔を兼備した人格に觸れさせ、德性の涵養につとめると共に、今後の社會に、文化生活に、精神生活の益々必要なことを訓へ、人間至上の榮譽のよつて來る所以を覩はせたいのである。

展開

本文は敍述の推移によつて、次の五段に分けて見ることが出來る。

第一段――冒頭（から）その影は世界に廣がり、その香は天下に滿ちるとも言ふべきである（まで）。乃木大將の舊宅を訪ねて、大將の植ゑられた杉を見ての感慨。

第二段――ずつと前に自分がアフリカの內地を旅行した時（から二頁許り飛んで）今更の如く思ひ出されるのである（まで）。

作者が外遊中、英國士官の中に、大將の崇拜者を見出して驚いたエピソード。

第三段――自分が將軍にハイド・パーク・ホテルで會つた時には（から）土著の人の歡待に接する事を得た（まで）。作者がロンドンで大將に對面した時の印象。ユーゴースラビヤの首府のホテルで、作者は歡待されたが、それは大將の餘德によつてであつたこと。

第四段――しかし、多くの外國人の中には（から）直覺的に共鳴を感ずる（まで）。大將は外國人の間に非常な人氣があつたが、中にはその爲人を諒解し得ない者もあつたといふ作者の鋭い觀察。

第五段――將軍の葬式の日（から）終り（まで）。將軍の葬式の時、貴賤の別なく會葬者のあつたこと。終りに物質よりも人物の必要なことを說いて、一文を結んでゐる。

解釋

※門司　福岡縣門司市。九州の最北端で海峽を隔てて下關と相對し、瀨戸內海と九州の咽喉を扼し、本邦重要の海門にあたる。下關との間には鐵道省の關門連絡船があり、一日二十四回、十五分で達する。鐵道は九州本線がここを起點として鹿兒島まで行つてゐる。附近には名勝舊蹟の地が多い。

※稅關　大藏大臣の管理に屬し、關稅行政の事務を處理する地方官廳。卽ち、關稅、噸稅及びその他の諸收入に關する事項、保稅倉庫その他の倉庫に關する事項、船舶貨物及び關稅通路の取締に關する事項。關稅法及び噸稅法犯則者の處分に關する事項、酒類造石稅、醬油稅下戾に關する事項、稅關又は保稅倉庫より引き取られる砂糖、織物の消費及び骨牌の課稅に關する事項を掌る所である。稅關長、事務官、監視官、鑑定官、事務官補、監視、鑑定官補、監史技手の職員を置く。

※長府　山口縣豐浦郡長府町。下關市より東南約二里のところにある。西には、仲哀天皇豐浦宮址である國幣小社忌宮神社があり、又西南半里のところには乃木神社及び乃木將軍の舊邸がある。

※乃木將軍　名は希典。舊山口藩士乃木希次の第三子嘉永二年十一月十一日を以て生れた。少くして吉田

松陰の叔父玉木正韞（まさかね）に就いて學び、明治四年陸軍少佐となり、西南の役に功があり勳四等に敍せられ、累進して日清役には第一旅團長として出征し、戰後功を以て男爵を授けられ、功三級金鵄勳章を賜はつた。二十九年臺灣總督に任ぜられ、轉じて第十一師團長となつた。日露役には留守近衞師團長に補せられ、尋いで第三軍司令官として出征し、旅順攻擊に偉勳を奏し、後奉天戰に參加し武勳赫々たるものがあつた。三十九年一月軍事參議官に補せられ、戰功により、旭日桐花大綬章及び功一級金鵄勳章を賜はつた。四十年勳一等に陞敍せられ、學習院長を兼任大いに華冑子弟の訓育に努められた。同年八月從二位に敍し、伯爵に陞授。大正元年九月十三日明治天皇の靈柩京都に向つて發軔せらるるに當り、御跡を慕ひ奉り、靜子夫人と共に自盡殉死された。年六十四。世これを哀悼せざるものはない。眞に萬世人臣の龜鑑といふべきである。

※乃木將軍の舊宅　長門の城下、長府町の西南半里のところにある。宅地三百坪の一隅に、六、三、二疊の狹い長屋を住宅として、そこに弓、矢、刀、槍等を處狹きまで飾り、緣先に米舂があり、夜具は天井につるしてあつて、實に粗末な、見るも涙ぐましい家である。なほ門といふものはなく、入口に二本の柱をたて、竹をうちつけて、そまつなとびらを二枚入れ、それから出入されてゐた。

※建坪　建物の坪數をいふ。一坪は六尺四方の面積。

※天を蔽ふばかり　杉の木が、天をおほひかぶすやうに非常に繁つてゐるさまをいふ。

※井の水　將軍にとつて、思ひ出の多い井戸の水をいふ。將軍十歲の時、或る寒い日、將軍一口「おゝ寒い」といはれたのを父がきかれて「寒いなら暖くしてやる」と井戸の側につれて行き、大きな水桶に寒水を汲んで浴びせられたといふことである。

※井戸の邊に薫るばかりでない　「梅の香が、大將にとつて由緒ある井戸の邊りに芳香を放つてばかりゐない」といふことは、大將の人と爲りが遠く世界までも梅の香のやうに、馨しい匂を放つてゐるといふことを言ひ表したものである。

※その影は世界に廣がり　大將の名が遠く世界へ知られて、萬人が皆その人格を敬慕してゐるといふことを言ひ表したものである。

※スダン　Sudan. 又スーダン。西大西洋より南ギネア灣に瀕し（隣接地方は佛領コンゴ、白耳義コンゴ及び英領ウガンダ保護地）北緯六度乃至十八度に亙つて、北サハラ沙漠と連り、東はナイルの上流、紅海、エチオピアに至る迄廣大なる地域を占め、面積約七百三十萬方粁に及んでゐる。およそスダンの名稱は、これをアラビア語ではブラト・ユス・スーダン（Blad-es Sudan）と呼んで（黑人國）の義を表してゐる。氣候は氣溫高く降雨多く世界多雨の地に屬す。住民はその大部分は、アラブ人、チブ人、ツアレグ人、フラー人及びネグロ族である。地域は東部スダン、中部スダン、西部スダンの三つに分れてゐるが、本課のスダンは、東部スダンであつて、一に埃及スダンといふ。「埃及スダン」は北は埃及に接し、東はエリトレア、エチオピアに連り、南は英領ウガンダ、白耳義領コンゴ國と境し、西は佛領亞弗利加に接してゐる。現今英國の勢力圈にあつて、面積凡そ二百六十萬方粁あり、住民は約七百萬人の中アラビア人の各種と黑人の雜種。產業は、主に農牧

の業が行はれ、ウルチキビ、椰子、煙草、綿花、藍、護謨等を產する。

※ハルツーム　Khartum. 元スダン地方に於て殊に權勢の中心であつた。青、白ナイルの合流地點を占め、人口五萬、埃及領スダンの首邑である。

※天涯地角　「天涯」とは、そらのはて、極めて遠方の地。他鄕をいふ。「地角」とは、遠くはなれた土地のはて。地の一隅をいふ。卽ち、天涯地角とは、天のはて、地のはてをいひ、極めて遠い地をいふ。徐陵の文に「天涯藐々、地角悠々。」又、韓愈の文に「一在ニ天之涯一一在ニ地之角一。」とある。

※生涯　この世に生きてゐる間。一生の中。終生。終身。「平家物語」卷七忠度都落に「生涯の面目に、一首なり共御恩を蒙らうと存じ候ひつるに」とある。

※犬馬の勞　君主又は他人に對して勞を取ることの謙稱。君の命にしたがつて力をつくすこと。

※英國皇帝　ジョージ五世陛下(George V.)前々英國皇帝。エドワード七世の第二子。長兄アルバート公とともに、一八七六年六月イギリス海軍に入り、練習艦ブリタニヤ號にあること二年の後、三箇年間世界を漫遊し、一八八一年我が國にも來訪された。一八九二年長兄の薨去によつて皇儲に擬せられ、その五月、ヨーク公に封ぜられ、一八九三年ヴィクトリヤ・メリーと結婚した。一九〇一年、父王の卽位とともに皇太子となり、コンウォール公といつた。同年三月、オーストラリヤ、南アフリカ、カナダ等の英國領土を巡遊して十一月八日歸國、ウェールス親王に封ぜられ、一九一〇年五月、父王の死去によつてその後を承け、同月九日ジェームス宮に卽位宣示式を行つた。一九三六年一月二十日崩御、御年七十一。

※戴冠式　coronation. の譯。西洋諸國の君主が、卽位の後に寶冠を戴く重要な儀式。

※守備の任務　城を守り、敵を拒ぐ備をなすそのつとめをいふ。

※ダブリン　Dublin. イギリス、アイルランド東岸にあるアイルランドの首府。人口四十萬餘。商業が盛んで、ウイスキー及び麥酒を以て著はれる。

※敬慕の情　うやまひしたふ心。その人となりをうやまひしたふ心をいふ。

※ハイド・パーク・ホテル　イギリスのロンドンにあり、我が國大使館指定ホテル。公式の使者はここに宿泊する。

※日本使節の一行　勅命を以て遣される日本使者の一團。この時は、陛下の御名代としては、故東伏見宮依仁親王殿下。隨行員としては、乃木大將、東鄕大將等で、明治四十四年六月の事である。

※接待係　接待の役をいふ。「接待」とはあしらひ、もてなすこと。

※萬端の接待　さま〴〵のもてなし。萬事のもてなし。

※モーニング・コート　morning coat. 黑の上衣、縞のズボンを用ひる。禮服の略服、或は紳士の平常服である。

※溫厚篤實　おとなしくて、人情に厚く、實直なること。

※旅順の猛將　日露戰役の際、露國は、旅順に全勢力を注ぎ、天險の利と、更に人力の精工を施してこれを難攻不落の堅城と賴んでゐた。それを、我が軍は乃木大將指揮のもとに三十七年六月下旬から攻圍戰鬪に著手し、三十七年十二月二日休戰。三十八年

一月一日開城の約成り、彼の怖るべき戰爭の終結を見たのも一に將軍の力によるところが多いのである。この戰において、將軍は二子までうしなはれたけれども悲歎の色もなく、日夜部下を督勵されたのである。世人のすべてが、どんな精兵を以てしても三箇年はかゝると思つてゐたのを僅か六箇月あまりの中に陷落の日を見たので、非常に驚歎して今日まで「旅順の猛將」と賞讃、景仰してゐるのである。

※面影　かほかたち。かほつき。髣髴と目さきに見える姿。

※バルカン半島　地中海に突出する南歐三大半島の一つで、その位置最も東にあるため一にこれを近東或は東歐羅巴とも稱する。東は黑海に臨み、東南はマルマラ海、エーゲ海等を隔てて小亞細亞半島に對し、南は亞弗利加洲を望み、北は墺太利、匈牙利、露西亞に境してゐる。半島の地勢は錯雜して到る處山岳丘陵である。海岸は、港灣の凹入が頗る複雜であるけれども斷岸絶壁をなしてゐる。

※ベルグラード　Belgrade　ユーゴースラビヤ國の北端ドナウ河、サベ河の兩河の會合點に位し、この國の首府で、且つ、軍事上、商業上の要地。人口二十四萬二千餘。

※識別　見分けること。みきはめること。

※驚異の眼（きやういまなこ）　おどろいて不思議に思ひながらみつめるまなこ。

※裏切られる（うらぎ）　自分の豫想してゐたことと反對の現象が現れること。ここでは自分の想像と反對であるの意にとる。

※君子人　品格高く德行の備はつた人。ここでは、君子ともいふべき德行の高い人をいふ。論語泰伯篇に、「臨二大節一而不レ可レ奪也。君子人與（カ）、君子人也。」とある。

※奇緣　思ひがけぬ緣。又不思議につながる緣。

※圖らずも　思ひがけなくも、不意に、意外に、等の意。

※餘德　先の人の殘しておいた恩德。宏大なる恩德。

※勃發　にはかにおこること。

※災源地　禍を起した地。ここでは、セルヴィヤの地とオーストラリヤの地を指す。

※土著の人　その土地に住みついてゐる人。その土地に常住してゐる人。

※歡待　親切にもてなすこと。手厚く待遇すること。

※諒解　のみこむこと。合點すること。悟ること。領會と同じ。

※感服　心に感じて、服從または敬服すること。心服。

※動物愛護の精神　動物を虐待するやうなことを避け、これを憫み愛して、十分に保護を加へてやらねばならぬといふ主張、心掛をいふ。

※國民性　國民又は一民族に特有な氣質。即ち、國民を組織する民族とか、又一國の統治權の下に絶對服從の關係を有する人類がもつてゐる特有の氣質をいふ。

※人格　人の性格。人の品格。人の資格をいふ。

※知識階級の人　學問、人格がそなはつて、相當の地位を占めてゐる中流以上の人々を指す。

※同胞　同じはらから。兄弟姉妹。ここは、同一の國民の意にとる。漢書、東方朔傳に「同胞之徒、無所容居。」とある。

※直覺的　經驗又は推理など、間接の手續を經ずして成立する直接の諒解。知覺、判斷、認識の稱を、す

べて直覺といふ。そこで、ここでは、「單に目で見ただけ、耳で聞いただけ」との意に解する。

※共鳴を感ずる　他人と同樣に感ずること。

※將軍の葬式の日　大正元年九月十八日を以て、青山齋場で執行。この日兩陛下の勅使を始め奉り、各宮殿下、昌德若宮、英國御名代コンノート殿下、佛國使節ルボン中將、米國使節ノックス卿、桂内大臣、西園寺首相及び各大臣等、内外顯官名士の會葬があつた。當日正午頃には群衆ひきも切らず、身動きも出來ず、會葬者無慮三十萬に達し、乃木將軍の如き盛大を極めた葬儀は空前で、葬式の威嚴と會葬者の伍列は眞に世界人を驚歎せしめたのである。尙當日銘旗には、「軍事參議官陸軍大將從二位勳一等功一級伯爵乃木希典之柩」と記されてあつた。

※青山の葬場　東京市赤坂區の西南にあたつて、青山北町二丁目三丁目の南方、麻布區霞町に至る廣い平地を占めてゐる。東京市内で有名な齋場で、青山忠成氏の邸園を改めたものである。その廣さ八萬七千坪に達する。東京市の經營に係る。

※小倉の袴　小倉織の袴で、俗に木綿織の袴をいふ。

※形見　亡き人、又は別れた人などを、思ひ出す種となるべき物。形見としてのこした品物。遺物。

※ナポレオン一世　ナポレオン・ボナパルトNapoleon Bonaparte西暦一七六九年(後櫻町天皇の明和六年)に生れ、西暦一八二一年(仁孝天皇文政四年)五月五日死去。傳記の概略をいふと、一七六九年八月十五日コルシカ島に生れ、十歳の時巴里の東南ブリエンヌ陸軍幼年學校に入學、十八歳で砲兵少尉となつた。その後次第に昇進して中將に進み、内國軍令官となり、墺國、埃及征服に從ひ、後、國民の信任を一身にあつめて、一八〇二年まづ終身統領となつたが、後二年元老會の推薦と國民多數の投票とによつて、世襲皇帝となり、ナポレオン一世と稱した。而して爾後露西亞遠征に至るまでの三年間は、實にナポレオンの全盛時代であつて、その勢力圏はバルト海より地中海に達し、全歐羅巴中その威令の及ばない所は、たゞ英國と土國とだけであつた。然るに露西亞遠征において大敗し、一八一四年墺、英普、瑞典、四箇國の聯合軍のためパリーを陷れられ、帝位を却けられてエルバ島に流され、一八一五年再び佛國の南岸に上陸して帝位につき、ワーテルローの決戰で再び破れ、英國のためセントヘレナの孤島に流され、一八二一年五月五日、五十四歳を以て歿した。遺骸は、パリーのアンヴァリード寺院に葬つた。

注　意

1. 乃木大將に關する既習知識と連絡を計りたい。乃木大將の幼時、旅順攻圍戰、水師營の會見等。
2. 乃木大將が日本は言ふに及ばず、世界の人々からまで崇拜される所以を考へさせたい。
3. 大將一代の逸話は澤山あるが、これ等を敷衍して、特に大將の責任觀念、盡忠報國の大精神に感銘させたい。

二三　繪畫の感化

那珂通高

解說篇

作者

那珂通高。明治初期の儒者。梧樓と號した。陸中の人。俊邁にして膽略があつた。特に國典に精しく、博覽多識の人であつた。京都の森田節齋に師事したが、貧窮の爲に按摩の業を以て自活し、僅かに腐滓を以て饑を凌いだといふ。後東京に出て家塾を開き、明治の世となるに及び大藏省に仕官し、文部省に遷り「古事類苑」の編纂に從事中、業半ばにして明治十二年に歿した。年五十二。

引用書

洋々社談。明治八年那珂通高、榊原芳野、黑川眞頼等相集り、文の會を組織し洋々社と稱し、社友相會する毎に互に文章を持ち寄りこれを印刷して同好の士に頒つたものである。

教材

「蓬、麻中に生ずれば扶けずして直し」の語がある。「善人と居れば芝蘭の室に入るが如し」といひ、「孟母三遷」の教もあり、「墨子絲に泣く」ともいふ。その境遇によつて支配されるほどに人間は弱い。これを善に進めるも惡に走らせるも、要は紙一枚の差である。時に魔がさすといふ。こんな場合に何物かに觸れれば、善にも惡にも傾き易いものである。ふと起した惡心を藤房卿の繪に觸れて飜然として善に返つたといふ一篇の趣向は、單に卒讀すべきではなく、我々に何物か強い暗示を與へるであらう。

指導篇

扱方

下總國の歌人茂足が若い時東海道から京に上つた。途中、藤原藤房卿の念じたといふ觀音の前で、五十餘りの男がさめ〴〵と泣いてゐた。その男が次の樣な話をした。この男は稚い時から大阪のさる商家に奉公してゐたが、その主人の子が放蕩の爲父に勘當された。母の計ひで、この男を附添はせ、上總國東金の出店に愛兒を頼みつけることになつたが、若主人は道中も心改まる風もない。こんな頼もしげない主人についてゐては、將來芽も出まいと、惡心を起し、主人の就寢後脇差を奪つて逃亡せんとした。その折襖の繪に氣附いた。藤房卿が後醍醐天皇の御供をして大和へ落ちる途中、松蔭に袖を敷いて帝を寢させ奉つてゐる圖である。これを見て藤房卿の義心に感じ、惡心を思ひ止つた。といふ主題によつて展開された本課の大意が摑めれば、教訓的教材として十分の意義が達せられる課である。

展開

敍述の推移を辿つて、左の六節に分けて見ることが出來る。

第一節――冒頭(から)三行目(まで)。以下の話は筆者が茂足から聞いたといふことを斷つてゐる。

第二節――茂足少き時(から)諸共に立出でぬ(まで)。茂足が藤原卿ゆかりの觀音の前で、泣いてゐる男に逢つたこと。――以下はこの男の話になる。

第三節――この男は津の國大阪の人にて(から)その金も殘りすくなになりにけり(まで)。勘當された若主人のお伴をして上總國に下ること。

第四節――明日江戸より船出せば(から)酒勸めて寢させぬ(まで)。若主人の心改まる風もないのを見て惡心を起すこと。

第五節――夜更けて後にそと起出で(から)繰返してその過をうちわびたりき(まで)。藤房卿の繪姿を見て改心すること。

第六節――かくて東金に到りて後も(から)終り(まで)。そのお蔭で現在は幸福な身分になれたこと。

解　釋

※**古河驛**　今の古河町、下總國猿島郡の西北隅にあり、土井氏八萬石の舊城下。陸羽街道の衝に當り、市街は殷賑であつた。驛は宿場の意で、古河の如き都會についていふべきではないが、街道にあるので、この語を用ひたのであらう。

※**茂足**　「シゲタリ」とよむ。傳不詳。

※**陸奥**　「ミチノク」とよむ。奥羽地方の古稱。今の陸奥國ではない。ここでは陸中國盛岡を指してゐる。

※**石部**　近江國甲賀郡にあり、草津の東方二里二十五町に位し、今は鐵道停車場がある。萬葉集に、「しらま弓石邊の山の常磐なる命あらばや戀ひつつ居らん」とある石邊はこの地で、一名所となつてゐる。

※**水口**　近江國甲賀郡にあり、加藤氏一萬五千石の舊城下で、今も東海の一驛となつてゐる。

※**萬里小路藤房卿**　吉野朝の忠臣。後醍醐天皇に仕へて中納言に進み、左兵衛督、檢非違使別當を兼ね、正二位に敍せられた。元弘の變に常陸に流され、高時伏誅後、京に歸り、論賞の事に當つたが、天皇を諫めて用ひられず、建武元年北山に入つて僧となり、その行く所を知らない。元弘の變に後醍醐天皇は神器を奉じ、藤房を隨へられ奈良へ行幸され、ついで山城の笠置山にお出でになつたが、笠置も陷つたので、正成の赤坂の城をさしてお逃れなつた。「忝くも十善の天子が玉體を賤しき者の間に伍し、人目をさけてお忍びなさるのである。如何にもして夜の中に赤坂城へと御心をつくされたが、假りにも未だ習はせ給はぬ御歩行であるから、一足には休み、二足にはお立止りなさるのであつた。とある木蔭に立寄らせられた時、下露がはら〳〵と御袖にかゝつたのを天皇は御覽ぜられて、『さして行く笠置の山を出でしよりあめが下には隱れがもなし』と詠まれたので、御供の藤房は涙を押へて、『いかにせん頼むかげとて立寄ればなほ袖ぬらす松の下露』とお答へ申し上げた。やがて賊兵がおさがし申して、終に六波羅へ移し參らせた。」(國民日本歴史)

※**その跡のゆかしさに**　その古跡が何となく見たいので。「ゆかし」は何となく慕はしい、知りたく思ふ、見屆けたい、なつかしいなどの意に用ひる語。

※観音寺　詳かでない。

※念じ給ひしといふ　祈念をなさつたといふ。

※観音　観世音の略。佛語で、世間の苦悩の音を観じて、大慈悲を垂れるといふ菩薩。菩薩は、佛に次ぐ位置をいふ。

※安置　佛像などを据ゑ置くこと。

※うちつけに　だしぬけに。唐突に。やたらに。むやみに。

※驛路　驛即ち宿場のある街道をいふ。

※如月　陰暦の二月の古稱。如月は漢語の二月の別稱でこれを宛て用ひたのである。

※日影暖かなる所　暖かく日のあたつてゐる場所。日影は日の光、又は日そのものの意に用ひる語。

※四方山の物語　世間話。何といふことのない世間の話。四方山はもと四方にある山の意で、それより轉じて、諸方、世間、世上、天下などの意に用ひる語。

※所縁　ゆかり、ここでは、血統などの關係の意。

※世に似ぬ歎　世間なみでない歎。普通の人とちがつた歎。後文にもある通り、自分が昔あさましい心を起したが、襖に畫いてあつた忠臣藤房卿の繪を見て非を改めたことがあるので、今ここに卿の古跡に來てそれを思ひだして落涙に及んだことをいつたのである。

※涙せきあへざりけるを　流れる涙をとめることの出來なかつたのを。「せく」はせきとめる意。

※懺悔　過去の罪惡を悟り後悔すること。又過去の罪惡を悔いて、神佛に告げて謝すること。ここでは後の意。

※途すがら　途を行きながら、みちみち。途上、途中の意に用ひることもある。

※語り聞えん　語り申さう。「聞ゆ」は他の動詞に添へて敬語とすることがある。ここの用法もそれ。

※津の國　攝津國に同じ。

※游蕩　あそんでばかりゐて、しまりのないこと。身もちのわるいこと。

※勘當（かんだう）　尊長の氣にたがつて、緣を絶ち、家を追拂はれること。義絶。勘氣。もと、罪を勘へて、法に當てるの意。

※母刀自　母といふに同じ。刀自はもと戸主（とじゅ）（屋内にあつて諸事を主（つかさど）るもの）の意で、女子を呼ぶ稱に用ひる語。

※いとほしがりさ　かはいさうに思つた。

※東金　今の東金町。上總國山武郡。江戸時代大家の息子で放蕩で勘當された者は多く上總の東金や木更津にやられたことが諸書に見える。

※出店　今いふ出張店。

※其所守る人に云々　その出張店を監督する人に、子息の身上を賴みたいと、心に浮んだけれども。

※心許なくて　氣にかゝるので。心配になるので。

※お事は　お前は。

※心安からん　安心であらう。

※家分けて得さすべし　分店させてやる。この家のわかれとして店を持たせようの意。

※具して　附きそつて。

※行きてよ　行つてくれ。

※若き人の習にて　若い人に普通あることで。

※中山道（なかせんだう）　木曾街道ともいふ。江戸より板橋を經て、西北上野に入り、碓氷峠を越え追分に至つて、善光寺街道と別れ、西南に折れて諏訪平原を過ぎ、木曾

山中に入り、美濃近江を經、草津で東海道と合し、京都に入る。總里程百三十八里十九町餘。

※蕨驛（わらびえき）　今の蕨町。埼玉縣浦和市の南方一里許にあり、今は東北線の一驛となつてゐる。長祿年間、關東探題澁川義鏡の居城地であつたと稱せられ、今もその城址が遺つてゐる。

※同じむれのえせもの　同類のつまらぬ者。「えせもの」は似而非者と書き、いかゞはしいもの、卑しいもの、馬鹿ものなどの意にも用ひることがある。

※とにもかくにも　なんにしろ。いづれにしても。

※よしなき人に　くだらない人に。つまらない人に。

※身を立てよすがを求めんには　立身をし、よいてづるを得ようとするには。「よすが」はよるべ、たより、つてなどの意。

※歸らばや　歸りたい。戻つて江戸に行きたいの意。

※とにもかくにもすべかりしを　なんとかする筈であつたのに、惜しいことをしたの意。

※脇差　腰脇に差す刀。守刀。大小兩刀の中の、小刀の意にも用ひるが、ここではその意でない。

※物好（ものこのみ）　道樂。特殊なものを好むこと。

※ついえもて　費用をかけて。費用を以ての意。

※賣りしろなさんには　賣つて錢としたならば、賣代は品物を賣つて得た金の意。

※心一つ　一料簡で。ひとり考へで。ここでは、内々ひとりで考へた意。

※謀りすまして　十分にたくらんで。

※さらぬ樣にもてなしつゝ　そんなことはないやうな風をして。「もてなす」はここでは、先方をもてなすなどの意でなく、「源氏物語」帚木に、「安らかに身をもてなし振舞ひたる、云々」とあるやうに、或態度をする、或擧動をするなどの意に解する方がよいと思ふ。

※今宵限りの旅寢云々　明日は目的地に著くので、今晩が旅先で寢る最後であるからの意。

※言ひこしらへて　いひなだめて。「言ひこしらへ」は上手につくつていふ。とりつくろつていふの意にも用ひるが、ここでは前の意に解してよいと思ふ。

※ふすま障子　襖、からかみ（唐紙）の意。もと「障子」といふ語は、すべてへだてになるものの稱で、明障子（あかり）（今の障子）、襖障子（今の襖）、衝立障子（ついたて）（今の衝立）などと區別して用ひたのである。それ故、單に障子といへば、これ等の何れにも通じた語であつたのである。

※見も入れざりし　深く氣をとめて見もしなかつた。

※形　繪。單に形、姿などの意ではない。

※あなあさまし　ああ、とんでもない。「あさまし」はあきれかへる、意外である、興がさめる、淺はかであるなどの諸意に用ひられる語。

※かゝる習はぬ憂き目をも見給ふものを　このやうな今まで經驗のないつらい目にもおあひなされるのに。自分の衣の袖を敷いて、帝をその上に寢させ奉るやうなことをいつたのである。

※思ひなりにけん　思ふ氣になつたのであらう。

※額づき　丁寧にお時儀をしたこと。額を地につけて拜禮するの意。

※あかぬことなき　不滿なことのない。

※さてのみ居らんも　そのやうに何もせずにくらしてゐるのも。

※後めたさに　やましいので、氣がとがめるので。

※何時とても云々　いつと限らずこの寺には參詣は

したけれども。

※今日しもふと思ひ出でければ　いつもは單に參詣して歸るだけであつたが、今日に限つてふと昔のことを思ひだしたのでの意。

※世にはあり經べき　この世の中にくらして行くことは出來ないの意。

※はふり落ちて　溢れ落ちて。

※軍物語の書　軍記。「平家物語」・「保元物語」・「平治物語」・「太平記」などの軍のことを書いた書物をいふ。かの藤房卿の勤皇の事蹟は太平記に記載されてあるのである。

※その時しも　昔、襖に畫いてあつた、藤房卿の繪を見た時に丁度の意。

※この事を思ひ出でて　軍物語で讀んだ、藤房卿の事蹟を思ひ出しての意。

※まさなき心　不正な心。惡心。

※おきて待り　定めてあります。規定してあります。

資料篇

參考文

淮南子(えなんじ)說林訓に「楊子逵路を見てこれを哭す。其の以て南すべく、以て北すべきが爲なり。墨子練絲を見てこれに泣く、其の以て黃にすべく、以て黑くすべきが爲なり。」とある。その本の同じくして末の異なるのを憫んだ語である。たゞわづかに一歩の差はやがて南北千里の差となるべく、練絲もその染め方によつて、或は黃となり或は黑となつて著しい相異を生ずる。これは人間の情にも見ることが出來る。たゞ一瞬の情の動きはやがて善となり、惡となる。それは誠に紙一枚の差がやがては非常な相違となつて拾收し得ない境遇をつくるものである。我等はその境遇の感化に、重大な然も微妙な働を認めないでは居られない。「魔がさす」といひ「一時の出來心」といふ。それほどにもろくも動きやすい人間の心である。善に進み、惡に走るのもたゞ一瞬の心の變化である。我等は常に境遇の支配に注意して敢然として惡を排除すべく、特に本課の說話に肅然襟を正さねばならない。

二四　師の恩

解說篇

作者

柳澤淇園。江戸時代大和郡山藩の重臣。名は里恭、字は公美、淇園はその號である。柳里恭とも呼ばれた。人となり聰明英敏で、學は和漢に通じ、詩賦、文章、和歌、俳諧を善くし、傍ら天文、易占、本草、佛典に精通した。武術は弓、馬、刀、槍に長じ、音樂は三絃尺八、琴等往くとして可ならざるはなかつた。又篆刻にも巧であつた。書は初め大通寺の南谷和尙に學び、後董其昌の風神を傳へ、畫は南宗畫を學び彩色の法は祇園南海に受けた。誠に多才多能で人の師たるべきもの十六藝に達してゐたといはれる。性寬厚で人を愛し客を好み來客のある每に門を閉ぢて數日去る事を許さず賢愚貴賤を問はず、寄食させたもの常に數十人に及んだといふ。嘗つて多くの從者を率ゐ馬上にて野路を過ぎた際、たま〳〵瞽女が絆歌して錢を乞ふものあるを見て强ひてその絃をとつてこれを彈じ、多くの金を與へて去つたことや、又莫逆の友大雅が吉野に遊ぶの途、遊資を借る爲に淇園の家に至り、强留されて去ることが出來ず、吉野の花期の過ぐる事を思ひ、百方乞へど許されず、反つて門守に命じて益〻守を嚴にしたので、遂に夜分密かに墻を越えて逃げ去つたといふやうな逸話も殘されてゐる。寶曆八年九月歿、年五十三（一說に五十六）。著に「文寶雜譜」「獨寢」・「雲萍雜志」等がある。

引用書

雲萍雜志。淇園の隨筆。多くは勸善懲惡の說話である。木版本もあるが、吉川弘文館の明治二十五年及び三十八年發行の百家說林本があり、大正二年發行の有朋堂文庫にも收めてある。

教材

惡を惡として峻嚴に制裁することは、一般的に行ひ易いことであるし、又敢へて咎め立て出來ぬことである。だが惡は惡として認めながら、そこに人間性を加へて溫い抱擁を爲し、進んで善への轉向へと導くことは、極めて特殊な人でなければ出來ない難さがある。本課の文は惡に陷つた弟子を救ふ師僧の大慈の心を物語つたものであつて、法的に制裁しようといきまく朋輩の僧と、慈悲忍辱の衣に溫く惡僧を包んで善の開眼を行はしめる師僧の心持がよく描き出されてある。生徒達の持つ正義觀をみだすことなく惡と善とへの取扱を敎へる本課は情操上、敎育上極めて興味ある材料であらう。

指導篇

扱方

近世文であるが、極めて平易に書下されて居り、特に注意すべきことはない。全文のポイントは終りの師僧の言に

あることはいふまでもない。師僧の抱擁力の大きい慈愛心が理解されゝば、それでよいのである。

展開

江戸時代指折りの才人の筆だけあつて書くところにいさゝかのそつもない。必要な對話だけを書き留めて、それを地の文の如く巧みに行使し、筋の進行から後半のガラリと變る邊りを綺麗にこなしてゐる。筋の通つた短文であるから、強ひて段落を分つにも及ぶまいと思ふ。

解釋

※下谷　今の東京市下谷一帶の地。江戸時代には、上野、湯島の下卑濕地の汎稱である。故に外神田にも及び下谷御成街道、下谷和泉橋といひ、淺草鳥越にも及び下谷向柳原、下谷小島町、下谷七軒町などともいつた。今の下谷はもとに比べると縮小してゐる。その北の高地を上野とし、上野の北を谷中とし、日暮里村としてゐた。

※高岸寺　「御府内備」考にその名が見えてをり、安政年間の江戸圖によると、今の上野驛の東北側の邊にあつた。然し、この寺の緣起、宗派は未詳である。

※身持　おこなひ。品行。行跡。

※律義　佛教語。戒律を持し、儀訓を守ること。大乘儀章に「行依律戒故號律義」とある。又、義理を守ること。實直なこと。正直なこと。ここはどちらに解しても差支へないが、僧に關することであるから、前者とみておいた方がいゝであらう。

※寺の爲ともなるべき事　寺の爲になるであらうこと。寺の爲になること。「も」は係助詞で、僧「自身の爲とも」を略した形であるから、單に「寺の爲云々」といふのとは、心持に於て多少違ふ。

※心を盡す　こゝろのたけをつくす。一所懸命に心配し、つとめる。

※戒行　持戒の行をいふ。佛の制するところの律法を受持し、三業(身口意より起る所業)に於て非惡を制し、爲さしめざる規定。又進んで善法を行ぜしめる規定をもいふ。「戒行をも保たで」とは佛が戒められた身口意の非惡を守ることなくの意。

※いさかひ　諍。いひあひ。こうろん。あらそひ。

※萬づ私云々　佛の道は守らで、萬事私事が多かつたが。「私」は內證なこと、公然でないこと。

※什物(じふもつ)　日用の道具。家具。史記五帝紀註に「什物謂常用者其數非一、故曰什。」とある。邦語では「ジフモツ」と讀み、祕藏のたからもの。ほうもつ。什寶。ここでは、どちらの意に解してもいいが、後の道具に對して邦語の意味、卽ち寺の寶物の意と見てよいと思ふ。

※一人の僧　他の一人の僧、卽ち身持律義の方の僧。

※諫(いさ)を加ふ　諫言する。いさめる。

※住持　一寺の主たる僧侶。住職。

※ひとまづ云々　一應いひきかせて見ませう。「諭す」いひ聞かせて會得させる。說きさとらせる。

※嚴しく戒めたるまゝにて　嚴しくその非行を戒めただけで、その僧のいつたやうに、別段この僧を放逐するやうなこともしないで……。

※……賣りたるを聞きて　佛具を取出して賣つた。その時は知らなかつたが、後で、その事を誰からか聞いて。

※惡僧　先には「かの僧」といひ、ここでは「惡僧」とい

ふ。以て、この僧が、他の一人の僧の惡行を憎むの心の先よりも遙かに昂進してゐることが知られる。

※…是非に及ばず　この句と前の句との間に、「この僧の惡行は益〻つのつて、」といふ意味の語を補つてみると、よく意味が一貫する。いやはや何ともいひやうがありません。

※我は行く〳〵云々　「我は……恐れ思へり」と續く。この惡僧を、このまゝにしておいたなら、遂にはこの僧のために、この寺に不祥な事が起り、延いてそれが私の身にもかゝるではなからうかと、私は心配して居ります。「恐る」は恐怖の意ではなく、心配する、きづかふ意。

※彼を追出し給はずば　この下に、「私はあんな惡僧と一緒にこの寺にゐることは出來ませんから」といふ意を補つてみるとよい。

※涙を浮べ　涙ぐんで、この句は後の住持がこの僧に答へて、「さにあらず云々」の弟子を思ふ切々たる師の言葉となる。住持の弟子を愛する眞心の現はれであるから決して輕々に見逃し難い。若しこの時の住持のこの涙を解釋してみるならば、「あゝこの僧のいふこともつともだ。この律義な、何事もただ寺の爲よかれと心を盡くすこの僧としては、あの惡僧の所業はどんなに目にあまることであらう。だが、これといひあれといひ、等しく自分の弟子には違ひない。等しく弟子たる以上、いづれ、にくいいとしの差別はないが、あの惡僧を今この寺から放逐したらあれはどうなることだらう。佛緣薄きあれの業の深さ、今また師の愛からまで捨てられては、彼はもはや誰からも救はれることが出來ないであらう。それとはかはり、この僧はもはや佛の救ひに入つてゐる。自分がみてやらなくとも、佛から捨てられるやうなことはしてくれぬだらう。彌陀の慈悲は惡人の上により強く輝く。さうだ、自分は、かはいさうだがこの僧の願を許し、かの惡僧は及ばずながら自分の慈悲の中に、佛の道を見出させてやらねばならぬ。然し、これ程寺を思ふこの僧を、あの僧故に寺を出さねばならぬとは、……これも佛の慈悲、何事も佛の御胸にあること」といふやうな複雜した思ひが籠つてゐるのである。

※さあらば　さうなら。お前が、そのやうにいふなら。

※大いに云々　この住持の深い心を度ることが出來なかつたのである。

※思ふものから　「ものから」はものながらの略。……と思ふのに。

※近頃　「近頃殘念至極のこと」「近頃無念のこと」等と用ひて、この近頃にはこの頃中でといふやうにはつきりした意味があるのではなくて、ほんの輕い意味で添言のやうに慣用される。

※えこの心　「えこ」(依怙)はかたひいき、へんばの意。一方ばかりかはいがるへんばな心。

※僧一人の勤　僧侶として一人前の勤。一人前の僧としての勤。

※罪人とならんも云々　破戒の罪、什寶、佛具を盜み出して賣つた罪に依つて。

※我が德も云々　この寺から罪人を出したとあつては自分の住持としての德もすたつてしまひ、その上また一人の弟子を失くしてしまふものである。

※彼が命をも延し　罪人として捕はれる——破戒、竊盜の罪に依つて——そして、そのために斬罪に處せられる。彼をこの寺にとゞめておくときは、罪人と

して捕はれることもなく、隨つて彼の生命には別條がない。即ち「彼が命を延し」といふ所以である。

※教誡　をしへ、いましめること。

※それを樂しみに　彼が善心に立返ることがあるであらう、そのことを樂しみに……。

※やがて　ほどなく。まもなく。

※……とぞ　といふことである。

資料篇

參考文

九十九匹の羊よりも迷へる一匹の羊の方に愛をそゝいだのはキリストであつた。九十九匹の羊の數の大きさを顧ず一匹の羊に愛をそゝいだのは、迷へる者罪ある者こそ本當の愛を必要であるとしたからである。本課の文と似寄つた話としては仙崖和尚の物語がある。仙崖和尚の弟子中にもこの惡僧に似た者が多く、夜になると寺の塀側に腰かけを持ち出し、それを足臺にして塀を乘り越え、惡所通ひをしてゐた。それを知つた仙崖和尚は或日の事、夜明け頃彼等の歸り來る塀の側に來て坐禪を組んだ。外から歸つて來た衆僧は何時もの足臺とは感じが違ふなと思ひながら、和尚の頭を踏み傳はつて降り、踏み傳はつては降りた。ふと氣づくと、樣子が違ふのも道理何時もの足臺の役は師の僧が勤めてゐたのであつた。無言の教に眼ざめた衆僧が本課に出てくる惡僧の樣に心を入れ更へたことはいふまでもない。峻嚴な法的制裁よりも、溫い、魂に食ひ入る愛の訓戒こそ、教授者も生徒も大きな力とさとるべきであらう。

挿畫解說

附　筆者略歴

御旗の光（口繪）

石川寅治筆

この圖は昭和十二年の五月下旬、東京三越本店に於て、海軍記念日に因んで開催された海洋美術展覽會に出品された油繪である。大きさは十號大（一尺五寸――一尺七寸五分）。この圖は元來新たに竣工成つた海軍館（東京澁谷區原宿三丁目にあり、昭和十二年五月二十一日開館）の壁間を飾る圖の下繪として描かれたものである。彼の歐洲大戰に際し、我が帝國海軍の一部の艦隊は、遠く印度洋・地中海にまで出動して、聯合國運送船隊の掩護に任じ、大いに功績を立てたのであるが、本圖はその情況を正確な資料に基き如實に描いたものである。圖の上部にカムフラージを施して一列縱隊に並んで行く船は、濠洲の運送船隊である。左下方に荒浪を蹴立てて驀進して行く船は、我が海軍の驅逐艦であることは、後部に揭げられた旭日の軍艦旗によつても知られるであらう。かうした畫材は、ともすれば少年雜誌の口繪のやうに卑俗なものになり易いのに、嫌味を感じさせない所は、さすがに大家の作であると思ふ。

なほ現在海軍館の壁間に揭げられてゐる圖は、題材はこれと同じであるけれども、圖柄は異なつてゐる。商船並びに驅逐艦の向きが違つてゐる。それは前に言つたやうに、本圖を下繪として、今一枚描き、それが海軍館に納められたからである。

【略　歷】

筆者石川寅治氏は明治八年高知市に生れた。十七歳の時、東京に出で、小山正太郎氏の不同舍塾に洋畫を學んだ。明治三十四年塾友滿谷國四郎、吉田博、永地秀太、中川八郎等と共に明治美術會を改造して、太平洋畫會を起し、展覽會を開催して各自の作を發表すると共に一方研究所を設けて、爾來二千數百名の畫人を養成した。この研究所が今日の太平洋美術學校の前身である。明治三十八年から二箇年に亙り歐米に遊學し、四十年東京勸業博覽會に出品して三等賞を得た。文展には毎回出品して、褒狀一、三等賞一、二等賞一を受領し、大正七年から推薦となつた。帝展には第一回から展覽會委員に擧げられ、數度審査員を勤めた。發表作の主なるものには、「菊」・「桃の節句」・「港の午後」・「高尾港」・「驟雨の徴」・「雨後」・「化粧」・「野尻湖」・「少女」・「鏡の前」等がある。一方太平洋畫會には幹部として重きをなし、同會の展覽會への出品も多く、宮内省御買上の榮に浴した繪も少くない。明治神宮外苑聖德記念繪畫館には「臺灣入城」の大壁畫が掲げてある。畫風は現實的な描寫に獨得の技法を持ち、寫實的手腕に於ては當代の一人者と稱せられる。色調は強く、鮮麗な色を用ひる。題材には光るものを好んで描くといはれるが、水や船を題材にした繪の多いのもその現れかも知れない。

勿來關（一枚刷）

谷口香嶠筆

この圖は嘗て筆者が賀陽宮殿下の御所望によつて、謹寫し奉つたもので、現に同宮家に御祕藏になつてゐる。本書のために特に撮影御許可になり、ここに掲載するの光榮に浴したのである。圖は勿來の關に於ける義家を描いたもので、侍烏帽子水干行縢姿の武者が義家である。近世歴史畫家の巨擘、考證家の泰斗と呼ばれた人の作だけあつて、圖中の人物、服裝等、細微に至るまで行屆いたものである。

【略　歴】

筆者香嶠氏は京都の人。元治元年八月に生れた。本名は辻槌之助。幼より聰明で、一を聞いて十を知るの才があつたので、人、異名を才槌と呼んだといふ。後、故あつて、辻家を出で、谷口家を繼いだ。二十歳の時幸野梅嶺の門に入つて學んだ。現代京都畫壇の巨星、菊池芳文、竹内栖鳳、都路華香はその學友であつた。氏は歴史畫に秀で、また花鳥をよくし、内國の諸展覽會に出品して屢〻賞を得、パリーの世界博覽會に出品しては金牌を得た。文展第四回及び五回には日本畫の審査員となつたが、大正四年五十二歳で歿した。その發表作は文展第一回に「山嫗」（三等賞）、第四回に「四季花卉」、第五回に「羅浮」等がある。嘗て京都繪畫專門學校及び京都美術工藝學校に教鞭を執つたこともある。猪飼嘯谷、小早川秋聲、伊藤小坡等は當時の門下生である。

道灌卽智（一四頁）

小堀鞆音筆

本圖は道灌が遠くなり近くなるみの濱千鳥の歌から潮干を知つたといふことを題材としたもので、大正七年の美術

協會展覽會五十八回展に出品したもの。大きさは尺八絹本で餘り大きいものではない。氏の畫風は全く古土佐の法に則して古筆を守つたものであるが、新しい試みに失する處なく、色彩にも鮮かさと落著とを見せてゐる。

【略　歴】

筆者鞆音氏は、元治元年下野國安蘇郡旗川村に生れた。川崎千虎について古土佐を學び、後東京美術學校助教授となり、明治三十一年日本美術院に入り、四十年再び美術學校教授となつた。文展には第一回以來日本畫審査員となり、故實有職に明らかで、古土佐の筆意を用ひる點で當代第一であり、帝國美術院會員でもあつたが昭和六年物故した。門下に名をなす人多く、磯田長秋、川崎小虎、太田天洋、伊藤江雲、川船水棹、山川永雅、安田靭彦、小山榮達、尾竹國觀等はそれである。

義家匡房を訪ふ　（一七頁）

谷口香嶠筆

源義家が關白賴通に謁し、奥州に於ける軍物語をしたのに、大江匡房がこれを聞いて、「將器ではあるが、未だ兵法を知らぬ。」と獨言したのを聞いて、匡房の退出を要し、敬禮して門弟となり、後三年の役に雁行の亂れるのを見て伏兵あるを知つたといふ古事談を題材としたもの。圖中沓を履かうとして入口に立つてゐる衣冠姿の人は大江匡房であり、庭上に腰を屈めてゐる烏帽子水干姿の人は義家である。本圖は香嶠氏晩年の作である。

【略　歴】

一枚刷「勿來關」の筆者略歴を參照のこと。

三井高利　（五二頁）

奥村政信筆

この畫像は男爵三井八郎右衞門氏の祕藏にかゝるもの。高利及び妻女を描いたものの一半である。圖の右方に「松樹院長譽宗壽大士」とあるのは、高利の法名である。

享保時代の越後屋　（五五頁）

享保年間に於ける越後屋の商況を描いた版畫。享保は今を去る約二百年前で、高利の歿後四十年程に當るが、當時既にこの大をなしてゐたことが窺はれる。

【略　歴】

筆者政信は號を文角といふ。芳月堂、丹鳥齋、觀妙、梅翁等の別號がある。江戸の書肆に生れ、通稱本屋源八と呼ばれた。政信作の紅繪は着色の種類が少く、紅と草綠とを筆で着色し、版畫として頗る上品なものである。なほこの越後屋の圖に於て、不完全ながら透視畫法が用ひられてゐる點が注目すべき所で、二百年前既に泰西文明を酌んで研

究した跡が歴然として見られる。この描法がまた後人に大なる影響を與へた。

巖　島　（七一頁）

山口玲溟筆

この圖は昭和五年に於ける帝展第十一回に出品された日本畫である。五尺――七尺あまりの大作で、絹地に濃厚な色彩を用ひ、可なり裝飾的效果を擧げるに成功した圖である。

【略　歴】

筆者玲溟氏は名を松之助といひ、明治二十七年京都市に生れた。畫を菊地芳文に學び、初め松齋と號し、十九歳の若年にして文展第六回に「今朝の秋」圖の入選作がある。續いて第八回に「鬪鷄」、第九回に「秋の雨」、第十一回に「花の頃」が入選、帝展では第六回から號を玲溟と改めて毎回出品を續け、昭和五年帝展推薦となり、以後無鑑査出品の榮を得てゐる。氏の實弟もまた華楊と號して帝展に特選賞を得、推薦者となり、兄弟共に京都畫壇の若手花形である。

山嶽の爽氣　（一枚刷）

山元春擧筆

この圖は昭和五年夏、三越本店に開催された第六回淡交會に出品された日本畫である。大きさ二尺五寸に五尺五寸のもので、筆者が得意として、好んで描く日本アルプスに材を得たもの。雲に包まれる山、山湖、お花畑等にも氏特有の色彩が發揮されてゐる。

【略　歴】

筆者春擧氏は名を金右衞門といひ、明治四年滋賀縣膳所に生れた。幼時より畫を好み、初め野村文擧に師事し、次いで森寛齋の門に入り、畫技を學んだ。明治二十四年日本青年繪畫共進會審査員となり、「金華岩室」を出品して二等賞を得、三十年には全國繪畫共進會に「荒村暮靄」を出品して二等一席となつた。當時寫眞に熱中して寫生の方法に斯技を應用し、また油繪を修めて自然の神髓を把握することに努めた。三十七年セントルイズ萬國博を機として米國に遊ぶ。四十年文展審査員となり、大正六年帝室技藝員に擧げられ、同八年帝國美術院會員となつた。その畫は、健筆縱横、意氣雄壯、常に竹内栖鳳と京都畫壇に角逐して、龍虎爭珠の偉觀を呈したが、昭和八年七月歿した。年六十三。川村曼舟、庄田鶴友、小村大雲、林文塘、玉舍春輝、西井敬岳、窠本一洋、栗林太然、岡文濤等は何れも氏の門下の俊足である。なほ山元春汀は氏の實子である。

お花畑の雷鳥　（九七頁）

玉井敬泉筆

この圖は昭和四年の帝展第十回に入選した日本畫である。日本アルプスのお花畑の雷鳥を純寫實的に制作したものである。お花畑を背景に、雷鳥が子をはぐくむ可憐な樣がよく描かれてゐる。

【略歴】

筆者敬泉氏は名を猪作といひ、明治二十二年金澤市に生れた。明治四十年石川工業學校を卒業、山田敬中、結城素明に師事して畫技を修めた。現在、日本畫會の會員になつてゐる。文展第八回に出品して以來、本圖まで出品なく、その後第十一回に「山の秋」、第十二回に「高山の夏」の發表があつた。高山に於ける花鳥を描くのを得意としてゐる。

昭和十三年六月十五日印刷
昭和十三年六月十八日發行

國語科教授の實際
—帝國實業讀本提要卷三—

著者　冨山房編輯部
發行者　合資會社　冨山房　東京市神田區神保町一丁目三番地
代表者　坂本嘉治馬
印刷所　東京印刷株式會社　東京市深川區白河町四丁目一番地

發行所　合資會社　冨山房　東京市神田區神保町一丁目三番地　電話神田自二一七一—至二一七八番

終